
～傭兵達の挽歌～ PSPo2i外伝

砂布巾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～ 傭兵達の挽歌～ P S P o 2 i 外伝

【Nコード】

N 1 4 5 8 Y

【作者名】

砂布巾

【あらすじ】

グラール太陽系。

SEED事変という世界滅亡の危機は乗り越えたものの、その傷跡は深く、原生生物の凶暴化、さらには資源枯渇と新たな問題が浮上しているこの世界。

ヒューマン、ビースト、ニューマン、キャスト、そしてデューマン。

いずれの種族であろうと、この世界に生を受けたからには選ばねばならない。

生きる為の戦い。自分が自分を誇る為の闘争の方法を。

これは3つの惑星に生きる数人の傭兵達の生き様を表した物語。

※この小説はファンタシースターユニバース（PSU）及びファンタシースターポータブル（PSP）シリーズの世界設定を元にした二次創作小説です。

（序章） 討伐任務（前書き）

はじめまして、砂布巾と申します。

こちらはPSP用ソフト、『ファンタシースターポータブル2インフィニティ』の世界設定をもとに、筆者の気まぐれでまったり進めようと始めた二次創作小説になります。

何分小説など書くのは初めてですし、誤字や日本語の誤用等、お見苦しい点はあるかと思いますが、進行を暖かく見守って頂ければ、筆者が嬉しさに涙します。

また世界設定はPSU・PSPo・PSPo2iの公式設定を遵守するつもりですが、ゲーム以外ではネットから得た知識を元にしていきますので、明確な間違い等発見された方、暖かくご指摘頂けたら筆者が感激でひれ伏します。

エミリアやイーサンといった公式キャラもいずれは登場予定ですが、基本は世界設定を利用したオリジナルによるオリジナルストーリーの為、そうしたものが苦手な方は申し訳ありませんがUターンをお願いします。

では、しばし筆者の駄文にお付き合い下さいませませ。

〈序章〉 討伐任務

惑星モトウブ。

荒涼とした夜の西ググ砂漠をフロードーバイクで疾走する。

バイクのライトに照らされる風景は、彩りなど一切ない殺伐とした砂の世界。

資源枯渇問題が一番深刻に影響しているのは、自然が乏しいこの惑星じゃないだろうか。

『目標補足。ディマゴラス種。5時の方向・距離700。こちらに気づいた様子ですね。高速飛行しながら直線的に向かってきます。』

バイクを運転しながら、らしくない物思いにふけていた俺の耳に、後部座席からターゲットを目視した相棒の冷静な状況説明の声が入る。

『接敵まで20秒。大きさ・外皮の硬質化具合から、情報通り戦闘力Aランク相当と予測されます。これなら問題は無さそうですね。』

淡々と説明する声には余裕さえ感じられた。
頼もしい相棒の様子に自然と頬が緩む。

『ここら辺からやつこさんの縄張りって訳か。ソアラの情報はさすがに正確だな。高い情報料ふんだくるだけのことはある。……よつと！』

今回の依頼を振ってきた馴染みの情報屋に賛辞をつぶやいた後、標的を挑発するべくフローダーバイクを蛇行させる。

『わっ!!』

突然の蛇行運転にバランスを崩したのか、後ろに乗った相棒が俺の背につきながら声をあげた。

運転の為に前を向いたままの俺には見えないが、きつとキャストでありながら人工皮膚で感情豊かに動くその端正な表情は、俺への不満丸出しになっていることだろう。

『マースの運転は荒すぎです！戦闘と関係無しに事故死なんかしたら、間抜けな傭兵として歴史に名を残しますよ？』

『ハハッ、イカすなそれ。』

相棒の文句に軽口を返し、バイクのスピードを緩める。

後方の闇から、縄張りを荒らした侵入者を駆逐しようと巨大原生生物、デイマゴラスがあげる怒りの雄叫びが聞こえてくる。

『ポイント到達！打ち合わせ通りにいくぞ』

事前に戦闘場所と定めていた岩場のない開けた砂漠の一角まで来ると、相棒に戦闘開始を叫び、バイクを停止させて身一つで左方向に飛ぶ。

『バイクもタダじゃないんですがね…っと!!』

同時に相棒も散開するように俺とは逆の右方向へ飛び退く。

直後、後方から飛来した成人の体の大きさを軽く超える巨大な岩が、俺達の乗っていたフロードーバイクを直撃した。

『うはっ、狙い通りとは言え、派手にやってくれるわ』

ディマゴラスが投げた岩により、バイクは大破・爆発を起こし、炎上。

夜の砂漠に紅蓮の炎が柱のように立ち上がる。

爆風を避ける為のうつ伏せの状態から、標的を迎え討たんと跳ね起きると、赤い炎の光に照らされ目前の闇の中に醜悪な巨大原生生物の姿が浮かび上がった。

俺達と同じ二本の手足を持ちながら、ヒトの五倍を優に超える巨大な体躯、岩石のように硬質化した皮膚は怪物という形容にピッタリだ。

つり上がった黄色い双眸はこちらを外敵と見なし、炎の揺らめきを映しながら殺意に満ち溢れている。

いやいや、心臓の弱いヒトならあのツラ見ただけで色々漏れちゃいそうだわ。

『あーあ、バイクもったいないですねえ。……この演出、本当に必要なんですか？』

呆れたように呟く相棒。

『ちゃんと自慢のその目の内蔵カメラで撮っておいてくれよヘンリー。次のクライアントへの売り込み資料にするんだから。』

炎上するバイクを尻目に笑いながら語りかけた俺へ苦笑しつつ、ヘンリーも愛用のナックル、ブレイン・スパイラルを取り出し装着した。

鮮やかな青を基調とした体の装甲と両腕に着けた黒い鋼拳。

顔だけ見れば一見温和な優男に見えるくせに、醸し出す雰囲気はこいつが数多の戦場をくぐり抜けた歴戦の勇士であることを証明している。

『本来は偵察任務用の機能であって、プロモーション映像の撮影の為ではないんですがね。』

そうばやきながらも、目前で敵意を剥き出しにしているディマゴラスを見やり、相棒たる青いキャストが戦闘態勢を取る。

『自分の持つ能力は最大限有効に利用するべし。生きる上での鉄則だよ相棒。んじゃま、お仕事にかかりますか！』

ヘンリーに先んじて開戦の幕を切るべく、俺は手に持つ愛刀にフォトンを流し込み、再度こちらに投げる為の岩を探している標的に向かって駆け出す。

（悪いね、こっちも仕事なもんで。）

それが、この付近の集落の住民に甚大な被害を及ぼした巨大原生生

物への俺からの別れの挨拶だった。

〈序章〉 討伐任務（後書き）

物語の更新は一週間に一度を目標に頑張ってみようかなと。

世界観が好きな作品だけに、自分のミジンコ程もない文才では表現しきれない部分がめっちゃ多いとは思いますが、面白い話にできるように自分なりに努力したい所存でやんす。

以降もお付き合い頂けたらこんな光栄な話はありません。

宜しくお願い致します。

登場人物紹介？

登場人物紹介

（オリジナルキャラクター）

マース・ウォーゼル

種族…ヒューマン

性別…男性

年齢…25歳

職種

ブレイバー

主な使用武器

ツインセイバー

愛用装備

剣影・リュウホウジドウ・オブシディアン

外見・特徴

本編の主人公の一人。赤髪、赤目、童顔。ゴコウバオリ着用。ニューデイズ生まれで服装などもかの地のものを好む。12才から傭兵として実戦を積んでおり、戦闘経験は豊富。生来器用なこともあり、ツインセイバーによる剣技、ツインハンドガンでの射撃、ロッドでのテクニクと戦闘に必要な技能は不得手なくこなす。

正義感が強く、弱者や子供には無条件に優しいが、それが目に見え

る形で出ることを好まず、悪びれることが多い。

しかし、相棒であるヘンリーなど周囲からは照れ隠しがバレバレな場合がほとんど。

日々を自由気ままに生きることを信条とする楽道家

筆者から一言

元々私がPSP02を始めた頃から愛用しているプレイヤーキャラクターですが、小説化にあたって性格づけをしたら、我が道を行くオラオラキャラになってしまいました。

作中でも愛用している剣影を全属性揃えたり、解放作業の為にフリーミッションをハムハムしたり、気がつけば長い付き合いになっていますね。

性格上のモチーフは、少年ジャ○プで絶賛連載中の銀魂の銀さんだったりしますが、いざ書いてみたら欠片も似てませんな（笑）

ヘンリー・ラウス

種族…キャスト

性別…男性

稼働期間…30年間

職種 ハンター

主な使用武器
ナックル

愛用装備
ブレイン・スパイラル
フローズンシューター

外見・特徴

ヘッドタイプは人間型。青い髪を後ろで束ね、金色の瞳が特徴的。接近戦に特化した格闘型のチューンナップを施しており、外装は身軽さを考慮し、ハウンズアーム・ロウバストルソ・ラピトウスレツグを使用。

元々同盟軍に所属していたが、マースの父親と出会い傭兵に転職。尊敬する人間の息子ということもあり、マースが傭兵となった時から面倒を見続けている。キャスト特有の合理主義を持ちながら、ヒトの持つ情の大切さを認識しており、優しさで強さを併せもつ存在になりたいと強く思っている。

自由奔放なマースのフォローに忙しい苦労人。

筆者から一言

…マースの転生時に、LV上げを楽にする為に作った2ndプレイヤーキャラクターでした。

ゲーム中でも彼の装備するコクイントウの解放作業など、自分の装備充実そっちのけでサポートにいそしんでいます（笑）

マースにとっては兄であり、時としては母（笑）のような頼れる保護者といったところでしょうか。

性格上のモチーフは、懐かしのRPG、幻想水滸伝の主人公の付き人、グレミオさんです。（わかるヒトが少なそうww）

身近にこういうヒトがいてくれると本当にありがたいですね。

実は作中、筆者のお気に入りキャラNO.1だったりします。

そのうち彼を主役にした短編なんかも書けたらいーなと思ってみたいです。

それでも苦労はさせちゃいそーですが（笑）

第一話　（傭兵稼業）

グラール太陽系

母なる太陽と3つの惑星から成り、複数の異なる種族が暮らすこの世界。全ての種族の大元となった「ヒューマン」

ヒューマンから万物の生成エネルギー、フォトンをより効果的に扱えるよう遺伝子改良され生まれた「ニューマン」

惑星モトウブなどの過酷な環境下に適応するべく、強固な肉体的進化を求められ生まれた「ビースト」

そして、ヒューマンによって作り出され、後に自らの手で種族として自立の道を選んだ機械生命体「キャスト」

俺はヒューマンのフリーの傭兵として、キャストの相棒と共に、依頼に呼ばれるまま各惑星を転々としている。

全世界を震撼させた、あの悪夢の様なSEED事変が無事終結した今も、グラールは決して平穏とはいえない難く、今回のように凶暴化した原生生物の討伐依頼は絶えることがない。

まあそんな物騒な世の中だからこそ、戦いを生業とする俺らのような連中も食いつぶぐれないだけの仕事にありつけるってわけだ。

『うーわ、油断した。卸したての一張羅が台無しだこんちくしょう。』

先程の戦闘でディマゴラスが繰り出した石つぶてを避け損ない、シルドラインの防御障壁を突破された結果、お気に入りの私服ゴコウバオリはボロボロの有り様になっている。

『格下の標的だからと侮った報いですよ。近接戦闘にこだわらず、戦術に遠距離戦も絡めていれば余裕で避けられたでしょうに。』

やれやれといった具合にヘンリーが説教を飛ばしてくる。

『討伐任務のPRには迫力あった映像の方がいいだろ？距離を置いて銃をぶっ放してるだけじゃ、アピール度が足らねーのよ。』

組織に属さないフリーの傭兵にとっては、いかに自分が有能であるかを周囲に示さなければ良い仕事は廻って来ない。

見る者を魅了するエンターテインメントは、娯楽に限らず、客を求める仕事にも不可欠だというのが俺の持論だ。

『必要のない苦戦を強いられた戦闘映像なんて、顧客にマイナスイメージしか与えませんよ。バカですかアナタは。』

ため息まじりにつぶやく相棒。

やれやれ、男のくせにロマンがわからん奴だ。

俺達の手によって倒され、砂漠に横たわるディマゴラスに近寄りつつ、万が一息が残っていないかチェックを行っていたヘンリーは、

いまだに衰えない炎を一瞥し言葉を続けた。

『まあ、これだけ派手に燃え上がっていれば、目印としては役立ちそうですね。ソアラさんも私達をみつけやすいでしょう。砂漠で野宿なんて真似は御免ですから、早いところ迎えが欲しいですね。』

討伐目標の生命反応が完全に停止したことを確認したのか、ヘンリーがそう言って頭上の夜空を見上げる。

つられて俺も上空に目を向けた。砂漠から見る満天の星空はなかなかにロマンチックだが、側にいるのが野郎のキャストとバカでかい原生生物の死体であっては長居したいとは思わない。

『同感だな。そろそろ時間のはずなんだが……お、来た来た。』

夜空に響く小型のフライヤーのエンジン音。

打ち合わせの時刻通りに現れた小型艇は今回の依頼の仲介者である情報屋の物だ。

明るい緑色の小型艇の側面には、でかでかとショッキングピンクのハートマークの塗装と、《愛の情報屋 ソアラ》という目に痛い宣伝文句が記されている。

うん、目立つのはいいが心からバカだとしみじみ思う。

あんなふざけた趣味であっても、情報屋としての能力は文句なくピカイチときている。世の中不思議で一杯だ。

燃え上がるフローダーバイクに気づいたのか、小型艇は俺達の頭上

で旋回すると、速度を落とし近くに着陸する。

バカやろう、こんな近くで降りたら砂が舞い上がって俺達にかかりまくるだろうが。

仏頂面を隠すことなく立ったまま待ち続けると、着陸した小型艇からタラップが降り、小柄な女ビーストが飛び出てきた。

『はいはい、お疲れさまー♪予告時間通りに仕事終わらせてるなんて、さっすがだねお二人さん♪』

我らが《愛の情報屋さん》は、満面の笑顔を浮かべながらこちらに手を振り近づいてくる。

ディマゴラスの死体を確認し、仲介した依頼が無事完遂された様子を見て、上機嫌なのだろう。

所有している小型艇と同じ緑の髪は肩のあたりで切り揃えられ、好奇心が強い性格を表す大きな瞳が活発な印象を周りに与えている。

ソアラ・バーツ。小柄な体やまだ少女の域から出ない若さを侮る人間も多いが、一度でも彼女から仕事を廻された者ならばその情報の正解さ、プロ意識に信頼を寄せるはずだ。

今回も事前の打ち合わせ通り、正確な予定時刻に姿を現した。

クライアントへの報告の為か、ディマゴラスの死体を小型カメラで撮影した後、炎が消え始めたフロードーバイクの残骸を興味深そうに見つめる。

『しかし、ホントにフロッダーぶっ壊したんだ？あはは、相変わらず派手好きだねえ。まあアタシもこーいうのは嫌いじゃないけど。』

意外にも相棒よりロマンを理解する情報屋。

砂かけられたことぐらいは忘れてやっても良いかもしれない。

『あ、フロッダーは借り物だから、アンタらへの報酬の中から弁償しとくね』

二秒で前言撤回だこんちくしょう。

『あ、その費用は私ではなく、マースの取り分からお願いしますよ？』

容赦のかけらもない相棒からの追い討ち。どうやら俺のビジネス理論は二人には高尚すぎるようだ。

『バカやろう、撮った映像使えば絶対わんさか仕事が来るんだぞ？必要な尊い犠牲ってやつだ。ヘンリー、後で映像データよこせよ？ソアラにも渡しとくから、馴染みの顧客に売り込みしといてくれ。』

『わ、割と本気だったんですねマース……ま、まあ戦闘データ収集の為に映像記録は撮りましたが。』

苦笑する相棒。

冗談だとも思ってたのか？仕方ない、天才とは常に孤独なものである。

『あはは、O K O K ♪任せときなさいって。ああ、ただ次の仕事ならわざわざ探す必要なんてないよ。』

『新しい依頼が来てるのか？』

聞き捨てならないセリフを耳にしソアラに視線を移すと、うら若き情報屋は両手を頭の裏で組み、鼻歌でも歌い出しかねない機嫌の良さで言葉を続けた。

『来てる来てる♪それも結構大口の依頼だよ。いやあ、こんだけのビッグネームからお声がかかるとは、アタシも仲介役として鼻が高いよ♪』

『イヤにもつたいぶるじゃねーか。どこのお偉いさんだ？』

普段からテンションは高めの女ではあるが、仕事がらみでここまで上機嫌なのは珍しい。

よほど旨味のある顧客からの依頼なのだろう。

イタズラっぽく笑いながら俺とヘンリーの顔を交互に見やり、我慢できないといった様子で話を続ける。

『うふふ、聞いて驚きなさい。依頼人はVIPもVIP。このモトウブそのものを取り仕切る、我らがドン・タイラーよ。』

ダグオラ・シティー

西ググ砂漠での戦闘から約3時間後、惑星モトウブの首都であるこの街にソアラの小型艇で運ばれた俺達は、ソアラが言う「次の仕事の依頼人」との待ち合わせ場所らしき酒場に案内された。

依頼人の指定らしいが、人目を避けたいのか、中心部から随分離れた寂れた酒場だ。

無愛想なマスターにニューデイズ産の酒を頼み、テーブル席に腰を降ろす。

依頼人を迎えに行くと言って出て行ったソアラを待つ間、手持ちぶさたになった俺は先の戦闘で台無しになった私服を新調するべく、服飾関連のショップのカタログに目を通した。

ほお、ウルスラ・ローランが来月に新作発表か。男モノがあれば目を通しておきたいところだ。

カタログを読みふけていると、向かいの席に座ったヘンリーが話しかけてきた。

『どう思います？ マース。』

『あー？ ウルスラの新作か？ まあ彼女のセンスは最近のデザイナーの中じゃピカイチだからな。ニューデイズ風な男性服とか作ってくれたら言うことなしなんだが。』

『とことんバカですかアナタは！ ファッションのことではなく、今回の依頼についてですよ！』

憤慨したように言い捨てた相棒が俺の手からカタログを没収する。

ああ、まだ読み終わってないのに。心に余裕がない男はモテないぞ相棒。

『なんだよ、何か気になることでもあんのか？』

カタログを奪われた俺は仕方なく飲みかけの酒が入ったグラスに手を伸ばす。

仕事の話の前にアルコールを取るのはやめるべきだとヘンリーは言っていたが、こちらとらさっき一仕事終えたばかりなのだ。

依頼人の都合で呼び出された以上、ちよつとはワガママ言おうとバチはあたるまい。

『アナタの大物ぶりには慣れてますが、少しは緊張感もって下さいよ。今回、顧客はあのドン・タイラーですよ？』

ドン・タイラー。

あのSEED事変の影響でモトウブを仕切っていた「モトウブ通商連合」や、裏から実質的な支配をおこなっていた四大ファミリーが消滅した後、混乱するローグス全体をまとめあげ、今ではモトウブのトップとしてその名が響き渡るローグスの英雄。

確かに、本来なら一介のフリーの傭兵にすぎない俺達が縁を結べるような相手ではない。

『ソアラが熱心な売り込みやってくれたんじゃねーの？俺達も少しは名が売れてきたってこった。喜ばしいことじゃねーか。』

傲慢ではないが、俺もヘンリーも傭兵としてのキャリアは長い。Sランクの原生生物の討伐依頼だろうと、事前の情報さえしっかりしていれば確実にこなす自信はある。特に腕利きの情報屋であるソアラと組むことが多くなつてからは、グラールーの規模を誇る民間軍事グループ、ガーディアンズでさえ手を焼いていたレベルの依頼をいくつかこなしていた。

こと戦闘に関してなら、大物から指名を受ける程の評判が廻っていても不思議なことはない。

『別に客が大物だろうが、いつも通り与えられた依頼をこなせばいいだけだろ。リラックスしてこーぜ相棒。』

『大物うんぬんではなく、相手がローグスだということを気にして下さい。以前の依頼で彼らとトラブルになったことをもう忘れたんですか？』

嫌なことを思い出したといった具合に顔をしかめるヘンリー。

そう、確かに以前、俺達はこのモトウブで一度ローグスの小さなファミリーと一悶着を起こし、命を危険にさらしたことがあった。

彼らには他の星における法律・常識といったものは一切通用しない。

過酷なモトウブの環境がそうさせたのか、彼らには彼らが決めた独自のルールがあり、その掟を破った相手には容赦なく、暴力も含めた制裁を与えようとする。

特にファミリーと呼ばれる集団の結束は固く、仲間がよそ者に傷を

つけられようものなら、自分達のメンツにかけて報復をおこなう。

以前俺達が受けたのは、誘拐されたヒューマンの娘を助け出すという、パルムの富豪からの依頼だったが、実際にフタをあけてみれば、ローグスの小さなファミリーが元締めになっていた賭博場で借金を作った依頼人が、返済を渋ったあげく、報復として娘をかどわかされたといった内容だった。

悪質なイカサマにはまったのだと、後に泣きながら言い訳してきた元依頼人の顔も、自分達のシマを荒らしたと何度も襲ってきたローグスの連中のことも、どちらもあまり思い出したい過去ではない。

結局は土地のルールに従い、依頼人に多額の賠償金をローグス側に支払わせることで一応の決着をつけたが、「あの金持ちもお前等も、騙される方が馬鹿なんだよ」と得意顔で言い放ってきたローグス側のボスのツラは、今でも思い出すたびにタコ殴りにしたい衝動に駆られる。

『まあ、あん時は相手のローグスも悪辣な連中だったからな。噂通りなら、ドン・タイラーってのは筋は通しても義理を欠くような真似はしないって話じゃなか。まあ依頼の話聞くだけなら特に問題ねーだろ。』

そう、まだローグスの一ファミリーでしかなかったタイラーファミリーの時代から、ドン・タイラーは「裏切らず、無駄に殺さず、貧しきものから奪わず」といった信条を掲げた義賊として有名だった。個人的にそういう類の信条を貫く連中は嫌いじゃない。

ローグスだからというだけで、俺達とトラブった悪質な連中と同じ

ように見るのは偏見というものだろう。

『だいいいんですがね……！！……マース、気をつけて！』

言葉を交わしていた相棒の表情に緊張感が宿る。気がつけば元から客の少なかった酒場は、マスターも含め俺達以外姿を消している。

相棒から注意を呼びかけられたのと同時に、俺も自分に向けられる物騒な気配を感じ取り、即座に目の前の丸いテーブルを横なぎに蹴り倒し、倒れ込むようにその死角を利用して床に伏せた。

ガガガガガガ！！！！

殺気を感じた方向は俺の右手側にあった広い窓から。

予想を裏切らず、窓からフォトン弾の嵐が俺の座っていた椅子の位置を襲ってきた。

『相手は何人だヘンリー！！』

窓から銃撃を受けない店の奥へ転がりながら、突然の襲撃に応戦するべく、ナノトランサーからツインハンドガン・オブシディアンを取り出す。

呼び出した銃の重みを手に感じた後、自分と同様に銃撃から身をかかし、既に臨戦態勢としてライフル・フローズンシューターを手に持った相棒へ敵の数を問いかける。

『サーチ完了！店の外、銃撃方向・ここから距離40程の位置に固まった敵対反応が3。体温も感知しましたからマシナリーではなく

生命体ですね。』

戦況を確認し、こちらに告げる相棒。

『マジかよ、嵌められたかあ?』

脳裏に先ほども一緒にだった、馴染みの若い情報屋の姿が浮かぶ。

アイツが俺達を嵌めて、何か得するようなことがあるのだろうか?

緑色の大きな瞳の憎めない笑顔を思い返すが、そうした卑劣な真似をする奴ではなかったと思う。

『以前のトラブルの落とし前でしょうか? ドン・タイラーがローグスを束ねているなら、あの一味も吸収されたはずでし。解決したと思っていたのはこちらだけだったのかも知れません。』

ヘンリーがやれやれといった具合で顔を左右に振る。

『ちっ、面倒くせーなあ。……ん?』

俺達が死角に逃げ込んだことに気づいたのか、銃撃が止む。

俺の視線の先には、銃弾の雨を受けた、倒れたままの丸いテーブルがある。

『……ちっ、舐めた真似してくれるわ。……ヘンリー、わかってるな?』

俺と同じく、テーブルを見たヘンリーがライフルに手をやる。

こっちの意図を即座に理解してくれるのは、長年の付き合いの賜物

だろう。

『了解。やりすぎないようにしますよ。どうします？この距離で撃ち合っても、制圧は可能だと思いますが。』

『まだるっこしい。俺が行くから援護を頼む。どうせ服は新調するつもりだったんだ。せいぜい派手にやってやるさ。』

言い捨てると同時に俺はツインハンドガンから愛刀・剣影に装備を喚装しなおし、窓側の店の壁にフォトンを流した刀身を叩きつける。そのまま蹴りをくれると、石で出来た店の壁に見事にヒト一人が通れる穴が出来上がった。

『壁の弁償はしねーからな、こんちくしょう！』

気合いを入れる為の叫びをあげ、自分で作った穴から店の外へ飛び出す。

視線は銃撃を受けた方向。

夜明け前のダグオラ・シティーの街並みに、ヘンリーが感知した通り三人のビーストの姿を確認する。

予想外の方角に出現した俺に驚いたのか、三人のビーストは慌ててこちらに銃口を向け直そうとしている。

お構いなしに距離を詰めるべく駆け出す俺。

『っらああああ！！！！』

まっすぐに突っ込んでくる俺に驚愕の表情を浮かべながらも、トリガーを引き絞ろうとするビースト達。

刹那、そのうちの一人が突然銃をもったまま、酒場の方向から飛んできたフォトン弾を身に受け、後方に吹き飛んだ。

（ナイス援護！）

心の中で相棒を褒め称え、仲間の一人がやられたことにうろたえを見せるビーストの一人を標的に定める。

残るビースト二人は酒場からの銃撃より、急速に接近してくるこちらを危険と見たか、やっと手に持つライフルで射撃してきた。

『ショボいんだよバカやろう！』

いちいちこちらの行動に驚愕し、アクションが遅れる三下の銃弾などかわすだけの脅威を感じない。

バシュッ！！

俺は身にまとうシールドラインに一時的に強いフォトンを流し込み、襲いかかる複数の銃弾が体に届く前に全て消滅させた。

慌てて次弾を撃ち直そうとする連中。

『5点。話にならねーよアンタら。』

言い捨てると同時に、距離を詰め終えた俺は走った勢いそのままに標的にしたビーストの一人に飛びかかる。

『シッ!!』

左手に逆手に持った剣影の鞘を横なぎに払い、標的の胴をしたたかに打ち据える。

鞘に打たれたビーストは苦悶の表情を浮かべながら、真横に吹き飛んだ。

『くっ!!』

残る一人は、距離がつまったことで、ライフルから片手用のセイバーに武器を喚装し直すが、敵を目の前にしてのその行動は俺にとって絶好の隙にしかない。

『出直してきな!』

先程と同様、左手の鞘を使い、今度は先端を利用した突きを相手の腹にお見舞いする。

『げふっ!!!』

突きを食らった最後の一人は、派手に後方に倒れ込んで動かなくなった。

『はい、終了。』

付近から敵意がなくなったことを確認し、剣影をナノトランサーに収納する。

酒場から飛び出して制圧まで約一分。

まあまあといったところか。

『しかし手応えのない連中だったなあ。ヒトを襲うには経験が足りなすぎる感じだったが。』

襲ってきた連中の顔をじっくり拝んでやろうと、泡吹いて倒れている一人に近づくべく歩き出す。

すると俺の耳に、突然聞き慣れない女の声が入ってきた。

『お見事！』

人通りのないダグオラ・シティーの街並みに、パンパンという拍手の音がこだまする。

『あん？』

音のした方向へ目を向けると、街並みの民家の死角から、一人のヒューマンの女が現れた。

体のラインがあらわになった挑発的な服装で、微笑みながら拍手を続けている。

見た感じ、年の頃は二十代半ば。長いストレートの髪が街にふく風に揺られている。

蠱惑的な印象を受ける美人だが、過去の記憶に出会った覚えはなかった。

『だから言ったじゃんか！こんな真似するなんて仲介役のアタシに
対する侮辱だよ！』

突然の美人の出現に面食らっていると、今度は聞き覚えのある声の
我らが腕利き情報屋ソアラが、美人の後に続いて姿を現した。

こちらはかなりご立腹の様子で、拍手を続ける女に食ってかかるよ
うに叫んだ後、バツが悪そうにこちらを見て、ゴメンと両手を併せ
て謝ってきた。

『やれやれ、やっぱりこんなことだろうと思いましたよ。』

後方からの足音に振り返ると、ライフルをナノトランサーにしまい、
戦闘態勢を解除したヘンリーが近づいてくる。

ヘンリーはこちらを見て、外傷がないことを確認すると満足げに微
笑む。

こいつからしてみれば、いまだに俺の戦い方は危なっかしく目に映
るのだろう。

心配性な相棒に五体満足な自分の様子を見せた後、女を問い詰める
べく視線を移す。

『腕試しはすんだかい、依頼人さん？……ってか、ドン・タイラー
が女だなんて話は聞いたことなかったけどな。』

そう、この襲撃は言ってみれば茶番だったのだろう。

深夜、中心部から離れた一帯とは言え、モトウブの首都であるダグ

オラ・シティーでこんな戦闘があつて、人っ子一人姿を見せないのも、事前に裏で手が回っていたからだとすれば納得がいく。

『驚いた、気づいてたの？』

俺の言葉を受けて、女は目を見開いて言った。

やれやれ、これだけ舐められるときすがにこっちの気分も悪くなる。

『ソアラの様子だと、事前に俺達の実力は聞いてるはずだがな。酒場の銃撃、どんだけ固いテーブルか知らねーが、普通あれだけ弾丸食らったら原型留めずに粉々になるもんだ。はなっから連中に武器のフォトン出力をスタンモードにして襲わせたんだろ？』

最初の銃撃の時点できな臭い点は多かった。

俺達を殺すのが目的なら、それこそ店ごと爆破するなり、もっと他にやりようはあつた筈だ。

まあそんな真似されてれば、こっちもヘンリーが先にサーチして気づいていただろうが。

相手側に明確な殺意がなければ、こちらも無用な殺生は好まない。

俺もヘンリーも、使用した武器はスタンモードに切り替えていたから、伸びている三人のビーストも命には別状ないはずだった。

女は俺の説明を聞くと、満足そうに微笑んだ後ソアラに話しかけた。

『アナタを疑った訳ではないけど、聞いた話以上に信頼できそうな

方達ね。ありがとう、謝礼はお詫びも兼ねて十分させて頂くわ。』

ソアラは依然として無然とした顔をしているが、謝礼というセリフが聞こえた際に一瞬眉が下がったのを俺は見逃さない。

このアマ、後で迷惑料としていくらかふんだくるぞ、こんちくしう。

女はソアラに語りかけた後、俺とヘンリーに体を向き直し、深々と頭を下げてきた。

『この通り、失礼をお詫びします傭兵殿。何分、絶対に失敗が許されない依頼なものですから、私の性分で、自分の目で見なければ安心してお願い出来なかったのです。』

突然態度を変えられた上、丁寧な謝罪を受け、今度はこちらが狼狽する。

ヘンリーを見ると、こいつもこっちを見ながら苦笑して降参だとかりに肩をすくめている。

やれやれ、相変わらず女に甘い奴。まあ俺も人のことは言えないんだが。

『ソアラ、いい加減教えてくれよ。ドン・タイラーからの依頼ってのはデマだったのか？』

ことの顛末は飲み込めたが、一点だけ理解できない点が残る。

ソアラの話だと、今回の依頼はドン・タイラー自身からのはずだ。

目の前の女がドン・タイラーだと言うのはさすがに無理がある。

何しろ性別も、種族さえ違う。

ビーストが支配するこのモトウブで、ヒューマンの女がトップに立つことなんて有り得ない話だ。

『いえ、おっしゃる通り私は代理の者ですが、依頼は間違いなくドンからのものです。その辺りの詳しいお話もさせて頂きたいので、今度こそちゃんとした場所に移りましょう。個人的なお詫びとして、謝礼は別にして奢らせて頂きますわ。』

ソアラが口を開く前に、女が俺に答えた。

やれやれ、また随分きな臭い話になってきたな。

『……わあったよ。その代わり、一つ条件がある。』

俺からの問いに、女が不思議そうにこちらを見やる。

『……酒場の壁の修理代を請求するのは勘弁してくれな？ 別口でバイクの弁償請求されて、財布に余裕がねーんだわ。』

言い終えた俺を見て、女は口に手をあてて笑い出し、ソアラとヘンリーがやれやれといった感じでうなだれた。

どんな依頼だか分からないが、こちとらフリーの傭兵稼業。

体張るのには慣れている。

きな臭い話だろうが、モトウブのボスからのれっきとした依頼だつてんなら、好奇心もうずく。

俺は呆れている相棒達の肩を叩き、場所を変えるべく歩き始めた女の後が続いて、もうじき夜明けを迎えるダグオラ・シティーを歩き

出した。

第二話　く誇りく（前書き）

うわあ、第一話を自分で読み返したら至らない点多すぎて、顔からバーストラップEX。

書いてる時と読み返してる時では、当然ですが視点が完璧に変わりますね

（|| || ;）

そのうち言い回しとか修正できたらいいなあ。

実はまだサイト内の修正の仕方が理解出来てませんが（笑）

とりあえず、続きの第二話、逝ってみます。

宜しくどうぞー。

第二話　く　誇り　く

人間、人生を充実したものにする上で本当に大切なモノなどそう多くはないと思う。

金？そりゃ生きる上で必要不可欠なモノだし、メセタがあればあるだけ生活ってのは潤うもんだろう。

だが、俺も仕事の関係上、腐る程金を持った連中から依頼を受けたこともあったが、彼らの全てが幸せに見えたかと言えば、決してそんなことはない。

いや、貧乏人のひがみとかじゃなくてよ？

俺から見た連中の様子は（無論、全員って訳じゃないが）金っていう価値観に縛られ、どこかもつと大切なモノを忘れてしまっているように見えた。

そういった意味で、昨夜出くわしたあのヒューマンの女は、己の生き様に確固たる誇りを持っているように感じられた。

少し、見るのが眩しい程に。

やれやれ、どうかしてるな。

傲慢じゃないが、俺は現在の自分の生き方に大きな不満はない。

神様ってのがいたとして、生まれ変われるチャンスなんてモノを恵

んでくれたとしても、「あー、別に今のままで構やしねーよ。」と一蹴する気満々だ。

ただ、自分以外の誰かに、確固たる己の意志で、あそこまで命をかけられる生き方ってのに、不覚にもちよつとした感動を覚えちゃったんだ。

そう、ただ、それだけの話……

『マース！いい加減そろそろ起きて下さい。このままだと夕方になってしまいますよ！』

快適なまどろみは、よくあるオカンの定番といったセリフで打ち切られた。

毎度のことながら、モーニングコールは野郎ではなく、女性にして頂きたいとつくづく思う。

出来れば二十代半ばから三十代前半の範囲で。

『あー、頭いてえ。くそつ、二日酔いなんざ久しぶりだな。』

ズキズキと痛む頭を押さえ、カプセル型の寢床から身を起こす。

『奢りと言われたからって調子に乗って飲みすぎですよ。向こうは笑って許してくれましたが、代金請求されたらどうするつもりだったんですか？』

小言を言うのが趣味な相棒。

『バカ言え。失礼な真似した詫びだって言うんだから、遠慮なく飲むのが礼儀だろが。これでお互い今後わだかまりなくツラを合わせられるってもんだ。』

そう、俺達は昨夜の一騒動の後、ドン・タイラーの代理を名乗ったヒューマンの女性に連れられ、正式な依頼の話を聞くべく、彼女がオーナーを務めているという別の酒場に移動し、明け方から昼前まで過ごした。

依頼に関する話が終わった後、仕事があるからと言って機嫌が直り笑顔で出て行ったソアラを除き、かなりのバカ騒ぎを行った。

昼を前にしてさすがに見かねた相棒が、半ば強引に俺を連れ帰り、こうして街外れに停めてあった我らが本拠、マイシップの「オルシナス号」で意識を失ったという流れだ。

『うん、旨い酒だった。』

しみじみと頷く俺を見て、ヘンリーが疲れた様子で話しかけてくる。

『酒の話はもういいですよ。それより、そろそろ支度をしませんと。話を引き受けたからには依頼人を待たせる訳にはいきませんよ。』

『ああ、そうか、待ち合わせだったな。早速貰った服が役に立つってもんだ。』

仕事とは言え、美人との待ち合わせというのはいいもんだ。ヘンリーに言わせれば、依頼に雑念を交えるのはミスにつながるっ

て所だろうが、締める所は締める、楽しむ所はとことん楽しむのがモットーな俺としては、この程度の雑念くらい多目に見て頂きたいと強く思う。

『新しい服って、結局ゴコウバオリじゃないですか。ああ、いいから早く支度して下さい！いい加減にしないと置いて行きますよ！』

ヒトのファッションセンスにケチをつけるなど文句を言おうとしたら、先手をうたれてしまった。

やれやれ、まあ服装に興味を持たない相手に熱意を持って語っても虚しくなるだけか。

俺は鼻歌を歌いながら、新品の真紅のゴコウバオリに袖を通した。

同時に、これをくれた相手である依頼人代理との昨夜のやり取りを思い出す。

『これで良かったかしら？』

店につくなり、俺の身なりを見渡した女ヒューマンは、「そのままだと色男が台無しだから」と見え透いたお世辞と共に、こちらが希望する服を用意すると言ってきた。

無論、お世辞だろうと嬉しいものは嬉しいので、俺の表情はかなり弛んでいたと思う。

こちらが愛着のあるゴコウバオリを指定すると、ニューデイズ以外では手に入りにくいこの服を、部下と思われる男ビーストに命じてあつという間にどこからか調達してきた。

『驚いた。ローグスってのは色んな力を持つてるんだな。』

てっきり、手に入るのは早くても明日以降だと思っていた俺は心底感心してそうつぶやく。

『ご存知の通り、通商連合が消滅した後、このモトウブを支えているのは私達ローグス……いえ、ドン・タイラーの威光ですから。これぐらいなら喜んでお世話させていただきますわ。』

最初に現れた時と同じ蠱惑的な笑みを浮かべ、女が答える。

（やっぱりローグスの一員って訳だ）

整った容姿に金色の長い髪、男の視線を惹きつけるラインがはつきりした見事な体型。

ローグスといえばゴツくてムサイ髭をはやした男ビーストがスタンダードなイメージだった俺には、ドン・タイラーの代理を名乗った時点で分かりきったことながら、彼女がその一員であることに軽い驚きを感じていた。

『んじゃま、こいつはありがたく頂いとくよ。正直、ボロボロの服をこれ以上着続けるのは苦痛だったんでね。……ああ、ついでもう一つ頼みがあるんだが。』

『マース！』

図々しいですよ、と目で合図をよこす生真面目な我が相棒。

隣にいるソアラまでもが、ジト目で俺を睨んでくる。

『構いません、どうぞ遠慮なくおっしゃって下さい。』

そうした気配を気にせず、変わらぬ笑顔をくれる依頼人代理。

『ははっ、別にこれ以上なんかくれて話じゃないさ。そろそろ名前、教えてくれないか？いつまでも「なあ」とか「あんた」なんて呼ぶのは無粋だろ？』

俺の言葉を聞き、心なしか彼女の笑顔に親しみの感情が加わった。

『失礼致しました。名乗るのが遅れて申し訳ありません。私は……』

『あー、待った待ったそれも違う。』

『？』

こちらから希望された名乗りを止められて、不思議そうな顔をした彼女が俺を見つめてくる。

『その喋り方だよ。丁寧に対応してくれるのは光栄だが、俺達はそんな大層な身分じゃない。最初に会った時のくだけた感じの方が、こっちも気が楽なのさ。』

わりいね、と苦笑しながら言葉遣いを楽にするよう求めてみた。

すると彼女は今度こそ楽しそうに、気取った感じの一切ない、親しみのこもった笑いを浮かべた。

『あははっ、ホント変な人。傭兵って人種は大概自分を大きく見せたがるものだと思ってたわ。』

『そいつは偏見ってもんだ。なあヘンリー。』

笑いながら相棒に同意を促してみる。

『マースはくだけすぎですよ。』

『アイツはあれが地だから気にしないでくれ。』

うん、同意を求める相手を間違えた。

『あははっ、ごめんなさい。そうね、遅くなったけど名乗らせてもらうわ。私はシアリー。シアリー・ロウよ。ここ、ダグオラ・シテイーでローグスの一員としてドン・タイラーのお手伝いをしているの。』

依頼人代理改め、シアリーはそう言ってこちらに右手を差し出してきた。

『マース・ウォーゼルだ。あっちは相棒のヘンリー・ラウスス。ソアラのことは知ってるんだよな?』

宜しく、と差し出された右手を握り返す。

『ええ、さっきはホントにごめんなさいねソアラ。アナタのプライ

ドを傷つけてしまったわね。』

先刻の俺達への腕試しの件だろう。やはりソアラもこちら同様、何も知らされていなかったようだ。

『まあ、済んだことだし、もう気にしてないよ。コイツらも無事だったしね。』

よく意外に思われるが、俺達、いや俺が知っている仕事仲間の中で誰よりもプロ意識が高いのがソアラだ。

自分が関わった仕事には常に全力で取り組み、質の高さを求める。

俺が彼女に情報屋として全幅の信頼を寄せる理由もそこにある。

今回、自らが推薦した俺達二人について、自分の話だけで実力を信じてもらえなかった事実は、仕事にプライドを持つ彼女にとって屈辱以外の何物でもなかっただろう。

謝罪の意味を込めた礼金の約束は取り付けているが、納得しかねる部分があってもおかしくはない。

ただ、実際に危険な目にあった俺達がシアリーと和解した以上、事を荒立てるつもりもないのだろう。空気が読める奴ってのはそれだけで尊敬に値する。

『ごめんなさいね。お詫びにならないかも知れないけど、今回の依頼の内容に関して、こちらの事情を説明させてちょうだい。』

とうとう本題って訳だ。

正直、俺も一傭兵として、モトウブを束ねる存在からの依頼というものに興味は強い。

加えて、実力を認められてのご指名となれば抑えようとしても自然にテンションは上がる。

『まず始めに、この場に私達のリーダーである、ドン・タイラーがいないことを謝罪させて頂くわ。』

そう言ったシアリーが苦しげに顔を歪めた。

『別にそこまでおかしいことはありませんよ。モトウブのトップともなれば、色々ご多忙でしょうし、私達にそこまで気を使う必要はありません。』

先程から謝りっぱなしのシアリーに同情したのか、普段俺の後始末で謝る機会が多い為シンパシーを感じたのか、ヘンリーが助け舟を出した。

『いえ、そう言ってもらえるのは本当にありがたいのだけど、実はドン自身、この場に参加することを強く望んでいたの。』

意外なセリフがシアリーから飛び出る。

『どういうことだ？ 急な予定でも入って来れなくなったのか？』

正直、ヘンリーが言った通り、一介の傭兵への依頼なんぞ、部下に任せても不思議じゃない。

今までも依頼人は姿を現さず、ソアラのような仲介人とだけやり取

りをした仕事も決して少なくない。

『ある意味、急な予定というのは正しいわ。ドンは今、うかつに身動きが取れない状態なの。……一人の裏切り者のせいで。』

つぶやく言葉の最後のフレーズには、シアリーのはっきりとした憎しみの感情が込められていた。

『なるほど…ね』

今のセリフで大体の道筋が読めた俺は、想像以上に大きなものになりそうな依頼の気配を感じていた。

SEED襲来時の混沌により、壊滅した4大ファミリーを含めた数多のローグスの団体。

4大ファミリーの1つだったタイラー・ファミリーの跡取りだったアルフォート・タイラーは、そのカリスマ性と強大なリーダーシップで混乱を収集し、ドン・タイラーとして全てのローグスを改めてまとめた訳だが、義を重んじる彼に相容れない悪辣な連中もまた多かったことだろう。

無論、タイラーもローグスである以上非情な一面はあるだろうが、芯から腐った人間と呼べないような連中は確固として存在する。

そういった連中すら押さえ込めたのがドン・タイラーたる由縁ではあるうが、中にはついにそれに逆らう考えを持つ者が出てもおかしくない。

『その裏切り者ってのはそんなに大きな力を持ってるのか？ ドンの動きを止められるだけの。』

浮かんだ疑問をそのままシアリーにぶつける。

『……いえ、主だった部下は基本的に彼に絶対の忠誠を誓っているはずよ。ただ、最近デューマンの出現なんかで、世情が不安定ですよ？ こういう時にドン自身が対応しなければならぬ反乱の噂なんかが流れると、せっかくまとまったローグスの団結に嫌な影響が出かねない。私達はそれを一番恐れているの。』

自身の無力さを嘆くように、悔しげにうつむきながらシアリーが説明する。

デューマン。ヒューマンの中から突然出現した新種族と言える存在。確かにその他にも原生生物の凶暴化など不気味な話題にことかかない最近の情勢下において、反乱などという事態は致命的な混乱を招きかねない。

『すると、私達への依頼はその裏切り者の処分ということでしょうか？』

緊迫した話題に、戦士の顔つきに変わったヘンリーがたずねる。

ずいぶんとデカイ話になってきた。

しかし、こちらの緊張をほぐすように、表情を和らげたシアリーが否定の返答をよこす。

『いえ、ごめんなさい。今のはあくまで私達の事情よ。ローグスの内輪もめに、あなた達外部の人間は巻き込めないわ。』

??

予想外な答えだった。

『おいおい、それじゃ今の話はなんだったんだよ。俺達にそんな話しちまって大丈夫なのか?』

依頼の話ならまだしも、今の内容こそ外部の人間が聞くべき話ではないはずだ。反乱の噂をタブーとするなら、こうして事情を知らない俺達にそんな話をするのは矛盾以外の何物でもない。

『言ったでしょう。お詫びよ。ソアラ、必要なことではあったけど、あなたの誇りを私は傷つけてしまった。それに謝罪するにはこちらもアナタと、アナタが紹介してくれた人達を信頼しているんだって証を見せたかったの。』

……参った。正直彼女という人間を俺は見くびっていたらしい。

ソアラが大切にしているもの。その想いを全て理解した上で、彼女は金などではなく、自分に出来る最大の誠意で謝罪の意を示してきたのだ。

『……………』

ソアラが呆気にとられた表情でシアリーを見つめる。

二人はしばし見つめ合った後、満面の笑みを浮かべあった。

『えへへっ、シアリーって、思ってたより結構バカだね。』

イタズラっぽく微笑むソアラの表情は、いつもの無駄にテンション

高い《愛の情報屋》のものだった。

『ほめ言葉として受け取っておくわ。』

そう返すシアリーもまた、自分の心が相手に伝わった喜びに微笑んでいた。

『大したもんだな。』

感心してつぶやくと、シアリーが反応する。

『あはは、タイラーの受け売りよ。心には心で返さないと、本当の仲間にはなれないってね。』

そう言って微笑む彼女の笑顔から、ドン・タイラーという男の大きさと、彼女が自分のボスに寄せる深い信頼を感じた。

『話がそれちゃったわね。ここからが本題なんだけど、肝心のあなた達への依頼についてよ。』

表情を引き締めてシアリーが続ける。

『私のローグスとしての使命は、ここダグオラ・シティーの治安管理なの。』

驚きはあったが、納得できる話だった。

確かに、モトウブにおいては他の惑星のように効果的な治安維持活動を期待できる団体はあまりない。同盟軍も本部のあるパルムのような活発な動きは望めないし、太陽系警察なんぞ、贈賄で腐りきっ

ていると聞く。かろうじて、ガーディアンズの常駐警護部が凶暴な原生生物の駆除などでその役割を担っているぐらいだろうか。

しかし街の内部に関しては、ローグスの影響が強い。

必然的に、市民の暮らしは良くも悪くもローグスと深く結びつくわけで、市民が最低限安心を得られるよう、治安維持などを行うこともあるのかもしれない。

まあ、法律なんぞ存在しないローグスの活動だから、他の星の治安維持とは活動内容が異なる部分も多いだろうが。

『説明しなくても、わかってもらえてそうね。』

シアリーが考え込む俺の様子を見て、満足げに微笑む。

ヘンリーも俺より傭兵暮らしが長い男だ。こうした事情は把握ずみのようで、頷いてシアリーに続きを促した。

『私としては、ドン・タイラーが決めたルールが遵守されていれば、あまりうるさいことを言うつもりはないの。私の他にこの街の各地域を担当する人間もいるけど、皆大体同じようなものよ。』

イタズラっぽく微笑むシアリー。ローグスにはローグスのルールがある。そこに口を挟む気はサラサラない。

『ただし、最近になって私の担当地域で見過ごせない事態が続発してるのよ。』

深刻な表情でシアリーが続ける。

『……人身売買』

言葉に込められた意味の重さにこちらの表情も固くなる。

『悲しいことだけれど、以前のモトウブにおいてはよくある犯罪だったのよ。でも、タイラーがドンとなってからはローグス全体としても、こうしたあまりにも非道な犯罪は禁止の方向に動いてきているわ。……それに今回はあまりにも手段が悪辣なの。』

口を挟むべきでない空気がシアリーから伝わってくる。

『市民の、なんの罪もない子どもたちがさらわれているのよ』

泣き出しそうな悲痛な表情を浮かべ、シアリーが最後の情報を告げた。

初めて誘拐騒ぎがあったのは一月程前。

当初はよくある不良少年の家出と捉えられたその出来事は、事件から二週間後、ダグオラ・シティーから離れた別の街で、臓器を奪われた身元不明の幼い遺体が発見されたことで痛ましい凶悪事件へと姿を変えた。

別の街のローグスから遺体の情報を聞いたシアリーは、特徴から誘拐された子供であることを悟り、自分の担当する地域からそのような事態が発生したことに、比喻ではなく唇を噛み切る程の怒りを覚えたと言う。

……傭兵をしていれば、顔を背けなくなる事件に巻き込まれることは多い。しかし、依頼の標的に殺意を覚える今回のようなケースはそう多くない。

『本当に情けない話だけれど、私の指揮下にあるチームは一度、すでに警戒の巡回中、犯人とおぼしき連中と遭遇してるのよ。でも取り押さえるどころか、返り討ちにあってしまった。十人以上いた部下もその時の戦闘のせいで、既に戦えるのは私と、さっきあなた達に襲いかかった三人だけなの。』

腕試しの一件を思い返す。連中の腕前では、戦闘の訓練を積んだ犯罪者などが相手では確かに話にならないだろう。

あの茶番に思えた騒動も、連中なりに信念をかけた戦いだったのかもしれない。

おそらくローグスの規模を考えれば、本来ならもっと腕利きの連中もいるのだろうが、ここに来て先程の裏切り者への対処の件が思い返された。

そうした連中は、その裏切り者への対応に追われている。

シアリーは語らないが、他に理由は考えられなかった。

最初にドン・タイラーがこの場に來たがっていたという話も、きっとそういう事情を踏まえて、街を取り仕切る者の責任として、正式にこちらに直接依頼をしたかったからなのではないだろうか。

『ソアラ、俺から依頼出しているか？』

突然話し始めた俺に、シアリーが目を丸くしている。

問いかけられた当のソアラは、すでに予想していたのか笑みを浮かべていた。

『自分の感情で金額変えるのはプロ失格なんだけど、今回はアタシも腹立ってるから安くしとくよ。ルート洗って、その腐った連中の尻尾掴んでみる。』

見慣れたイタズラっぽい笑顔。

この笑いが出た時、コイツの仕事は早い。

『おう、頼むな。……ヘンリー。』

『ソアラさんから情報入るまで、私達に出来ることはやはり街の巡回でしょうね。日付変わってますから、今日からやりましょう。夕方以降が効果的かと。』

さすが、何も言わなくてもこちらの意を汲む頼もしき相棒。

『マース?』

驚いたままのシアリー。やれやれ、リーダーがこれでは困ってしま
う。

『俺達は街並みにそこまで詳しくないからな。案内は頼むよ、依頼
人殿。』

もう俺にこれ以上語る言葉はなかった。

ニヤリと笑いながら改めてシアリーに右手を伸ばす。

『…ありがとう……』

握り返された右手には女ローグスの決意が込められていた。

夕暮れに染まり始めたダグオラ・シティー。

俺は真紅のゴコウバオリをなびかせて歩く。

隣には青い相棒。

『スパッと解決させて、またシアリーのところで飲もうな。』

旨かった酒を思い出し、相棒に提案する。

『次は奢りでなく、報酬で支払いますよ。』

ニヤリと笑い返してきた相棒にやれやれと頷き返す。

目指すは麗しき依頼人である女ローグスとの待ち合わせ場所。

路地裏には仲良く遊ぶビーストの子ども達が見える。

『さて、行くぞ相棒。』

『了解しました。』

迫る夜に挑むがごとく、俺は静かに歩き始めた。

第二話 く誇りく（後書き）

読み返したら、『モトウブに同盟軍はない』などと自信満々に言っている主人公に気づき愕然（汗）

慌てて修正しました。（やっとやり方を覚えたWW）

下地に公式設定がある二次創作作品ゆえに、設定はなるべく遵守したい筆者のつまらないプライドでやんした。

お読み頂いた方へ感謝を捧げつつ、あとがきとさせて頂きます。

m ((m

第三話　く理由く（前書き）

引き続きモトウブ編、第三話。

なんて造りしてやがるダグオラ・シティ。あんな設定、文章で表現できねーよ（涙）

第三話　（理由）

「なぜお前は傭兵なんかになりたがる？」

初めてその問いかけをしてきたのは俺に戦い方を教えてくれた人だった。

一挙手一投足、その全てに憧れて、今思い返してもよく死ななかったもんだと思える、無茶な訓練にも必死に耐えた。

「お前は筋がいいな。」

ごくまれに見せる、満足げなその微笑みが見たくて、ただひたすらに教えられたことを体に刻みつけた。

最後の最後まで、照れくさくて本人に伝えることができなかった、俺が剣を取る理由。

そう、俺はただ、あんたみたいになりたかっただけなんだ。

『アルセバ・ファルサンか、懐かしいな。』

ショーウィンドウに展示されている、昔自分が使用していたモデルのツインセイバーを見て、ふとずいぶん昔の記憶が蘇った。

『テノラ・ワークスの商品はフォトン消費は激しいですが、その分

威力も大きいですよ。予備の武器に何か購入しておきますか？』

そう俺に話しかけてきたヘンリーも、自分の得意としている近接戦闘用のナックルのコーナーで、興味深そうに商品に目をやっている。

ここはダグオラ・シティー内にある、グラール三大武器メーカーの一つ、テノラ・ワークスショップ店内。

シアリーが指定してきた待ち合わせ場所は、独特の質実剛健なデザイン、武器が数多く並び、命を預ける商売道具を求めるガーディアンズや傭兵達でこった返す店の中だった。

この星では無骨な雰囲気好まれるのか、店内は広くとも余計な装飾はなく、数多くの商品が強化ガラスのショーケース内に無造作に展示されている。

『いや、俺はいーわ。モノメイトだけ補給しとくか。』

待ち合わせ時間より少し早めに着いた俺達は、ついでに戦闘に必要な用意を整えるべく、ふらふらと店内を物色していた。

『ソルアトマイザーもそろそろ手持ちの分が切れますね。一応まとめて購入しておきましょうか。』

ヘンリーの方もお眼鏡に叶う武器は無かったのか、体力回復、及び毒などの異常状態を沈静化させる携帯医療品を求め、武器売り場から消費物売り場へと移動しようとする。

『あら、早いね。時間に正確なのは女から見てポイント高いわよ。』

背後から突然声をかけられ、俺とヘンリーが振り返る。

『へえ……こりゃ驚いた。』

振り返った先に立っていたのは笑顔をかべた待ち合わせ相手の女
ローグス。

自然と引き付けられる整った魅力的な笑顔は今朝方まで一緒にいた
時となんら変わらないが、身にまとう服装が別人のように一変して
いた。

『ファシネス・ベストにウェスタイルボトムW。レトロな雰囲気
をうまく着こなしてる。良い趣味してるじゃんか。よく似合ってるよ。

』

襟口の立った、片口までの白っぽいデニム生地ベストに、腰回
りに赤いアクセントが入ったスリムパンツ。

昨晚着ていた、体のラインがはつきり出るドレスも良かったが、活
動的な印象を受けるこの服装も、彼女によく似合って見えた。

『ありがとう。……アナタ本当に変わってるわね。ここまで服飾関
係に詳しい傭兵なんて初めて会ったわ。』

身にまとう服の種類までズバリ当てられたことに驚いたのか、感心
したように目を丸くしたシアリーが答える。

『服装ってのは人間性が現れるからな。相手がどんな嗜好の持ち主
か、着てる服見りゃ大体分かっちゃうのさ。』

得意顔で説明する俺。

実際、服のセンスってのはその人間の性格を表す要因としてバカに出来ないもんだ。

「身軽でいいから」という理由だけで、昔から外装を一切変更しようとならない頭の固い相棒にも、いつかこの崇高なポリシーを理解して欲しい。

『お似合いですよシアリーさん。その様子を見ると、どうやら戦いの経験もおありのようですね。』

そんな俺の思考を完璧にスルーするかのように、無粋な発言をかます我が相棒。

『ええ、一応私もローグスのはしくれだからね。自分の身は自分で守れるだけの心得はあるつもりよ。アナタ達の足を引っ張らないよう、頑張らせてもらおうわ。』

金髪の女ローグスは、そう言って余裕のある笑みで切り返してきた。

昨晚出会った時から気がついてはいたが、彼女の身のこなしは間違はなく、ちゃんとした戦闘の訓練を積んだ人間のものだ。

活動的な服装に着替えた今、重心の取り方、周囲の気配への気配り等、立ち居振る舞いにも素人のような隙は見えない。

『頼もしいね。まあ依頼を受けた以上、君の身边に危害が及ばないようにするのも俺らの仕事だ。全力は尽くすから、大船に乗ったつもりでいてくれ。』

そう言った俺に、親しみのこもった笑顔でシアリーが答える。

『ありがとう。頼りにしてるわ。早速行きましょ……と言いたいところだけど、買い物途中だったんでしょう？私も調整をお願いしていた武器を取ってくるから、10分後に店の入り口で落ち合いましょう。』

こちらの口調に満足げに微笑んだシアリーが、そう言って武器売り場の店員の方へ歩きだそうとする。

『……という訳だヘンリー君。また10分後にな。治療系のアイテムの補充は頼んだぞ。』

そういう捨てて当然のようにシアリーの後続く俺。

『ア、アナタという人は……。』

脱力してうなだれるヘンリーを尻目に、前に行くシアリーに追いついた俺は彼女と肩を並べて歩き出した。

『……ヘンリー、可哀想じゃない？』

追いついてきた俺に気づくと、くっくっとおかしそうに笑いをこらえるシアリーがそう話しかけてきた。

『いつものことすぎてもはや何が可哀想かわからん。大丈夫、あいつMだからああ見えて俺にいじられるのを楽しんでるんだよ。』

ここぞとばかりに好き勝手言う俺。

『仲が良いのね。ちょっと羨ましくなるくらいだわ。』

ひとしきり笑い合った後、俺達は調整の依頼を出していたというシアリーの武器を受け取る為、店員がいるカウンターの前に到着した。

『ああ、シアリーさん。依頼されてたブツ、もう仕上がってますよ。持ち帰りします？』

『ありがとう。ちょっと確認させてもらうわ。』

顔馴染みなのか、気さくに話しかけてきた店員に笑顔を返すと、シアリーはカウンターに出された自分の武器を受け取るべく手を伸ばした。

ツインヤスミノコフ2000H。

旧式のフォルムでありながら今なお実用的な武器としての評価も高い、実弾発射型の二丁拳銃だ。

『こりゃまた良い武器だ。愛用武器がツインハンドガンってことは、君はレンジャーだったのか？』

一緒に戦闘に加わる可能性がある以上、プロとして事前に仲間の戦いのスタンスは把握しておく必要がある。彼女についてきた理由にはこうした真面目な一面もあった。

『悔しいけど、近接戦闘をこなすだけの腕力も、テクニックに頼るだけの法撃力もワタシにはなくてね。唯一、かろうじて自慢出来るそ

うなのがこういった銃の腕前だったのよ。』

苦笑しながらシアリーが答える。

『謙遜しなさんな。そのレベルの武器が扱えるんなら、普通に戦力として頼りに出来る。レンジャーなら俺達の戦い方とも相性いいしね。』

俺はお世辞ではなく、本心からそう言った。

ヤスミノコフシリーズは、その独特なフォルムが特徴的だが、フォトン操作が難しく、熟練した人間でなければ実戦で使いこなすことは難しい。

基本的には近距離戦を得意とする俺やヘンリーにとって、遠距離からの射撃を本分とするレンジャーの援護が受けられるというのも、大いに喜べることだった。

『お褒めにあずかり光栄よ。』

嬉しそうに微笑むシアリー。

『しかし、ずいぶんと本格的な武器持ってるな。傭兵仲間にもそいつを欲しがる人間は多いんだぜ？』

返却された銃の入念なチェックを行い、異常がないことを確認して店員に礼を言った後、シアリーが大事そうに銃を抱えてつぶやく。

『この街の治安管理を頼まれた時に、タイラーから譲り受けたのよ。』

そう答えた彼女は、これまでの柔らかな笑顔ではなく、強い意志を感じさせる瞳と引き締まった顔つきに変わっていた。

『……』

ドン・タイラー。今回の依頼の大元であるローグスの頭領。

酒場で依頼内容を聞いた時にも感じたが、彼女が自分のボスに抱く信頼は並々ならぬものがあるようだ。

俺は無粋とは知りつつも、好奇心に負けて彼女に訊ねてみた。

『ドン・タイラーが立派な人物だったのは聞いたことあったが、君と彼とはどういう経緯で知り合ったんだ？もちろん、話したくなかったら無視してくれていい。』

ことによると男女間のプライバシーに立ち入る質問だ。普段の俺なら絶対に関わりようとは思わない、図々しい外野からの問いかけだが、自分の使命を全うせんと凛々しさを感じさせる彼女への興味が、俺に不躰な質問を思い切らせた。

『あはっ、気になる？』

個人的な領域に踏み込む無礼な質問だというのに、彼女は気にした様子も見せずイタズラっぽく微笑んだ。

『彼はワタシにとって、ヒトとして生きる場所を初めて与えてくれた存在。兄であり、父親でもある。………私もね、今回の件の被害者と同じ、「売られた人間」だったのよ』

『そっちに行きましたよ!!!』

夜のとばりが降りた街並みを、相棒の声に誘導されながら疾駆する。

『マース、次の角を右に!これで追い込めたわ!』

背後から飛ぶシアリーの声。

ここモトウブの首都、ダグオラ・シティの特徴は、一言で言えば『巨大な岩山をくり抜いた自然都市』であることだ。

モトウブ開拓時代、開拓民であったビースト達は、ゼロから街を作り上げるのではなく、そびえ立つ岩山を削ることで、風雨をしのぐ住処を作り出した。

都市としての機能より、開拓・資源の確保を優先させたことによる無計画な道路拡張。

岩山の崖っぷちや、洞窟を掘り進めて作られた街のストリートは、まさしく迷路のように入り組んでいる。

案内役として、街の造りに精通しているシアリーが同行していなければ、こんな追いかけっこは到底不可能だったはずだ。

『チェックメイト。……ほら観念してこっちを向きな。』

完全な袋小路に追い込まれたことを悟った柄の悪い若い男ビーストが、苦々しく歪んだ表情で追いついた俺へと振り向く。

『ちっ！なんだってんだてめえら！！何が楽しくてヒトのことを追いかけて回しやがる！』

柄の悪い面構えに、よく似合ったダミ声。

絵に描いたようなチンピラは、血走った目でこちらを睨みつけてくる。

『お前みたいなムサいの追いかけて、楽しい訳ねーだろ。無駄な体力使わせんなバカやろう。』

心底うんざりしてそう言い捨てると、逆上した男ビーストがナノトランサーから一本のダガーを取り出し、こちらに駆けてきた。

『なめてんじゃねえぞこのガキいっ！！！！！！』

手に持つダガーをブンブン振り回しながら、元気に走り寄ってくる。

うわー、この程度の挑発でそこまで取り乱すとは、生活に圧倒的にカルシウムが足りてないねアンタ。

訓練の様子がかけらも見えない素人の動きに、武器を取り出す必要も感じない俺は素手で迎え撃とうと構えを取る。

ドドン！！

刹那、背後から響く重厚な射撃音。

『がふっ！』

銃撃音と同時に、目の前の男ビーストが右肩を押さえてうずくまった。手に持っていたはずのダガーは、くるくると勢い良く回転して宙に舞った後、俺の足元近くに突き刺さった。

『うわ、あつぶね。おいおい、撃つなら撃つって言ってくれよ。ここに当たったらどーすんだ。』

苦笑しながら背後を見やると、ツインヤスミノコフを両手に構えたシアリーが笑みを浮かべて佇んでいた。

『あらごめんなさい。アナタなら絶対当たるようなヘマはしないだろうと思ったものだから。』

小悪魔的な笑いと共に、挑戦的に答えるシアリー。

……なるほど、今のは彼女なりのアピールなのかもしれない。

自分の腕前はこの程度はあるんだと、こちらへ意図的に示したニュアンスが、イタズラっぽい笑みの中にうっすら見えた。やれやれ、美しい花はトゲを持つとはよく言ったもんだ。

呆れる俺の横を通り抜け、シアリーはうずくまる男ビーストに近寄り、うめき声をあげ続ける男を冷たく見下ろした。

『ワタシの目の前でつまらない真似してくれたわねヨソ者さん。さっさと懐にかくした、すったメセタカード出しなさい。』

『な、なんの…ことだ…』

苦痛に顔を歪めながら言いとぼける相手に対し、シアリーが改めて銃口を向けた。

『さっきのは殺傷力のないゴム弾だったけど、これ以上見苦しい言い訳続けるなら容赦なくその顔に風穴空けるわよ？』

ガチャリと音をたてる銃から、冷たい殺気がこぼれる。

『ま、待ってくれ、わかった！わかったよ！出すから勘弁してくれ
！！』

シアリーの様子が脅しではないことに気づいたのか、慌てた男が懷からカードを取り出し、ヤケになったように投げ捨てた。

シアリーに目で合図を受けた俺は、無造作に近寄ってカードを拾い上げる。

『スリ程度のつまらない真似、ワタシだって本来なら気にしないけど、アンタこの街のルール分かってないわね。こういう仕事するんなら、通すべき筋つてもものがあるでしょ？』

冷たい目で男を見下ろしたまま、威圧的に言葉を続けるシアリー。

『この街でヤンチャしたいなら、ローグスを無視するような真似は命取りよ。二度目は警告なしで風穴空けるから、挨拶の必要が理解できたらさっさと失せなさい。』

言い捨てられた男は、怯えた目をしたまま、肩口を押さえながらヨロヨロと走り去っていった。

『よくあるのか？ こういうこと。』

男が去ったのを見送った後、シアリーにそう問いかけてみる。

『まさか。最近入植者は増えてるけど、土地のルールを無視するよな田舎者はそう多くはないわ。ローグスを無視できるのは、今みたいな何も知らないヨソの星から来た三下か、気が触れた狂人ぐらいよ。』

うんざりした様子で苦笑しながら、シアリーが近づいて来て、俺からメセタカードを受け取る。

『ルール違反と言っても、スリ程度なら可愛げもあるし、今みたいに犯人脅して、被害者から謝礼貰って一件落着きただけど……ね……ね……』

暗い目をしたシアリーがつぶやく。

〔同朋の人身売買〕という最悪なタブーを犯した今回の依頼の標的に、言葉で表しきれない怒りを感じているのだろう。

先程、彼女自身から連中を憎む理由をはっきり教えられた俺には、語りかける言葉が見つからず、落ち着かせるように、ただその肩に手をおいた。

『大丈夫、さ、ヘンリーと合流して巡回に戻りましょ。余計な仕事手伝わせちゃってごめんなさいね。』

何でもないといった具合に笑顔に戻ったシアリーが、俺にそう答えた。

シアリーの案内で標的連中の手がかりを得るべく、人攫いが起きたという犯行現場周辺を巡回していた俺達は、「事前にローグスに面通しをする」という最低限の土地のルールを無視し、スリを行った三下の愚行に目の前で遭遇し、今の追いかけっこに至ったという訳だ。

シアリー達ローグスのこうした活動が、無法地帯として悪評高いモトウブの都市に最低限の治安を与えている。

俺は裏社会には裏社会なりの抑止力の存在を目の当たりにし、無法者と呼ばれる彼らローグスへの印象をまた少し改めていた。

『やあ、無事片づいたみたいですね。』

スリの犯人を追いつまむため、別ルートを走ってきたヘンリーが合流する。

『お疲れ相棒。地理の把握はすんだか？』

逃走するスリを追う間、ヘンリーには追跡と同時に今後の活動に不可欠なこの街の地形情報の分析を頼んでおいた。

いざ肝心の標的連中と遭遇した際、不慣れな土地勘が原因で逃げられるという不手際は避けたい。

『この周辺、街の南側一帯は大体把握しましたよ。さすがに複雑な造りになってますから、全体の情報を得るにはまだ少し歩き回る必

要があります。まあ、良い予行演習になりましたね。』

そう言って笑顔を見せるヘンリー。

こういう前準備を任せられる仲間がいることは、仕事をこなす上で非常にありがたい。

俺はヘンリーに笑顔で親指を立てると、シアリーに語りかけた。

『いいかシアリー、アンタにはこれだけ超有能な傭兵二人が味方についている。多少アツパラパーだが、俺が知る限り最高に腕の良い情報屋も、ゲスな奴らのねぐらを掴むために動いてくれている。心配のタネは、完膚なきまでに俺達が叩き潰してやる。だから君はこれ以上何も心配するな。』

突然の長口上に、不意をつかれたシアリーが呆気に取られる。

俺の脳裏には、テノラワークスショップで語られた彼女のセリフが蘇っていた。

《売られた女がどういう目に遭うかは、大体想像つくでしょ？ワタシは自分が人間なんだってことを忘れることで、絶望って意味すら考えないようにして息をしていたわ。》

その苦しみがどんなものか、気持ちがわかるなんて軽々しいことは口が裂けても言えないが。

《そんな状況から救い出してくれて、ローグスという、家族という

知らなかった温もりを与えてくれたのがタイラーだったの》

その、与えられた喜びに報いたいという気持ちには、俺にも覚えがあったんだ。

《だからワタシも思ったの。いつか彼のような存在になりたいって。》

抱く理想は、与えられた温もり故に。

《絶望し、生きている意味を見失ってる、そんな誰かにも、生きる理由を与えられる、そんな存在になりたいって。》

剣を握る確かな理由が増えた俺に、彼女が満面の笑顔を返してくれた。

第三話 〈理由〉（後書き）

モノローグ、及びシアリーへの強い共感。

マースの設定上、深い意味があるんですが、なかなか納得いくレベルで表現しきれない

（／・、）

書き進めるたびに自分の文才の乏しさが浮き彫りになります。はい。

作中の『モトウブで犯罪行為をする前にはログスへの挨拶（みかじめ料などの支払い）が必要』という設定は、本作オリジナルのものです。

裏社会の組織って言ったら、筆者的にはこんなイメージ。

ううむ、貧困な発想でごめんなさい。切腹。

登場人物紹介？

登場人物紹介？

（オリジナルキャラクター）

シアリー・ロウ

種族…ヒューマン

性別…女性

年齢…24歳

職種…レンジャー

主な使用武器

ツインハンドガン

ツインダガー

愛用装備

ツインヤスミノコフ2000H

クロススケア

外見・特徴

金髪のストレートヘア。モデルと言っても通用する整った顔立ちで、周囲の目を引く美人。

普段は露出の多いドレスを着用しているが、ローグスとして外出する時はファシネスベスト、ウェスタイルボトムWに着替える。

モトウブ生まれの一般人のヒューマンだったが、幼少時に孤児となり、ストリートチルドレンをさらい、商品にしていた非道な人身売買組織に売られるという凄惨な過去を持つ。

売られた先のモトウブの商家にて、奴隷として非道な虐待を受けていたが、ローグスのファミリア間抗争により商家が消滅。その後アルフォート・タイラーに拾われ、1ローグスとして新たな人生を踏み出した。

絶望を経験したが故に他者の痛みがわかり、優しさと強さを兼ね備えている。

筆者から一言

…登場する主要なオリキャラは基本的に筆者が実際にゲームで作成したプレイヤーキャラクターなんですが、彼女はその中でも8thキャラクターというあまり操作する機会のない不遇なキャラでした
(汗)

小説化に際し、なんらかの役割を持たせようと、モトウブ編のヒロインとして生い立ちなどを設定してみました。なんかさらに不幸にしてしまった気がして仕方ない(涙)

性格上のモチーフは特になく、優しさと強さを持った凛々しい女性という筆者の妄想から生まれております(笑)

意外と言いますか、彼女の設定により作品に色がついた部分もあり、(暗い部分が大きいですけど)個人的にはお気に入りなキャラです。

最後にはやはり幸せになって欲しいとですね。

ちなみに、彼女とドン・タイラーの間には信頼関係はあっても恋愛関係はありません。

(シアリーからの一方通行な想いはあるかもしれませんが)

人気ある公式キャラとオリキャラをくつつけるなんて真似はチキンな筆者にはできませぬゆえ(笑)

ソアラ・バーツ

種族…ビースト

性別…女性

年齢…18歳

職種…ブレイバー

主な使用武器

ツインクロー

愛用装備

???

外見・特徴

身長155程度、明るい緑色の髪を肩のあたりまでの長さで切り揃え、大きい瞳が印象的な女性ビースト。

本人も元々は傭兵出身だが、現在は当時築いた人脈を駆使しての情報屋として活動している。

明るく、誰からも親しみやすい性格で子どもっぽい印象を与えやすいが、情報屋としての仕事に強い誇りを持っており、仕事のパートナーとしてはマースを始め傭兵連中の間の評判が高い。

筆者から一言

..彼女も筆者のプレイヤーキャラクターの一人です。ビーストのナノブラストがどんなものか使ってみたくてマースから数えて五番目に作成してますね。

作中では傭兵稼業から足を洗って、情報屋という裏方のポジションを任せてみました。フリーの傭兵なら、こういう連中とも付き合いがあった方がリアリティありそうだという発想だったのですが、何気に表に出ちゃってますね（笑）

モチーフは「色気を排除した」ルパン三世のフジコちゃん。

マース以上に原形のキャラから程遠い（笑）

今後、ひょっとしたら彼女が戦闘に立ち会う場面が出てくる可能性も考慮し、愛用装備は伏せときます。

まあキャラクターの装備も筆者の実際のゲーム状況にのっとってるんで、伏せるほど意外な武器が出るわけでもないんですが（笑）

気に入っている立ち位置のキャラなんで、今後さらに活躍させたい
と思っています。

第四話　く役割く（前書き）

今回からモトウブ編が加熱していきます。

プロット通り行くか、一抹の不安が残る私。

とりあえず第四話。

どうか、引き続き駄文にお付き合い下さいませ。

第四話　（役割）

傭兵の仕事に就いて、もう10年以上たつ。

右も左も分からない鼻たれ小僧だった俺が、この命がけの職業で今もこうして生きていられるのは、剣の振り方など色んなことを叩き込んでくれた尊敬する人物と、なんやかんや説教垂れながらも、未だに苦樂を共にしてくれる、生真面目な相棒のおかげだろう。

……まあ、悔しいから間違っても口には出さねーけど。

安定という言葉とは無縁の危険な毎日。

何故そんな仕事を続けるんだ？と真顔で訪ねられることも多い。

……これに関しては、実際に味わった人間にしか分かるまい。

死線をかいくぐり、持てる能力を駆使して掴み取る依頼の達成という名のゴールライン。

その充実感をさらに確かなものにしてくれる、依頼者からの報酬。

自分が果たした役割が、確実に誰かの役に立っていると感じられる瞬間。

人間、誰しも生きる上で己の果たすべきことがはっきりしているってのは幸せなこった。

……ただ、そこに自分が望んだのだという意志さえ込められていれ
ば。

『結局、出くわしたのは事件とは無関係のアホなスリが一件だけか。』

俺はやれやれと肩に手をやりながらつぶやいた。

『巡回始めてその日の内に犯人にたどり着くなんてムシの良い話はありませんよ。新たな被害が出なかっただけ、よしとしましょう。』

苦笑しながら、相づちを返してくる相棒。

俺達が今いるのは街外れに停泊中の本拠としているマイシップ、「オルシナス号」船内。

あの後、夜の市街を歩き続け、そのまま大きなアクシデントにも遭遇せず夜明けの時間を迎えた俺達三人は、初日の巡回を切り上げ一旦解散。それぞれの寝ぐらへと引き上げた。

シアリーとはまた夕方に落ち合う約束をしている。

今頃は彼女も、依頼の話を聞いた、自身がオーナーを務める酒場に
戻っているはずだ。

俺は一仕事終えた自分へのご褒美に、部屋の棚に並べてあるコレク

シヨンの酒瓶の中からボトルを一本選び、グラスに透明な液体を注いだ。

1年前、ある大口の依頼をこなした報酬で購入したこのオルシナス号は、大手複合企業スカイクラッド社の船舶部門が製造したものであり、惑星間の航行はもちろん、快適な居住スペースを完備した割と最新鋭のスペースシップだ。

運転席のあるコントロールデッキ以外に、寝泊まりするそれぞれのマイルームの他、俺の趣味でバーコーナーを設けたリビングルームがついている。

『しかし昼夜逆転の生活が続くのは好ましくありませんね。できるだけ早く、標的に接触したいものです。』

グラスの酒をうまそうに飲む俺を見やりつつ、リビングのソファアに腰を落ち着けたヘンリーがつぶやく。

『まったくだ。酒も夜に思い切り飲む方がやっぱりうまいしな。さて、一眠りするか。夕方からはまた美人のお供でパトロールだ。』

ヘンリーにそう答えた後、残った酒を一口で飲み干し、寝床のあるマイルームに移動しようとしたその時、船内にコール音が鳴り響いた。

『??:??:……こんな朝方に来客か?どこのどいつだ一体。』

つぶやきながらリビングの一角にある外部映像を映すモニターの側へと移動する俺。

この船には周囲を警戒する広範囲センサーが取り付けてあり、警戒モードをオンにしておけば、半径50メートル以内に生体認証してある顔見知り以外の存在が近づくと、今のような警戒音で乗員に知らせる仕組みになっている。

高性能なサーチシステムを内蔵するヘンリーが就寝中、外敵の襲撃があった際に備えて用意したものだ。

血なまぐさい荒事にも携わる傭兵稼業を続ける以上、こうした準備も必要になる。

『私の方では敵対反応は感知してませんから、物騒な客ではないですよです。シアリーさん達からの何かの連絡でしょうかね。』

一晩中歩き続けた為にそろそろ眠気が来ているのか、あくびをかみ殺しながらヘンリーが話しかけてくる。

モニターを覗くと、夜が明けて白みはじめたモトウブの荒野に、二人の人間がこの船を目指してまっすぐ歩いている様子が見えた。

一人は俺やヘンリーと同程度の背丈。がっしりした体型から察するに性別は男だろう。

残る一人は隣を歩く男から頭一つ小さい身長に、割と細身な体系をしているのが見て取れる。

二人とも、モトウブでは砂漠越えの為によく着られる、身にまとうフードによって顔が隠れ、表情を伺い知ることが出来ない。

『……………』

ヘンリーが敵意を感じないと言う以上、こちらへの襲撃を目的とした物騒な外敵という訳ではないのだろう。

ただ、その歩いている姿を見て、俺の中で強い注意を呼びかける危険に対する勘が働いた。

『外に出るぞヘンリー。用件は分からないが、少なくともあの小さい方はカタギには見えない。』

そう、俺の注意を引いたのは小柄な体型の人物の方だった。

何気なく歩いている姿だが、重心の運び方、身にまとう雰囲気が俺達と同じ、戦いを生業とする人間のものだったからだ。

『了解しました。』

俺と同じように、その人物の姿に何か感じるものがあつたのか、疑問を挟まずヘンリーが外で連中を出迎えようとする俺の後について来た。

『おや、わざわざ出迎えてもらえるとは驚いた。朝早くからお邪魔してすまないね。』

船から降り立った俺達二人を見て、フードの男が話しかけてきた。

小柄なもう一人の方は、口を挟まず、無言でこちらを見つめている。

（キャスト……それも女とはね……）

モニターからは見えなかった二人の顔が、正面から向かい合うことであらわになっている。

話しかけてきた男の方は中年のビースト。しわがれた声と、陰鬱な表情が不気味な印象を俺に与えていた。

そして、残るもう一人は意外なことに女性だった。

感情といったものが感じられない静かな瞳。

その表情は、ヘンリーと同じ人工皮膚で形取られた機械生命体、キヤストのものだ。

『さて、こんな町外れに泊めてある船に一体何の用っすかね？一応、街の方に停泊許可は取ってあるから、無断停泊の文句なんかは筋違いだぜ？』

万が一、警察権限を持つガーディアンズが、不審船の取締りに来たという可能性を考慮してそう訊ねてみる。

実際、街外れの荒野とはいえ依頼の間長期滞在する以上、余計なトラブルがないように先日のディマゴラスの討伐依頼を受けた段階で、ガーディアンズの本拠地支部へは事前に届けを出していた。

『いやいや、私達はガーディアンズなどではないよ。あんた達傭兵さんに、ちょっとしたお願いがあって来たただけだ。』

男はこちらの素性を把握していた。

ますますもって不気味な二人の客人に、ヘンリーが話しかける。

『どういった経緯で私達のことをご存知なのかは分かりませんが、何か仕事の依頼でしょうか？申し訳ありませんが、あいにく今は別の依頼を受けている最中でして、お話を伺うにもそちらが解決してからになってしまうのですが。』

丁寧な口調とは裏腹に、ヘンリーも得体の知れない二人組への警戒感を強めているのが分かる。

向こうに気取られないよう、ナノトランサーからいつでも武器を取り出せる体勢を取っていた。

『ふむ、どうやら驚かせてしまったらしい。いや何、お願いというのはそのあんた達が受けているという依頼そのものについてだよ。こちらの話を受けてくれさえすれば、私達もすぐに消える。その後、寝不足を解消する為にゆっくり寝てくれて構わない。』

そう答えた男が不敵に笑みをこぼした。

『ストーカーかあんた？こっちの行動を把握しているようだが、野郎のファンに熱心な追っかけされるのは御免こうむりたいな。』

昨日受けたばかりの依頼や、その後の俺達の動きすら理解している様子から、男は確実に事件の関係者だ。

俺は相手の思惑はどうあれ、向こうからこちらに接触してきた事実

に、内心強い驚きを感じていた。

男の立場はまだ不明だが、仮にこの連中が犯人側の人間だとすれば、こちらの動きが向こうに筒抜けということになる。

それは、依頼者側であるシアリー達ローグスの中に、犯人達に通じる人物が存在する事実を示していた。

『おやおや、頭が働くのは結構なことだが、話も聞かないうちからそう険悪な態度を取られてはこちらとしても困ってしまうな。』

言葉の内容とは反対に、男はこちらの驚きと焦りを感じ取ったのか、楽しそうにイヤミな笑みを浮かべている。

『もったいぶったやり取りは好きじゃねーんだ。さっさと用件を話しな。』

男の余裕ある態度がしやくに障る。

相手にこちらの情報がばれ、こちらは一切向こうを把握できていないという致命的な現実、俺の声は自然と険しいものになっていた。

『はっはっは、まあそういきり立たないでくれ。お願いというのは他でもない。今受けている依頼、すぐに手を引いてくれないか？お望みなら、依頼の報酬額の倍は出してやれるぞ。』

自身が犯人側の一員であることを示す決定的な一言を告げ、男は不快な笑い声をあげた。

『拘束する。ヘンリー、援護頼む。』

そう言い捨てた後、俺はナノトランサーからツインセイバー、剣影を取り出し、男に向かって駆け出す。

会話を続けて情報を引き出すことも考えたが、内通者がいるということ、ここにはいない依頼者である女ローグスの身に危険が及んでいる可能性がある。

一刻も早くこの男を捕らえ、シアリーのもとへ駆けつけなければならぬ。

最短距離で男に到達すべく、俺は茶色い荒野を無言で駆け抜けた。

『おやおや、意外に血の氣が多いな。こちらとしては無関係な君たちへの慈悲だったんだがね。仕方ない……ビッキー、お望み通り眠らせてやれ。』

駆け寄ってくる俺にあわてた様子もなく、ビーストの男が隣に並ぶキャストの女にそう命じる。

『……わかった……』

男の声に反応し、ビッキーと呼ばれたキャストの女が身にまとうフードを投げ捨てた。

鮮烈な赤い外装。シアリーと同じ長い金髪をおさげのように二つに分け、後ろに流している。

少女のようなあどけない顔立ちのその女は、不似合いな無骨なライフルをその手に携えていた。

（インフィニットコランダム！）

女が構えたライフルを見て、俺の体に戦慄が走る。

三大メーカーの一つ、GRM社製の長銃の中でも最高峰の威力を誇るそれは、同盟軍の上層部の中でも扱える人間が少ない、危険な破壊力を秘めた逸品だ。

直撃を受ければ、身にまとうシールドラインで衝撃を緩和出来たとしても、五体満足にはいかないだろう。

『さっせませんよ！！』

後方から届く頼もしい叫び。

戦闘に入る合図を受けたヘンリーが俺の援護の為、銃を構える女キヤストに向けてフローズンシューターから弾丸を撃ち放つ。

『…無駄……』

しかし、女キヤストは襲い来るフォトン弾を気にした様子も見せず、無表情なまま、赤い外装からシールドラインを展開させる。

バッシュッ！！

先日のシアリーの部下との戦いで俺が行ったように、女キヤストはフォトンの障壁を使って自身に放たれた弾丸を消滅させた。

（ちっ、やっぱタダもんじゃねえ！）

接近戦を本分にするとはいえ、ヘンリーの射撃はシアリーの部下とは比較にならない正確さと威力を誇る。

的確に急所を狙った高威力の弾丸は、緩和は出来ても完全に消滅させることは俺でも難しい。

『…処理する……』

ヘンリーの援護射撃の間も、俺は全力で駆けていたが、切り込むにはまだ距離があった。

体勢を崩すこともしなかった女キャストは、機械的なつぶやきをこぼした後、こちらに向けて殺意のこもった正確な射撃を行ってきた。

ドッ！ドンッ！！

射撃音と同時に放たれた高密度のフォトン弾。

発射時に見えた銃身の周りの空気中のフォトンの揺らぎから、予想した通り、とんでもない威力が込められているのが察せられる。

『…ざけんなっ！！』

到達前に初弾を浴びるのは、距離の関係上、駆け出した時から予測済みだ。

単純なシールドラインの展開での無力化が難しいことを悟った俺は、手に持つ愛刀・剣影を目前にかかげ、着弾の瞬間に全力でフォトンを流し込む。

キンッッ！！！！！！

両腕から伝わってくる激しい衝撃と、耳をつんざく派手な破裂音。

自慢の愛刀は、高密度の弾丸との衝突を見事に耐え抜き、俺は無傷のまま、女キャストの目前まで到達した。

『もらった！！！！』

ヘンリーの射撃を無効化した手並みといい、今の銃撃の威力の高さといい、女だからと手加減できる相手ではない。

俺は一太刀で勝負を決するべく、右手に持つ刀身で女キャストに向けて全力の袈裟切りを放った。

ギンッッ！！

絶対の自信を持って行った斬撃。

しかし、外しようのない近距離からの俺の一撃を、女キャストは一瞬で喚装を終えたツインセイバーで完璧に防ぎきった。

『こいつっ！！！！』

銃撃を防いだ時点で勝利を確信していた俺をあざ笑うかのように、目の前に現れた左右非対称の双手剣。

ティーガ・ド・ラガンという名で呼ばれるそのツインセイバーで、女キャストは間髪入れずにこちらへ斬りかかってくる。

『調子乗ってんじゃねえぞこんちくしょう!』

相手は想像以上の手練れだ。

ここで時間をかければ、その分だけシアリーが俺の手の届かないところで危険にさらされることになる。

こみ上げてくる焦りを無理やり押さえ込み、俺は襲い来る左側からの斬撃にフォトンを流した鞘を打ち合わせた。

『……ッ!!』

気合いを込めた鞘の一撃は、女キャストが右手に持つ片方の剣を弾き飛ばし、相手の体勢を崩す。

『シッ!!』

とどめとばかりに俺が再度右手の刀身を振り下ろした瞬間、

『……発動……』

ドンッ!!

女のつぶやきと同時に俺の足下から連続して紅蓮の炎が立ち上った。

『トラップだと!?!』

うかつだった。いつの間に仕込まれたのか、爆炎の罠は完全に俺を捕らえ、目の前が真っ赤に染まる。

『ぐつつ!!!』

身を焼く灼熱の炎の嵐。

とっさに展開したシールドラインをもつてしても、防ぎきれない耐え難い高熱の波が俺の身を侵す。

『……これで終わり……』

完全に体勢を崩した俺に向かって、再び得物をライフルに変えた女キャストが銃口を向けながらつぶやいた。

『そこまでですっ!!!』

銃口からフォトン弾が放たれようとしたその瞬間、ブレイン・スパイラルを装着したヘンリーが、横合いから女キャストに殴りかかった。

『……!!…邪魔……』

注意を俺に奪われていた女キャストは、突然の襲撃に対処しきれず、銃の発射を取りやめて後方に飛び退く。

『っらああああっ!!!』

戦いが始まってから初めて相手が見せた動揺と明白な隙。

俺は炎に包まれたまま氣力を振り絞り、右足で大地を踏み込み、一足飛びに間合いを詰めて剣影での斬撃を相手に見舞った。

『……ぐッ！！』

飛び退いたばかりの不十分な体勢だった為、女キャストはシールドラインの展開が間に合わず、俺の斬撃は相手の肩口を斬りえぐっていた。

手傷を追った女キャストは、たまらず距離を取り直す。

『！…これは驚いた。聞いていたよりずいぶん腕が立つようだ。』

女キャストを盾にして、後方に下がっていた男ビーストが、戦況の変化を見て感心したように声をあげる。

仲間の危機にもかかわらず、その様子には微塵も焦りが感じられない。

『まだしばらく見ていたいところだが、そろそろ時間のようだ。』

そう呟いた男の視線の先には、荒野をこちらに向けて疾走してくる数台の大型フローダーバイクがあった。

（新手かよっ！？）

やっと相手に一撃入れたものの、今の斬撃が浅かったことは斬った感触でわかる。

女キャストは戦闘力を有したまま未だに健在であり、これ以上の敵の増加は場合によってはこちらの全滅の可能性も浮かび上がらせる。

『……時間……ここまで……』

しかし、覚悟を決める必要を感じていた俺を無視するかのように、肩口を押さえた女キャストは、再度後方に飛び退いて俺達から距離を取った後、武装を解いて男ビーストのもとへ駆け出した。

『なっ！逃がすかよ！！』

予想外の行動に意表をつかれた俺は、慌てて後を追おうとしたが、俺の前に進み出たヘンリーが両手を広げた背中で行く手を遮った。

『何してるヘンリー！追わないと逃げられるだろうが！！』

『冷静になって下さいマース！今の私達ではこれ以上の増援を相手取るのは危険です！！』

前方の男ビースト達を睨みながら、ヘンリーが俺を怒鳴りつけた。

緊迫したその声から、俺は相棒がそのサーチ能力で、向かってくるフローダーバイクからもかなりの数の敵対反応を感じ取ったことを悟った。

『賢明だよ傭兵君。いや、正直ビッキーがここまで戦って殺せないとは、こちらも驚いたよ。』

心底楽しそうに、不快な声で笑う男ビースト。

『ここで始末しても良いんだが、今回の訪問はもともと警告が目的だったからね。我々はここら辺で失礼するよ。』

余裕を持ったまま男が話し続けていると、向かって来ていたフロードバイクの集団がついに到着した。

こちらを取り囲むように現れた数は全部で10台。

どのバイクにも、ライフルやアックスで武装した、剣呑な雰囲気のプロストが搭乗している。

俺とヘンリーは背中合わせの形で連中に対し構えを取った。

『勇敢なことだな。敵にするにはやはり惜しい。』

そう笑いながら呟く男の元へ、到着した集団から一台が近寄り、男と、女キャストが乗り込んだ。

『一つ良いことを教えてあげよう傭兵君。人間には誰しも役割というものがある。君達は君達の、ただの金目当ての傭兵という役割をこなしていればいいのだ。下らない正義感でこれ以上首を突っ込んでくるなら、今度はその役割を傭兵ではなく、無意味な死体という名に変えてやるぞ。』

フロードバイクの上から見下ろしてくる中年の男プロストは、こちらをあざ笑うように言い捨てると、運転席の部下らしきプロストに命じて移動を始めた。

『待て！てめーら一体何者だ！何の目的でローグ스에喧嘩売るような真似しやがる！！』

敵に見逃されようとしている屈辱感で張り裂けそうになりながら、俺は男に向かって叫ぶ。

連中がダグオラ・シティーで人攫いをやってのけた一味なのはもはや間違いない。

ただ、ここまで組織だった戦力を有した一団が、モトウブ全体を支えるはずのドン・タイラー率いるローグスに真っ向から対立しようとする理由をはっきりさせたかった。

『下らない質問だな。本当は君も分かっているんじゃないか？』

不適に笑う男がしわがれた声で言い続ける。

『つまらない義理なんぞに縛られず、己の成したいことを成す。私達こそが真のローグスだからだよ。』

そう言い捨てた男は、今度こそこちらに一瞥もくれず、荒野に向かってバイクを走らせていった。

『……………』

男の乗ったバイクに続いて、次々と去っていく一団。

去り際、俺達と刃を交えた女キャストの感情のない瞳が、俺を冷たく見つめていた。

『マース……………』

連中が去った後、ヘンリーがこちらに声をかけてくる。

『くそがっ！！』

俺は弾かれたように街に向かって走り出す。

トラップによって負った火傷の痛みを振り切る為に、笑顔を浮かべた女ローグスの姿を思い起こす。

打ち碎かれたちっぴけな自分のプライドも、男が残した言葉の意味も、今はどうでも良い。

（頼む、無事でいてくれ！）

荒野を駆ける俺の胸にあったのは、自分を頼ってくれた女の無事を願う叫ぶような祈りだけだった。

第四話　く役割く（後書き）

戦闘描写はつくづく難しい

（|| ||;）

思った通りの緊迫感が出せていれば良いんですが……

頑張って表現力があがるように励んでいきたいと思います。

読んで頂き、本当にありがとうございます

、（^^）

第五話　く意地く（前書き）

うわ、書いてみたら超なげえ！（汗）

もう少し簡潔にまとめられるよう、次から本気で気をつけます

（T ^ T）

それでは第五話、宜しくどうぞ！。

第五話　（意地）

「そんな情けない顔するな。」

今でも脳裏に焼き付いて離れない、俺がこの世でただ一人こうありたいと思えた人間からの最期の言葉。

自分が負っている致命傷など気にならないかのように、ただ静かに笑ってこちらを見つめていたあの優しい瞳。

……ああ、あの時俺は誓ったはずなのに。

守られる側ではなく、誰かを守る立場の人間になるのだと。

こんな想いを二度と繰り返さぬよう、頼りとされるに相応しい力を得るのだと。

あの最期の眼差しは、今でもこの胸を後悔という名の炎で焦がす。

自分を許すことが出来ず、ただひたすらに己を責め、贖罪のように自身を鍛え上げたその後の日々。

ああ、だがきつと今、俺はあの頃の情けない、未熟だった自分とならんら変わらない、あの人が言った情けない表情をしているに違いない。

『こちらに通報があったのは一時間程前。我々が到着した時にはもうこの有り様だった。』

大柄なビーストのガーディアンズの男が、滅茶苦茶に荒らされた店内を見やりながら、そう俺に説明する。

『朝方ということで店内に客はいなかったが、中にいた店員連中はこの通りだ。……むごいことをする。』

つぶやいた男の視線の先には、血まみれで店の床に倒れ伏す数体の死体があった。

苦悶の表情を浮かべて倒れている死体のうち、二人の顔には見覚えがある。俺とヘンリーを腕試しの為に襲った中の二名に間違いなかった。

俺は握りしめた自分の右手から、血が流れ出したことを感じていた。

『抵抗しようとしたのか、銃は握っているが発砲した様子はないな。襲撃自体はものの数分というところか。荒事に手慣れた連中の仕業だろう。』

ガーディアンズの男が感心したようにそうつぶやく。

『……女は……いなかったか？』

倒れている数人のうち、恐怖に見開かれたままだった一体の死体の

目を、左手の手のひらで閉じてやりながら、俺はガーディアンズの男に訊ねた。

『この店のオーナーだっていう女性のことか？……うむ、俺達もまだ遺体の搬送には手をつけていないからな。少なくとも店内では見かけていないな。』

痛ましそうに俺へ視線を投げつつ、ガーディアンズの男が答える。

『レオさん、そろそろ行きましょう。一度支部に戻って報告をあげないと。』

店の外から男を呼ぶ声が聞こえてくる。

『わかった。今いく！』

男は自分を呼ぶ声にそう答えると、店の外へ向かうべく歩き出した。

二、三步足を進めた後、思い出したようにこちらを振り返り、俺に話しかけてくる。

『マース、詳しい事情は分らんが、力になれることがあればいつでも連絡しろ。俺もまだしばらくはこの街に滞在する予定だからな。』

そう言った男が、連絡先だと言って俺にガーディアンズ支部内に与えられているという自分のルームナンバーを伝えてきた。

『いいのか？あんだ確か今は機動警護部だろう。あまり勝手な真似したら、上から睨まれるんじゃないか？』

こちらを氣遣うように提案をしてきた、その顔馴染みのガーディアンズに俺が訊ねる。

『本来の任務だったディマゴラスの討伐を、どこかの傭兵にかっさらわれたからな。しばらく体が空いているんだ。何、組織の縄張りなど、人命被害を少なくする為に邪魔になるなら、遠慮なく無視してやるさ。』

そう言った男は俺に笑顔を見せた後、今度こそ店外へ歩み去っていった。

『……すまないな、レオジーニョ。』

男の背中に礼を言って、俺は改めて荒らされた店内を見渡した。

昨日、依頼の内容を説明され、その後は楽しく飲み明かした酒場は今や見る影もない。

あの時、シアリーに命じられ、今俺が着ているゴコウバオリを調達してきた若いビーストの男も、店の床に物言わぬ骸となって、変わり果てた姿を見せていた。

『……………』

自分のうかつさが許せなかった。

彼らの死は間違いなく俺の油断が生んだ結果だ。

鉄の結束を持つローグスの中に、敵対する犯人達につながる内通者

など存在しないと決めつけ、凶悪犯罪をなした犯人側の組織力を甘く見ていた。

あの時、シアリーは何と話していただろうか。

ドン・タイラーが来れない理由として、ローグスの秘密事項である、反乱を画策している裏切り者の存在を俺達に明かしてくれていたはずなのに。

先ほどの戦闘の後、フードを着た中年のビーストが残した捨てゼリフ。

「私達こそが、真のローグスだからだよ」

耳障りなしわがれたその声が、何度も俺の頭に鳴り響く。

二つの情報を、別の事件のものと決めつけていた俺達。

『…いずれにしても、手持ちの情報が足りなさすぎるか……』

脳裏に築きつつあった仮説を実証する為にも、今必要なのは未だ影すら掴めない、あのフードの男達の情報だった。

『マース、よろしいですか？』

物思いにふける俺に、外から店内に入ってきたヘンリーが話しかけてきた。

先ほどの戦闘後、駆け出した俺に続いた相棒は、さっきまで外でレオジーニョが連れていたガーディアンズの連中に、自分達の身分証

明の為ライセンスカードを提示し、事情説明を行っていたはずだ。

『レオジーニヨさん、久々に会いましたね。こんな場所で再会するとは驚きました。』

そう言ったヘンリーは店内を見渡し、倒れている死体に目をやると悲しそうに顔を歪めた。

『まさかこんなことになるとは……申し訳ありません。私も予測が出来ませんでした。』

自身の不甲斐なさを責めるようにつぶやく相棒。

『俺も同じさ。内通者の可能性を考えなかった時点で、俺達は取り返しのつかないヘマを踏んでたんだ。』

自分と同じように己を責める相棒の姿に、改めて冷静になる必要を感じた俺が相槌をうつ。

『とにかく今は情報が欲しい。シアリーがいないってのは、どういうことだと思う？』

店内の死体の中に、俺達の依頼者の姿はなかった。

今日の明け方まで一緒だった、整った顔だちをいたずらっぽく微笑ませた彼女の姿が脳裏に浮かぶ。

彼女が内通者ということは考えられない。

犯人側の人間なら、自分達を捕らえようとする人間をわざわざ雇お

うとは思わないし、入念に俺達の腕前を確認した彼女の様子は、演技などではなかった。

依頼から手を引くよう忠告してきたフードの男の言動とも矛盾する。

何より、自分の生い立ちを語り、犯人達への怒りをあらわにし、ドン・タイラーへの深い信頼を見せていた彼女の言葉が、全て嘘だったなどとは信じたくない。

尊敬する人間の力になりたいと言っていたその姿に、俺は理屈ではない、強い生き方の共感を感じたのだから。

『……他の方達は皆この場で殺されています。姿が見えない以上、可能性としては拉致も考えられますが、連中の目的が不明な今は何とも言えませんね。』

真剣な面持ちでつぶやくヘンリー。

『あー、考えごとしているとこすまねえが、こっちの話も聞いてもらっていいかい？ シカトされるってのはなかなか辛いもんなんだぜ？』

八方ふさがりな現状に頭を悩ませていた俺達の耳に、突然聞き慣れない男の声が響いてきた。

『ああ、申し訳ありません。ノ・ボルさん。』

そう言ったヘンリーの視線の先に、店の入り口に立つ一人のヒューマンの男の姿があった。

オールバックの髪に、髭をたくわえた色黒な顔立ち。

粗野な印象を受けるその男は面白くなさそうに、フンと鼻を鳴らしてこちらを見つめていた。

（誰だ？）

殺人事件の調査の為、現場に残ったガーディアンズかと思っていたが、男の風貌は警護会社の人間には見えなかった。

『マース、こちらの方から何かお話があるとのことですよ。……ローグスの一員だそうです。』

外に出ていた際に接触してきたのだろうか。

ヘンリーはすでに自己紹介を受けている様子だった。

俺は幾分警戒しながら、相手に敵意が隠されていないことを確認した後、軽く会釈をして向こうからの言葉を待つ。

『そう胡散臭そうな目で見ねえでくれよ。アンタら、シアリーと一緒にだったっていう傭兵なんだろ？俺はノ・ボル。あいつの仲間のローグスだよ。』

そう言った男は、床に倒れている数名のローグスの死体を見つめ、辛そうな声で話し続けた。

『畜生、ひでえ真似しやがる。……あんた達、悪いが何も言わずについてきてくれ。あんたらを待ってる人がいるんだ。』

同朋の死体に悲しみの表情を見せた男は、そう言って俺達に同道を促し、外へ移動しようとする。

『……待ってくれ、こっちはアンタの素性も把握出来てないんだ。そう言われてホイホイ付いていく訳にはいかねーよ。』

シアリーの名が出たとは言え、内通者の存在から後手を踏んだばかりだ。

男の話を鵜呑みにして、行く先も分からないまま同行する気にはなれなかった。

『ちっ、そんな話してる場合じゃ……』

ピーッピーッ！

同行に対する拒否の返答をした俺に、ノ・ボルと名乗った男が文句を返そうとした瞬間、俺の懐の中の携帯用の通信機が受信を知らせる機械音を鳴らした。

『……ソアラか？』

連絡をよこした相手先の通信番号が、馴染みの情報屋のものであることを確認した俺は、興奮するノ・ボルに構わず即座に通信を開始した。

【あ、つながった！マース、そっち大丈夫？ケガとかしてない？】

通話の開始の操作をした通信機のモニター画面には、緑の髪をした女ビーストが映っていた。

『ああ、襲われはしたが問題ない。それより、何か分かったのか？
こっちは俺のヘマでシアリーが行方不明だ。何でもいい、連中に関する情報があれば教えてくれ。』

感情を抑えようとしても、どうしても焦りが出る。依頼人の身に対する不安が俺の口調を厳しいものにしていった。

【うん、分かってる。……ごめんよ、アタシの方も一足遅かったみたい。色々調べて分かったことがあるんだ。実は連中からもさつき連絡があっただよ。】

???

ソアラの言葉の内容が理解できない。

連中というのは、あのフードの男達のことだろうか？奴らからの連絡があったという事実が意味するところを考えてみるが、モニターの向こうの顔馴染みの情報屋が、どういう経緯で奴らと直接接触したのか、さっぱり分からなかった。

『待てソアラ、お前連中と接触してるのか？居場所が分かってるんなら今すぐ教えてくれ！』

語調を荒げた俺に驚いたのか、ソアラが一瞬身を引きながら答えてくる。

【ちょっと、落ち着きなって！通信機の座標からするとアンタ達シ

アリーの酒場にいるんでしょ？今、そっちに髭づらのヒューマンのオッサンが来てない？ノ・ボルって奴。」

『誰がオッサンだ！』

ソアラの言葉を受け、通信のやり取りを聞いていたノ・ボルが抗議の声をあげた。

【あ、いたんだ？アンタバカでしょ！？この状況下で面識もないアンタ一人が迎えに行っても、マース達が来てくれる訳ないじゃん！】

ソアラの罵声を受けたノ・ボルが、ますます興奮の色を見せながら答える。

『ば、バカとはなんだバカとは！ちんたらやってる暇はねえんだろが！こいつらにも話を通すべきだってお前が言ったから、わざわざオレが迎えに来てやったんじゃないか！』

事情が分からない俺は、同じく事態の流れが把握出来ないヘンリーに合図を送り、モニターの向こうのソアラに語りかけた。

『もういい、分かった。こっちも時間が惜しい。ソアラ、彼の言う待ってる人間ってのはお前のことか？合流するなら早くしよう。彼について行けばいいのか？』

ソアラと顔見知りである様子を見て、ノ・ボルと名乗った男への警戒心はなくなった。何がしかの情報を掴んだらしい女ビーストから直接会って話を聞くべく、俺は一旦通信を切り上げようとした。

【うん、あ、いや、待ってる人ってのはアタシだけじゃないんだ。

彼からもアンタ達に直接話があるみたい。」

『……？』

モニターの向こうのソアラがそう言って自分の隣に目配せをして、画面の外へと消えた。

入れ代わりに一人のビーストの青年が、画面外から移動してきて、通信モニター上にその姿を現した。

白銀の髪を分け、額には大きな十字傷。

精悍な顔つきと強い眼光を有した眼差しが、画面の向こうからこちらを覗いていた。

【顔を合わせるのは初めてになるな。君達にはこちらの不手際で迷惑をかけたようだ。謝罪させてもらおう。】

そう言った男は呆気にとられているこちらに向かって頭を下げた後、自らの名を名乗った。

【はじめまして、傭兵諸君。私はタイラー。今はドン・タイラーと呼ばれている者だ。】

不機嫌な様子のノ・ボルをなだめつつ、俺達は彼が運転する小型フライヤーに乗って、ダグオラ・シティから10分程離れた合流場所

であるというモトウブの荒野へと移動した。

『……でかい船だな。』

フライヤーから降り立った俺は、眼前にその姿を見せけているスペースシップを見上げ、そうつぶやいた。

ランデイル号。

海賊タイラー・ファミリーの旗鑑であったその船は、俺達のオルシナス号よりさらに一回り大きく、目に見えるだけでもかなりの兵装をまとった、ローグスのボスの乗艦に相応しい威容を備えていた。

『こっちだ。ついて来な。』

出迎えに来た数名のローグスに、小型フライヤーの船への収納を命じた後、ノ・ボルが先頭だって俺達を船内へ招き入れた。

タラップを登り、船内に足を踏み入れた俺達にノ・ボルが話しかけてくる。

『本来ならファミリー以外の人間が入れる場所じゃねえんだが、頭領の命令だ。あんたら、船の様子とか他言しねえようにしてくれよ？』

興味深げに周囲を見渡すヘンリー。

『ローグスの海賊が持つ船の凄さは噂に聞いていましたが、立派なものですな。私達のマイシップも設備は良い方だと思ってましたが、これは正直比較にならないようです。』

感心したようにつぶやく相棒。

『個人所有の一般船と比べられちゃ困るぜ。こちとらまだタイラー・ファミリーだった頃から、こいつで荒事を凌いできたんだからよ。』

ノ・ボルはそう自慢げに言って、船内の一室に通じる赤いドアの前に立つと、大きな声を張り上げた。

『頭領！客人をお連れしました！！』

船内に響き渡る怒鳴り声。

しばらくして部屋の中から静かでありながら威厳のある声が返ってきた。

『入れ。』

返答と同時に自動で開く赤いドア。

扉が開いたことで視界に入ってきた応接室と思わしき部屋の中には、先程通信機のモニター上でやり取りを行った馴染みの情報屋と、静かに佇むローグスの英雄の姿があった。

『あんたねえ、そんな馬鹿デカイ声張り上げなくても、ノックするなり備え付けのコールフォン鳴らすなりすりゃいいじゃないの。無駄に機械に強いくせに、なんでそんなバカっぽい真似するのさ。』

ノ・ボルの叫び声に驚いたのか、ソアラが自分のビースト特有のけもの耳に手をやりながら恨めしそうな顔で呆れた声を出す。

『はっ、軟弱なこと言ってんじゃねえよ。ローグスなら気合いってもんが必要だってヒル・ボルの兄貴が言ってたんだ。雰囲気ってやつよ、雰囲気。』

先程の通信でオッサン呼ばわりされたのが気に入らなかったのか、嫌そうな顔で睨んでいるソアラを小気味良さげに見やりながらノ・ボルが答えた。

『……ノ・ボル、その辺にしておけ。客人の前だ。』

静かでありながら迫力のある声が室内に響く。

部下をたしなめた声の主は、こちらを向いて歓迎の意を示すように会釈をしてきた。

『ランディール号へようこそ。先程はモニター上で失礼した。改めて名乗らせてもらおう。タイラーだ。』

そう話しかけてきたビーストの男は静かな瞳でこちらを見つめている。

ドン・タイラー。

SEED事変の混乱から、壊滅状態にあったローグス全体をまとめ直し、現在はその首領としてモトゥブを取り仕切る傑物。

身にまとう雰囲気は、荒くれ者達を統べるローグスのトップとしては、意外にも理性的な、落ち着きのある冷静な人物といった印象をこちらに与えていた。

『モトウブをまとめる偉大なローグ스에会えて光栄だよ。自己紹介は必要ないよな？あんたが雇ってくれた傭兵だ。無礼なのは百も承知で訊ねるが、あんた、なんでこんなところにいるんだ？シアリーから聞いてた話だと、今は身動き取れないんじゃないかったのか？』

俺は冷静なタイラーの挨拶に苛立ち、トゲを含めた声で返答する。

『ちょっと、マース！！』

喧嘩腰な俺の態度に驚いたのか、ソアラがたしなめるように注意の声をかけてきた。

『……ソアラ、構わんよ。事情を説明出来なかったこちらの落ち度だ。彼が不満を感じるのも当然だろう。』

そう言ったローグ스의英雄は、手に向けて部屋に置かれたソファアへ座るようこちらに促してきた。

『シアリーの身を案じてくれているのは分かるが、まずはこちらの話を聞いて欲しい。私としても、彼女を一刻も早く助け出したいのだ。お互い、無駄な時間を過ごすのは本意ではあるまい。』

そう言ったタイラーは、自身も部屋のソファアに腰を沈め、こちらの様子をうかがっている。

その身を案じている女ローグ스의名が出たことで、俺もそれ以上敵対的な態度を取ることを止め、ヘンリーと二人、勧められた通りに席に腰を下ろした。

席に座った俺達を見やり、落ち着きのある声でタイラーが話を続ける。

『まずは改めて謝罪させてもらおう。今回はこちらも完全に裏をかかれた。君達にも命に危険が及ぶ迷惑をかけてしまったようだ。すまないと思っている。』

そう言ったローグスの首領は、言葉が嘘でないことを示すように、こちらに向けて頭を下げてきた。

『ちよっ！そんな、依頼者であるアナタが私達にそんな真似をしないで下さい！仕事の上で命を危険にさらすのは私達傭兵なら当然のことです。そちらが謝らなければならぬわねはありませんよ！』

突然の謝罪に驚いたのか、慌ててヘンリーが頭を上げるようにタイラーに促す。

正直俺も驚いていた。一つの惑星のトップとも言える存在が、俺達のような一介の傭兵に頭を下げるなんて、普通に考えて有り得ない。

抜き打ちの腕試しや、犯人側からの突然の襲撃など、予想外な出来事は確かにあったが、その責任は彼が負うべきものではないはずだ。しかし、こちらの狼狽を気にした様子も見せず、ローグスの首領は落ち着いた様子で言葉を続けた。

『いや、これは私のローグスをまとめる者としての通すべき矜持なのだ。迷惑をかけた詫びは別にさせてもらおうとして、今は必要な情報を伝えさせてもらおう。』

そう言って頭を上げたタイラーは、説明を促すようにやり取りを見守っていたソアラに目で合図を送った。

俺は、守るべき対象が行方不明になったことで頭に血が昇っていた自分を恥じた。

目の前にいるローグスの英雄は、この状況下で己の決めた筋を通すべく、単なる傭兵に過ぎない自分達へ、何のためらいなく頭を下げてきたのだ。

眼前の本来の依頼人が、噂通り信頼に足る人物であることを理解し、俺はソアラからの説明を待った。

『そういう信念貫く所はホントカッコいいよドン・タイラー。……それじゃ、アタシから説明させてもらうね。』

そう言ったソアラは、手元にノート型の端末を用意してキーボードを叩くと、こちらに見えるように画面を反転させた。

『!?!』

何事かと思って画面を覗いた俺の目に飛び込んできたのは、見知った金髪の女ローグスが、意識を失った状態で手足を縛られた上、猿ぐつわを咬まされ拘束されている姿だった。

『シアリー!?!』

俺は予想外の映像にたまらず叫び声を上げた。

『落ち着いてマース。彼女はまだ無事なはずよ。向こうが伝えてきたこのメッセージが本当ならね。』

そう言ったソアラが指差した先には、シアリーの映像とは別に、画面を分けて表示されている文字だけの手紙が映っていた。

「ドンドン・タイラーに告げる。ダグオラ・シティー、およびこちらの指定するモトゥブ周辺のサテライトベルト一帯の管理に関し、今後、犯罪行為・治安維持・商業上の一切の手出しをしないことを要求する。我々はローグスの在り方について貴様とは相容れることはない。要求が通らないならば、貴様の仲間であるこの女を見せしめの為の生け贄とすることで、モトゥブに存在する全ての同朋が、ローグスの誇りを取り戻す為の開戦の烽火とする。」

『……………!!』

表示されていた文面が意味するものはあまりにも明白過ぎた。俺は反逆の意志を告げられたローグスの首領に視線を映した。

『……………見ての通りだ。情けないことだが、今回の一連の騒動は、私の配下……………いや、元配下の一部が画策した反乱という訳だ。』

無感情に言い捨てるタイラー。

部下としていた連中の悪辣な裏切り。その冷静な表情からは、今の彼の心情を垣間見ることは出来なかった。

『連中の頭は？反乱の噂があるとは俺も聞いていた。当然、あんたは向こうのことを知ってるんだろ？』

無礼な物言いなのは承知の上だが、今は一刻も早く、敵である連中の情報が欲しかった。

『……うむ。まあ教えても良いだろう。リーヴ・クラウン。サテライトベルト上にある、一つの小惑星で賭博などを取り仕切る小さなファミリーをまとめている男だ。SEED事変以降、私がローグスを一つにした際、大きな抵抗もなく傘下に下ってきた。』

何かを思案したように一瞬だけ間を置いたタイラーだったが、こちらの望んだ通り、反逆者の情報を伝えてきた。

俺の脳裏に、不快なしわがれた声で笑うフードを着た中年のビーストの姿が浮かぶ。

『抵抗もなくて……それではこれまで従順な様子だった部下が、突然こんな真似をしてきたということですか？』

驚いた様子のヘンリーがそうつぶやく。

『さてな。当時は確かに従順だったが、腹の底で何を考えていたかは私にも分からん。こちらとしては同朋に迎えた以上、ローグスとしての面子や経済的な利益も、傘下に入れる前同様に配慮していたつもりだが、結局の所、裏切りの理由などは人の欲望の数だけあるものだ。強いて原因を上げるとすれば、それを止められなかった私の力不足だろう。』

僅かに感情の揺らぎを見せるタイラー。

誇り高い彼であれば、怒りを感じるのは、裏切った相手よりそれを

抑えることが出来なかった自分自身に対してなのかもしれない。

彼の話によると、反乱の噂が上がった一月前、タイラーは本人に事情を聞いただすべく、すぐさま相手の本拠地であるサテライトベルト上の小惑星へ直接赴いたらしい。

しかし説得対象であった反逆者リーヴは、自身の病気を理由にして取り付けた面会の約束をキャンセル。

首領たるタイラーの顔に泥を塗るような真似で彼の誠意を踏みにじった。

『今思い返せば、あの時点で奴の策にはまってしまっていたのだろう。』

後悔するように己の拳を握りしめるローグスの英雄。

タイラー自身は話し合いを目的として赴いたが、相手に反乱の噂がある以上、万が一でも首領たる彼を危険な目にさらす訳にはいかない。

必要ないと言い続けたタイラーに、シアリー達ローグスの配下のメンバーは仲間への示しが見つからないと、強引に手練れの部下を護衛としてつけさせた。

『あの時点じゃ確証なかったし、シアリーの前でもあったから言えなかったけど、アタシは人身売買の連中の話を聞いた時から、犯人がローグスの中にいるんじゃないかって感じてたんだ。』

バツが悪そうに、下を向きながらソアラが話す。

『さらわれた子どもの遺体は、臓器を奪われてたって話だったでしょ？でも、臓器の闇取引なんてモトウブでローグスに知られずに行うのはまず無理だよ。そんなリスクの高い犯罪を、余所者のぽっと出の連中がこなすなんて、アタシには信じられなかった。』

あの晩、シアリーから反乱の事情を聞いたソアラは、申し合わせたようなタイミングでの人身売買騒ぎに、サテライトベルトでの反乱の噂が陽動で、ダグオラ・シティーでの騒ぎこそが反逆者の狙いなのではないかと推測を立てた。

俺達とシアリーの酒場で別れた直後、知りうる限りの伝手を使って情報を集めた彼女は、人攫いが人身売買目的だという情報をシアリー達へ伝えた人物が、リーヴの息のかかったローグスである可能性を掴み、即座にドン・タイラー自身に忠告すべく直接コンタクトを取った。

『仲間であつた以上、私も出来得る限り穏便に済ませるつもりだったが、今回はその甘さが祟ったと言えるな。彼女から状況を説明された時は、正直、自分の不甲斐なさを呪ったよ。』

目をつぶり、自戒するかのようにつぶやくタイラー。

本来ダグオラ・シティーに配置していた腕利き連中を、部下の進言からとは言え、自身の警護につけてしまった過失を悔やんでいるのだろう。

計画通り、反乱の噂によりダグオラ・シティー内の戦力が低下したことを確認したリーヴは、好機とばかりに人攫いという悪質な犯罪に移ったのだ。

『アタシも、シアリーのところの連中とは以前から顔見知りだったから、人攫いの犯人がローグスだとしても、どこか別の街の連中だろうって思ってた。まさかあの中に、リーヴって奴につながってる内通者がいるなんて夢にも思わなかったんだ。あんた達に注意をしようとした矢先、シアリーの酒場が襲われたって聞いて、出し抜かれた悔しさに歯噛みしたよ。』

悔しそうに顔を歪ませるソアラ。

情報を扱うプロを自認する彼女にとって、自身が後手に回った事実が許せないのだろう。

俺からしてみれば、昨日の今日でここまで真相に迫ったその手腕は十二分に敬意を表するものだが、そんな台詞は彼女にとって慰めにはならないに違いない。

『腕試しに襲ってきた連中の内、一人だけ店の死体の中に見当たらなかった奴がいた。内通者は多分あいつだろう。』

先ほど見たばかりの店内の様子を思い返す。

憎むべき裏切り者であるその男は、情報屋であるソアラがこちらにいることもリーヴに伝えたに違いない。

腕利きの情報屋の活躍で、今一步の所で全容が明るみに出かけていた反逆者たちの企みは、内通者の功績により、こちらの手をすり抜ける形で実行に移されたようだった。

『……成る程、状況は良く分かりました。しかし、人攫いなんかし

て、彼らにどんな利益があるのです？　こうしてシアリーさんを人質に取るのが目的で、そこまで回りくどい真似をしたんでしょうか？』

当然の疑問をヘンリーが述べる。

タイラーへの脅迫の為、部下を一人さらうだけなら、そんな手間をかける必要はない。ここまでの組織力を持った連中なら、一人のローグスを拐かすことぐらい雑作も無いはずだ。

『……狙いは風評だろうな。ただでさえ混乱している世情だ。この状況下でモトウブの首都において私に住民を守る力がないと伝われば、各地で私を侮り、同じ様に反乱を企み出す連中が出てくる可能性はある。』

タイラーの答えによって俺達が抱いた疑問は氷解する。反乱の話をしたシアリーも、まさしくそのことを危惧していた。

『話は全て分かった。つまり、こちらは相手の思惑通り、良いように踊らされた訳だ。それで、どうするんだ？　シアリーを助け出すんだろ？』

ソアラやタイラー本人からの話で、戦うべき相手の全容とその狙いが分かった。

後は、タイラーの風評を地に落とすべく、シアリーという彼の部下を利用した連中の企みを粉碎してやるだけだ。

『……当然彼女は助け出す。こちらもやられっぱなしと言う訳ではないさ。連中の居所も、現在別の部下が追跡調査中だ。リーヴにとって誤算なのは、このタイミングで私がモトウブに帰っているこ

とだろうからな。奴らがよこした要求には解答の期限が決められていたが、そんなものが来る前にケリをつけて見せよう。』

そう言ったタイラーが不敵に笑みをこぼした。

『サテライトベルトには現在、奴の目を欺くためにランデイル号の同型鑑と私の身代わりを置いてきている。こうしている今、自分の周りに追跡の手が伸びていることに奴は気づいていないだろう。リーヴには私の家族達に手をかけた報いを受けて貰わねばならない。』

そうつぶやいたタイラーの表情は、裏社会のボスとしての冷酷な一面がありありと浮かんでいた。

どのような思惑があったにせよ、ここまで大々的に反逆の意志を示した相手に、これ以上の慈悲は不要なのだろう。

リーヴという男は、触れてはいけない領域にその足を踏み入れたのだ。

『分かった。それならもう何の遠慮もいらねえって訳だ。俺も向こうへの襲撃の際は存分に働いて見せるよ。』

抱いていた疑問が全て解け、剣を向ける相手が浮き彫りになったことで、俺の焦りは消えていた。

後はシアリーをこの手で救い出すだけだ。

『……いや、君達の仕事はここまでだ。』

しかし、目指す道筋が見えた俺に、ローグスの首領が冷たい制止の声をあげる。

『!?!』

驚きと共にタイラーを見やると、先程リーヴへの制裁を口にした時同様の、非情な瞳がこちらを見据えていた。

『君達には本当に迷惑をかけてしまった。当初、こちらから依頼した内容については、約束の報酬に上乗せをした額を支払わせてもらおう。』

冷たい声でタイラーが続ける。

『しかし、ここからは我々ローグスの問題だ。裏切り者の制裁に、外部の人間の手を借りる訳にはいかない。シアリーは私がこの手で必ず助けると約束しよう。どうか信頼して、君達は君達の生活に戻って欲しい。』

口調こそ丁寧だが、その様子には異論を挟むことを認めない、断固たる意志が込められていた。

『……どいつもこいつも……』

今朝方の荒野の戦いで、役割がどうのと能書きを垂れた不快な中年ビーストの姿が脳裏に浮かぶ。

『……………マース?』

突然俯いてつぶやきだした俺を見て、不審そうにソアラが声をかけ

てくる。

俺は彼女の呼びかけを無視し、堪えきれない怒りを爆発させた。

『あまり人様のことを舐めてんじゃねえっ!!!!!!!!!!』

『!!!』

部屋中の空気を震わせる怒声。

ソアラや、これまで口を閉じていたノ・ボルが、突然の俺の剣幕に目を見開いて身をすくませた。

『……………』

その様子を受けてなお、態度を変えないタイラーに向かって、俺は激情をぶつけ続ける。

『あんたらローグスにどういう決まりがあるうが、俺は一切関知する気はねえよ。モトウブにはモトウブのルールってのがあるんだろうさ。……だがな！俺にも同じ様に譲れねえもんがある!!』

不安の種を全て叩き潰してやると約束した。

そう言った俺に笑顔を返してきた。

『アイツと交わした約束は誰でもない、俺のもんだ！モトウブのト

ツプだろうが誰だろうが、下らねえ理屈でその邪魔をするんじゃない
え！！！』

吐き出した激情は、貫かなければならない自身が決めた意地だった。

『……………』

俺の叫びを受け、タイラーが改めてこちらを見つめてくる。

『……………』

眼光に込められた冷たい意志。

しかし俺の答えはすでに出ていた。

ローグスの面子もルールも知ったことではない。

俺はあの時、必ず守ると決めたのだ。

『……………なぜ…』

退く意志を一切見せない俺に、タイラーがつぶやく。

『なぜ君はそこまで彼女を救おうとする？プロの傭兵として、依頼を完遂したいと言うなら、依頼人は本来私のはずだ。元々、君が彼女にそこまで肩入れする理由はないだろう。』

値踏みする瞳が俺の体に突き刺さる。

『……………』

脳裏に浮かぶのは、理想をつぶやいたあの笑顔。

俺が果たせなかった約束と同じものを、止めることなく、自らの手で叶えようとしていたその姿。

『彼女は俺と同じだからさ。』

揺るぎない決意を込め、男からの問いかけに堂々と答える。

『……………』

一切のためらいも、揺らぎも見せない俺を見て、ふと、ローグスの英雄の表情が緩んだ。

『……………家族をここまで心から案じてくれる者は……………私にとっても家族だ。』

ゆっくりと差し出された右手は信頼の証だった。

初めて見せる英雄の笑顔は、これまで感じさせなかった彼の暖かさを表している。

『……任せな。俺も家族の期待は絶対に裏切らない。』

俺は信頼に全力で応えることを誓い、差し出された右手を笑って握り返していた。

第五話 〈意地〉（後書き）

ついに登場公式キャラクター。

タイラーさんは物語の展開上初めから登場予定でしたが、読み返しても性格・口調がゲーム本編の彼から離れてそうで不安すぎる。

レオジーニョさんはPSP02以降のあまりの出番の少なさに対する抗議の意味でご登場願いました（笑）

場合によっては今後活躍の場が出るやもしれません。

え？ノ・ボル？

当然イタズラ心で深い意味はありませんが何か？（笑）

ボル三兄弟、良いっすよね。ギャグ分が全くない本作ですが、彼らを思い返して構成の練り直しの必要を感じてしまいました（笑）

まあ当面は無理ですが。

（x|x;）

長文、読んで頂き、本当にありがとうございました

（^^^ゞ

幕間1　く　蠢きく　（前書き）

幕間は三人称で。

物語に広がりをもたせたかったんですが、色々無い頭をこねくり回しても、結局この手法しか思いつきませんでした

（x　|　x；）

文体、変なところは見逃してく　（汗）

幕間1 〈蠢き〉

『では、こちらに手を貸すことは出来ないと言うのだな？』

画面上に映る相手を冷ややかに見つめながら、フードをまとった男がつぶやく。

しわがれたその声は、感情らしいものを一切含まず、ただ淡々と事実を確認するかのように冷たく部屋に響き渡った。

【……あまりにも無謀だリーヴ。お前はあの方を甘く見すぎている。なぜこんな馬鹿な真似をした？】

語りかけられた画面の向こうの相手は、暗い瞳で自分を見つめる「同朋だった」男に憐れみともいえるべき視線を送っていた。

『……………』

こちらの正気を疑っている会話相手を見つめ、男は口元に冷たい笑みを浮かべる。

『……そうか。分かった。理解してもらえんというなら致し方ない。貴様はそこでそうやって飼犬として腐っていけばいい。』

興味を無くしたとでもいうように、男は相手との会話を切り上げようとした。

【待てリーヴ！今からでも遅くない、ドンに謝罪を…】

ピッ！

言い募る相手を見視し、通信を行っていたモニターの電源を切る。

静寂が訪れた部屋の中、男は座っていたソファに深く身を沈め、ゆっくりと瞳を閉じた。

『……馬鹿な真似か……くくっ……違う……』

先程、モニターの向こうから自分に向けられた痛ましいものを見るかのような瞳を思い浮かべ、男が自嘲の笑いをこぼす。

『そんなこと、始めから百も承知だ……』

そうつぶやいた男は緩慢な動作で己の手を目の前にかざし、閉じた瞳を開いた。

視界に入った手は、ひび割れ、無数の傷跡が目立つ。

男は傷だらけのその手で殺めてきた人間の数がどれ程かを思い返そうとし、すぐに下らぬ感傷に浸ろうとしている己に気づき、自身の愚かさを嘲るように小さく笑い声をあげた。

『ずいぶんご機嫌だね。その様子だと、お仲間から賛同が得られたのかな？』

突然自分に向けてかけられた声。

ソファから身を起こし声の方向に目を向けると、開け放してあつ

た自室のドアの向こうから、声の主がこちらに笑いかけていた。

愉しげに笑う整った顔が、いたずらっぽく男の方に向けられている。

声の主はヒューマンの青年だ。

年の頃は20代前半といったところか。

夜の闇のような漆黒の髪をまっすぐにのぼし、同様の色の瞳が値踏みするように男を見つめていた。

『意地が悪いな貴男は。残念ながらその逆だよ。あの様子では蜂起に協力するどころか、タイラーに追従してこちらを討伐に来かねん。ある程度予想はしていたが、見事に期待は外れたようだ。』

男は自嘲の笑みを浮かべ、ヒューマンの青年に答えを返す。

つい先程まで通信を行っていた相手は、自分と同様、サテライトベルトにファミリーを構えるローグスの幹部だった。

ドン・タイラーに反旗を翻した男、リーヴ。

彼はその反逆の意志を、さらった女の映像と共にローグスの首領に連絡した後、モトウブ各地の自分と顔見知りであったローグス連中にコンタクトを取り、己に同調し蜂起するよう迫った。

しかし、結果は先刻の通り。

接触を図った全ての面々が、自身のボスに対する敬意と怖れを表し、

リーヴは四面楚歌の状態である自分の現状を認めない訳にはいかなかった。

『これは驚いた。正直、誰かしら野心的な人間が出るはずと踏んでただけだね。ドン・タイラーの威光ってのはどうやら伊達じゃないらしい。ごめんよりーヴ。僕の目論見は甘すぎたようだ。』

台詞の内容とは裏腹に、ヒューマンの青年の様子はそんな危機的状況にあるリーヴの姿を面白がっているように見える。

『……………』

リーヴはそんな謝罪をしてきた青年を冷ややかな目で眺めていた。

タイラーが取り仕切るモトウブの首都において、庇護すべき市民に被害が出ればローグスの団結にもひびが入り、反乱はたやすい。

当初、そうリーヴに持ちかけてきたのは目の前にいる青年だ。

リーヴからすれば、いい加減な計画で自らを破滅の道に追いやった青年に対し、罵声や恨み言を投げかけても不思議はない。

しかし、当のリーヴは自身の置かれた状況や、青年のふざけているとは思えない態度など、全てがどうしても良かった。

『見え透いた三文芝居はやめるべきだなイシユクス君。貴男は私が反乱など起こしたところで、こうなることくらい始めから分かっていたはずだ。』

しわがれたリーヴの声に、不愉快そうな気分の色が混ざる。

『だが、そんなことは最早どうでも良いことだ。私とて、こんな茶番がうまく行く訳ないことぐらい、承知の上だよ。』

リーヴはそう言ってイシユクスと呼んだヒューマンから視線を外し、座っていたソファアに改めて深く身を沈めた。

そのまま瞳を閉じ、脳裏に一人の男の姿を思い浮かべる。

ドン・タイラー。

ローグスの英雄にして、自身のボスであった男。

自らも一度は忠誠を誓ったその男について、実のところリーヴは誰よりも深く畏敬の念を抱いていた。

自分や目の前のヒューマンの男ごときの企みで、彼の作り上げた組織が簡単に崩壊する筈がないことは、他でもなくリーヴ自身が分かっていた。

『あはは、リーヴ、僕も大概だけど、君もそうとう「壊れ」てるね。他人からすれば君の行動は全く理解できないと思うよ。久しぶりに友達になれそうな人を見つけたなあ。』

心底愉快そうな声でイシユクスと呼ばれた青年が笑う。

リーヴはその笑い声に、始めて怒りの感情を覚えイシユクスを睨んだ。

『貴男と一緒にしないでもらおうか。君達の協力には感謝している

が、私の目的はそちらとは違う。同類のように見られては心外だ。』

自らが道化であることは誰に言われるまでもなく自覚している。

ただし、その底にある信念は誰だろうと侮辱するのを許す訳にはいかなかった。

楽しそうに笑い続けている、眼前の狂人となど一緒にされてはたまらない。

リーヴの視線に本物の怒りが込められていることを感じとり、イシユクスは不適に微笑みを返した後、身を翻しながらつぶやいた。

『それは失礼。確かに僕と君とは違うな。君はもう満足かもしれないが、僕にはまだしなきゃいけないことが沢山残っている。すまないけど、ここら辺で抜けさせてもらおうよ。』

言い捨てた後、もはや用はないとばかりにイシユクスが歩き去ろうとする。

その背中に向け、リーヴが話しかけた。

『こちらも当初の約束は守ろう。ここからは私の戦いだ。貴男の協力などアテにはしていないよ。』

イシユクスは伝わってくる男の言葉に、偽りのない己を誇る様子を感じ、嘲るような笑みを浮かべて答える。

『ご立派だねローグス。ではその覚悟に敬意を評して、ビッキーは置いていくでしょう。好きに使ってやってくれて構わないよ。』

背中を向けてそう話すイシユクスに、意外そうな声でリーヴが問いかける。

『??、良いのか?こちらとしては有り難い申し出だが、彼女は君達にとっても大事な「完成品」だろう?私に付き合わせれば、間違いなく無事ではすまないぞ?』

腑に落ちないといった様子のリーヴに、笑みを浮かべたままのイシユクスが答えた。

『リモートで戦闘データさえ回収出来れば、僕の方は何の問題もないさ。この前の傭兵ぐらいの相手にぶつけてくれたら、むしろ今後の為に役立つ。あのコも引き際は心得てるだろうし、僕に気兼ねはいらない。なに、誇り高いローグス様へのちょっとしたサービスだよ。』

気にするなどでもないように、イシユクスが右手をあげてヒラヒラと振る。

その様子には依然として、ゲームを楽しんでいる子どものような機嫌の良さが感じられた。

『あ、そうそう、君達が捕まえてきたあの美人さん、結局どうするつもりだい?必要ないならこっちに出来ないかな?試したいテストがいくつかあるから、実験用のマウスの代わりが欲しいんだよ。』

思い出したように声をあげたイシユクスが、リーヴの方を振り返る。その表情には変わらず愉快そうな微笑みが張り付いていた。

『……』

リーヴは何かを考えこむように数秒目を閉じると、はっきりした声で答えた。

『すまないが許可できんな。あれも一応ログスだ。死を迎えるにしても、こちらの意を示す人柱としての意義を与える必要がある。悪いがネズミの代わりにする為にしてくれてやる訳にはいかん。』

そう言っで見開いたリーヴの目には、反論を許さない強い意志がこもっていた。

意外な強い口調に少しだけ驚いた様子を見せたイシュクスだったが、すぐに口元を歪ませて言葉を紡ぐ。

『やれやれ、友達になれそうだと思ったのはやっぱり勘違いか。分かったよ。僕には理解できないけど、十分に役立ってくれた君のプライドを尊重して、ワガママは引っ込めるとするさ。』

そう言ったイシュクスは、今度こそ足音を立ててリーヴの前から姿を消した。

『……』

一人になり、改めて静寂が包んだ部屋の中、リーヴは去っていった男がいたドアの向こうを無表情に見つめてつぶやく。

『イルミナスの亡霊……か……』

そう言ったりーヴの瞳には、狂った獣を見つめるような深い軽蔑の色がありありと宿っていた。

幕間 1 〈蠢き〉（後書き）

今後もたまたま幕間は入れると思います。

自然な三人称目指して頑張りマウス。

幕間2 　　＼激情＼（前書き）

幕間を続けるという困ったストーリー進行（笑）

モトウブ編クライマックス前ということで、どうか寛大なお心で生
暖かく見守ってやって下さい

（x|x;x;）

幕間2 〈激情〉

気がついた時、目の前にあったのは暗闇だった。

縛られた手足、声をあげることも出来ないように口元を戒める拘束具。

痛む頭を必死に落ち着かせ、シアリーは自分の現状を把握しようと思いを巡らせていた。

（ここは…どこ？）

最後の記憶は二人の傭兵と別れ、自身が任せられた酒場に戻った後。夜通しの巡回で疲労した体を休めるべく、店内の部下達に帰還を知らせ、寝室に向かおうとした瞬間までだった。

荒々しい物音が店の入り口から鳴り響き、何事かと振り向いた瞬間、背後から口元に布状の何かをあてられ、彼女の意識はそこで途絶えていた。

（敵襲を受けた？ワタシは……）

慣れ始めた視界に映るのは、明かりも無く狭い無機質な部屋。飾り気のないその部屋で、彼女はベッドに横たわっていた。

ゴウン、ゴウンと耳に伝わってくるフォトンリアクターを利用したエンジン音は、この部屋が飛行中の船の一室であることを予測させ

る。

(一体……何が起きたの?……)

冷静さを取り戻しても、目の風景には見覚えがない。

しかし、四肢の自由を奪われている現状が、自身が何者かに襲われ、拉致されたのだという現実を物語っていた。

『……気がついた?…』

少しでも情報を得ようと、上半身を起こし周囲を見渡そうとしたその時、シアリーの耳に聞き覚えのない女のささやきが届く。

(……???)

声の方向に視線を向けると、誰もいないと思っていた室内で、無表情なままこちらを見つめ佇んでいるキャストの女性の姿があった。

(……誰?)

暗闇の中でも認識できる鮮やかな赤い外装。今の今まで気配を感じさせなかったその女キャストは、人形を連想させる感情のこもらない声で自分に話しかけてきた。

『……無理に動かないで…暴れたら、足を撃てと命令されてる……』

冷たい声でそう呟くと、女キャストは警告が脅しではないと言うかのように、右手に短銃を握りシアリーに銃口を向けた。

自身に向けられた冷たい銃口を見て、女キャストが自分を拉致した連中の一員であることを認識し、シアリーが敵意を込めて相手を睨む。

しかし、シアリーの眼光を受けても一切動じた様子を見せず、女キャストは言葉を続けた。

『……大人しくしていてくれれば、危害は加えない……』

必要なのは伝え終えたとばかりに、女キャストは銃口を下ろし、静かに部屋の椅子に腰を下ろす。

座った後も、静かな瞳でこちらを見つめてくる女キャスト。

シアリーは、現状の把握の為に彼女に話しかけようとし、口元を覆う拘束具のせいで声すら出せない自分に気がついた。

『ビッキー、様子はどうか？……おや、もう気がついたかね？』

喋る自由すら奪われている己の現状にシアリーが恥辱を覚えたその時、部屋のドアが開き、一人の男が入室して来た。

『……！！！！！！』

入って来た男の姿を見て、シアリーが声にならない叫びをあげる。

フードを被り、手足を縛られたままの自分を見て口元を愉快げに歪ませる中年のビースト。

リーヴという名のその男は、自分達タイラーに忠誠を誓うローグス

にとって、現在最も許すべからざる存在だった。

『……………』

刺すような眼差しで自分を睨むシアリーを見ながら、リーヴは笑みを浮かべたままビッキーと呼んだ女キャストに手で合図を送る。

『……………』

合図を受けた女キャストは、リーヴに向けて頷きを一つ返し、ゆっくりとシアリーに近づいた後、彼女の口を封じていた猿ぐつわを外した。

『……………この…………裏切り者!!!!!!!!!!』

戒めが解かれた瞬間、シアリーは部屋を揺るがす叫びで、目の前の男に憎しみを込めた眼光と共に激情をのせた罵声を叩きつけた。

叫びを受けたリーヴは、未だ嘲るような笑いを浮かべ、彼女を見つめている。

『何が目的でこんな真似をした！アナタ、自分が何をしているのか分かっているの!?!』

姿を現した組織の裏切り者を前に、シアリーは自分を襲った連中が男の一味であったことを認識し、己を捕らえた反逆者の目的を推し量った。

逆上したシアリーの様子を見て、女キャストが再び手に持つ銃を彼女に向ける。

『よせビッキー。構わない、少し彼女と話がある。すまないが、君は席を外してくれるか?』

銃口を向けた女キャストにそう命じると、リーヴはシアリーを見据えたまま、部屋に備えられた椅子に腰を下ろした。

ビッキーと呼ばれた女キャストは、何の感情の揺らぎも見せないまま、リーヴを見つめ返すと無言で部屋を出て行った。

『……さて、興奮しているところ申し訳ないが、こちらもあり時間がない。全てを説明はしてやれんが、かつての同朋への礼儀として、君の現状くらいは説明してやろう。』

女キャストが退出したのを見届けた後、己を呪い殺さんとはかりに睨む相手を見つめ、リーヴが話し始める。

『単刀直入に言おう。君はいわゆる人質だ。ご存知の通り、私はタイラーに反逆の意を示している。彼には、君の身と引き換えに、ダグオラ・シテイ及びサテライトベルト一帯から手を引き、こちらに支配権を明け渡すよう伝えてある。』

何でもないことのように平然と話すリーヴを見て、シアリーが目を見開いて叫びをあげる。

『!……アナタ、気でも触れたの? そんな提案、彼がすんなり飲むんでも思うわけ?』

あまりにも馬鹿げた内容に、シアリーは目の前の男の正気を疑った。

モトゥブの首都であるダグオラ・シテイ、さらにはローグスの収入源とも言えるサテライトベルト。

現状、この星を統べるタイラー達に、自分のような一構成員の身柄を代価としてその全てを明け渡すよう求めるなど、およそ正気の沙汰ではない。

シアリーは陰鬱な顔を楽しげに歪ませる目の前の男が、狂気に蝕まれている可能性を感じ、そんな男に捕らわれてしまった自らの身を強く恥じていた。

しかし、狂人扱いされた当のリーヴは、シアリーの怒りもどこ吹く風といった様子で、淡々と話し続ける。

『さて、私が狂っているかはともかく、彼には既に宣告済みだ。日が変わるまでにこちらが満足できる解答が無ければ、すまないが君には死んで貰わねばなくなる。何分、この要求を出す前準備に、こちらでも人攫いなどという大変な労力を費やしているからね。』

そう言ったリーヴが冷ややかにシアリーを見つめる。

シアリーは、その発言を聞き、信じられないものを見るような目で、眼前の男を見つめた。

『人身売買も、アナタ達の仕業なの！？』

目の前が怒りで赤く染まる。もはやシアリーにとって、フードを身につけたその反逆者は、揺るぎない殺意の対象でしかなかった。

『気づくのが遅すぎるな。君が雇った傭兵のお仲間は、とっくにそ

んな絡繰りを見破っているらしいぞ。情報を流した私の配下の存在が嗅ぎ当てられたようだ。こちら君の部下からの密告がなければ、危うくことを成す前に破滅していたところだよ。』

やれやれと言った様子でリーヴが皮肉るような笑いをこぼす。

自分の部下に裏切り者がいたという事実を突きつけられ、シアリーは怒りのあまり気が狂いそうになった。

『……殺せ！！お前のような下衆とこれ以上話すことなどない！下らない提案を出した所で時間の無駄よ！さっさとワタシを殺して、ドンに愚かなその身を裁かれるがいい！！』

船内を震わすかのような逆上した叫び。

シアリーが怒りを吐き出すことを予想していたかのように、リーヴは即座に拘束用の猿轡を取り出すと、暴れる彼女を抑えつけ、その口を塞いだ。

.....

縛られた手足が千切れんばかりに暴れるシアリーを見やりながら、リーヴがつぶやく。

『プライドの高さは一人前だな。すまないが、その様子では拘束したままで正解のようだ。自分で命を絶たれては叶わんからな。』

自分を睨んだまま暴れ続けるシアリーに冷たい笑みを見せ、リーヴが部屋のドアに向けて歩き出した。

『心配せずともタイラーが拒否してくれば、君にはあの店で死んでいた君の部下同様、あの世に行ってもらうことになる。』

そう語ったリーヴは、ふと歩みを止めて独り言のように続きをつぶやいた。

『……その時こそ、我らローグスの新たな歴史の幕開けなのだ。……君はその為の大切な人柱なのだよ。』

最後にシアリーを振り返り、強い意志がこもった瞳を投げかけ、リーヴは部屋を後にした。

『……！』

男が出て行った後、静けさを取り戻した部屋の中、シアリーは屈辱と怒りで自分でも知らぬ内に瞳から涙をこぼしていた。

（ごめんなさい、タイラー……）

自身を救ってくれた、敬意の対象である人物を思い浮かべ、その足を引っ張ってしまっている己の不甲斐なさにシアリーの胸が絶望に染まる。

彼からの信頼の証だと誇っていたダグオラ・シティの部下からは裏切り者を出し、他は皆無残に殺されたという事実を伝えられ、彼女は生きる氣力を失いかけていた。

（…結局ワタシは……）

タイラーに出会う前の、なぜ生きているかも分からなかった暗い感

情が胸中に蘇ってくる。

そんな時、脳裏にふと一人の男の声が蘇った。

《……アンタには、これだけ超有能な傭兵二人が味方についている》

照れくさそうにこちらを見つめながら、何かを決意したように力強く微笑んでくれた赤い瞳の傭兵。

《だから君はこれ以上何も心配するな》

その微笑みが、いつかのタイラーと同じように、自分に与えてくれたかすかな温もり。

(……………助けて……………)

絶望に満ちる暗闇の中、シアリーはさすがのようにその心の中でつぶやいていた。

幕間2　（激情）（後書き）

いよいよ第一章として設定したモトウブ編も終幕に向けてラストスパート。

空気になつてゐる登場人物とかいないか不安で仕方ない（笑）

あまり間を置かず、次話を投稿できるように頑張ってみます。

ストーリーの流れ、急すぎるかなあ（汗）

第六話　く信念く（前書き）

ああ、書きたいけれど中々時間が取れない（汗）

他の人が書いてる作品もゆっくり見たいし。

今一番欲しいのは自由な時間という筆者。

何はともあれ、第六話です。

宜しくどうぞー。

第六話　（信念）

今でも耳に焼き付いている調子っ外れなメロディー。

お世辞にも上手いと思ったことの無いその歌声。

人によっては不快にしか感じないであろう奇天烈な音の連なりは、あの頃の俺にとって不思議と心地よいものだった。

「戦闘の前ってのはどうしたって血が高ぶる。こいつは俺なりの体をリラックスさせる術って奴だ。」

歌う理由を尋ねた俺に、照れ隠しにそう言って、普段無愛想な顔を苦笑させていたあの人。

似合わねーと茶化したら、声をさらにデカくして歌い出していた大人げないその姿。

守りたい者を取り返す戦いの前に、逸る気持ちを落ち着かせる為、思い出に浸った自分に自然と苦笑してしまう。

参ったね。ちっとは成長したつもりだったんだが。

脳裏に浮かぶ女の笑顔が、早く彼女を助け出せとこの体をせき立てる。

……悔しいが。

まだまだ下手な歌声を響かせていたアンタの背中はずいぶん遠い……

『では確認だ。奴の船の内部構造は先程渡した資料通り。ファミリの配下の構成を考えれば、乗船しているのは多くても二・三十人だろう。向こうが体制を整える前に一気に片を付ける。』

静かでありながら、よく通る声でタイラーが作戦を説明する。

リーヴの足取りを追跡していたローグスの部下から連絡が入ったのはおよそ一時間程前。

俺達を襲撃してきたメンバーの中に、リーヴらしき人物がいたことから搜索範囲がダグオラ・シテイ周辺に絞られ、その結果ガレニガレ溪谷方面に低速で移動中の不審船が発見された。

偵察に向かっていた配下から送られた映像により、不審船がリーヴ所有のスペースシップであることが判明し、俺達は即座に急襲を決定したタイラーに呼ばれ、現在に至る。

『向こうの戦力はこの程度なんだ？ シアリーの店の様子からすると、かなり腕がたつ連中らしいが。』

淡々と作戦内容を告げてくるタイラーに向かって、刃を交えるべき相手側の実力を訊ねてみる。

ろくな抵抗も出来ずに命を絶たれていたシアリーの部下達の姿を思

い返し、連中が油断ならない相手であることが予測された為だ。

俺からの問いかけに頷きを一つ返し、タイラーが答える。

『リーヴのファミリーは、少数ながら武闘派で鳴らした連中だ。確かに荒事にかけては侮ることは出来ん。しかし、今回はこちらも精銳が揃っている。例え奴が全ての配下を同行させていたとしても、正面からやり合えばまず負けることはない。』

冷静な声音は正確に比彼の戦力を分析し、答えを導き出した証だろう。

こちらには元々リーヴの説得時、武力抵抗があった時に備えて首領の警護についた腕利き連中がそのまま随行している。戦力としてはこちらに分があるのは間違いないようだ。

しかし、そこまで言ったタイラーの表情が僅かに曇った。

『問題はシアリーの身柄だけだな……』

タイラーのつぶやきに同意を示すべく俺も頷きを返す。

戦力的には確実に優位にありながらこちらが抱える唯一の難題。

人質とされているシアリーの存在だった。

この作戦の目的は、第一に反逆者に対する制圧・制裁ではあるが、タイラー自身、忠実な配下であるシアリーを見殺しにする気は毛頭無いようだ。

戦闘に関しては懸念はないが、向こうの手の中にある彼女の身柄をどう無事に奪還するか。この一点だけ確実な方策を決めあぐねていた。

『向こうもあれだけの啖呵切ったんだから、今さら降伏勧告なんかに応じる訳ないよね。』

うんざりした様子でソアラがぼやく。

彼女の言う通り、ここまで派手に反逆した裏切り者だ。例え全面降伏されたとしても、タイラーも組織を束ねる者として、示しをつける為にもリーヴを許す訳にはいかないだろう。

当然向こうもそれは承知している筈だ。

追い詰められたと知れば、死に物狂いで反撃してくるのは目に見えている。そうなった時、シアリーの身の安全など、誰にも保証することは出来ない。

だが、その状況を打破する為に俺達がいるのだ。

『ヘンリー、シアリーの居場所を確認できるよな？』

俺は隣で静かに説明に耳を傾けているキャストの相棒に声をかけた。

『……はい。依頼者でもありましたから、彼女の生体データは登録済みです。向こうの船の構造が頂いたデータの通りなら、ジャミングの機能も無いようですし、船内に入れば確実にどの部屋に捕らわれているか認識可能だと思います。』

敵船のデータを確認していたヘンリーが期待通りの答えを返してくる。

『よし、なら問題ない。彼女の奪還は俺達に任せてくれ。アンタ達はなるべく敵の目を引きつけて、こっちが動きやすいように向こうを攪乱して欲しい。』

こちらにとって幸運だったのは、リーヴの船がローグスの支配地域であるクバラ・シティで製造されていたことだ。

おかげで戦場となる敵地の詳細な情報が、事前に把握できた。

居場所さえ把握できれば、迅速に彼女の場所まで駆けつけ、その身を奪い返すことが可能となる。

『……………良いだろう。正直確実とは言えないが、残念ながらゆったり構えている時間もない。現時点では急襲とそれにより生じる混乱を利用することが、彼女の命を守る方法として一番可能性が高い。』

思案を続けていたタイラーが頷いて、こちらに話しかけてくる。

『ランディール号の砲撃で複数ある敵船のフォトンリアクターをいくつか破壊し、停船を余儀なくさせる。その後、我々は正面から襲撃を仕掛けるので、君達はフローダーバイクを使って裏手から向こうに乗り込んでくれ。敵戦力はなるべくこちらに引きつけるつもりだが、船内に残る連中もいるだろう。危険なことには変わりはない。気をつけてくれ。』

最終的な作戦内容を決断したタイラーは、そう言って真剣な眼差しをこちらに向けてきた。

俺は部下の身を案じるローグスの首領の忠告に、微笑みを返した。

『家族って言うてくれたろ？安心してくれ。何があろうと、お姫様は無事に取り返してみせるさ。』

そう、これは依頼者を奪還する傭兵としての仕事ではない。

俺達を信じて、今も助けを待っているであろう大切な仲間を、家族のもとに救い出す為の、俺の信念をかけた戦いだった。

『ローグスの精鋭の皆さんの実力を疑う訳ではありませんが、敵も手練れのです。特に私達が交戦した、女性型のキャストには気をつけて下さい。かなりの戦闘力を有していました。』

ヘンリーが神妙な面持ちでつぶやく。

『……あいつか。』

脳裏に、マイシップ前で戦った冷たい瞳の赤いキャストの姿が浮かんだ。

高ランクの装備を身にまとい、短時間の攻防とはいえ、俺とヘンリーという戦いで生業をたてる二人の傭兵と互角に渡り合った女キャスト。

その実力は、実際に刃を交わしたこの身が、全力で挑む必要があることをいやが上にも知らせてくる。

『……君達から報告を受けたキャストのことか。……ふむ。』

ヘンリーから忠告を受けたタイラーが何かを思案するように腕を組み、その瞳を閉じた。

『??:...何か気になることがあるのか?』

迅速に作戦を計画したローグスの首領が考え込むのを見て、不安な点でもあるのかと確認の問いかけを試みた。

『...いや、私が把握しているリーヴの配下は、ビーストのみで構成されていた。キャストの、それもそこまで腕利きの戦士ならば、私の耳に入らない筈がない。...反乱を実行するにあたって、奴が新たに戦力を増強したとなると、その出所が気になってな。』

思案顔でタイラーがつぶやく。

『ローグスの中にそんな腕が立つキャストがいるなんて話、アタシも聞いたことがないんだよね。多分、外部からマース達みたいな傭兵でも雇ったのかもしれない。でも、そこまで高い戦闘力を持った傭兵が同時に複数雇われたんなら情報屋のアタシの耳に入るはずだし、短期間で大規模な戦力増強したとは考えなくていいんじゃないかな?』

相手側の戦力に対し、未知の部分が出たことへの懸念を示すタイラーに、情報屋らしい的確な言葉でソアラが語りかける。

確かにあの女キャスト並みの腕を持つ敵が他に複数いるとなれば、戦力的に優位に立っているというこちらの前提が覆る可能性がある。

だが、腕利きの情報屋であるソアラのその発言で、懸念を振り切る

かのようにタイラーが作戦の実行を宣言した。

『よし、いずれにせよこれ以上リーヴを野放しには出来ん。相手の戦力がどうであろうと、こちらも用意できる最大限の精鋭であたるのみだ。』

戦闘の為の会議の終わりを告げたタイラーが、同席していた配下へ指示を出した後、強い意志を込めた眼差しでこちらを見つめてくる。

『力を貸してもらおう。頼むぞ。』

ローグスを束ねる者として反逆者への制裁を決意した冷たい表情に、僅かに見え隠れする捕らわれの家族を案じる暖かさ。

俺は改めてその信義に応えるべく、力強く頷いた。

『……目標確認。肉眼で見てもやはり中々のスペースシップですね。ランディール号にも驚きましたが、ローグスが所有する船はどれもあのような高規格のモノなのでしょうかね？』

遙か前方を低空飛行中の敵船を見て、ヘンリーが感嘆の声をあげた。

『タイラーもそうだが、サテライトベルトを根城にしているローグスは海賊稼業も重要な収入源らしいからな。シンボルとなる船への金のかけ方は、俺達なんかとは比べるレベルのもんじゃないんだろ。』

砂漠地帯を高速で移動する為、タイラーから借り受けたゴーグルを装着しつつ、相棒の疑問に答える。

作戦会議から30分後。敵船に追いついたという報告を受けた俺達は、事前の打ち合わせ通り、用意されたフロードーバイクに搭乗し、ランデイル号の小型フライヤー発進用デッキにて、作戦の開始を待っていた。

本来は小型機が発着する為の簡易デッキからの視界には、一面の砂漠と共に、その上を悠然と飛行するリーヴのスペースシップが映っている。

ランデイル号を一回り小さくしたような灰色のその機体の中に、俺達を守ると決めたあの誇り高い女ローグスが捕らわれているはずだ。

【こちらソアラ、マース達聞こえてる？】

自分に課した使命を再度心に刻みつけていると、耳元に付けた小型通信機からビーストの少女の澄んだ声が聞こえて来た。

『ああ、聞こえてる。通信状況は良好だ。』

【オーケー。これから敵船の移動を止める為、艦砲射撃を行うよ。打ち合わせ通り、アンタらは迎撃の敵は気にしないで、裏から一気に向こうに乗り込んで。敵の目はタイラー達が引き受けるから、出るタイミングだけは間違えないようにね。】

戦況の報告をタイラー達本隊と俺達別働隊に中継する為、船に残った彼女が開戦の合図を伝えてくる。

『任せろって。こういう大事な場面で俺達がしくじったことないのはお前も良く知ってる筈だろ。』

緊張の色が見える情報屋の声に、落ち着かせるべくいつもの軽口で答えてやる。

《戦場でリラックスするってのは難しいもんさ》

下手な歌を歌っていた、いつかのあの人の言葉が脳裏をよぎり、思わず苦笑がこぼれた。

【ははっホントだね。………シアリーはアタシにとっても付き合いたい友達なんだ。……皆、絶対一緒に無事に帰ってきてね。】

祈るような少女の声を聞き、俺とヘンリーの顔が引き締まる。

【………作戦開始!!…いくよ!!…!!】

ソアラがそう叫んだ直後、ランディール号に搭載された数本の大型フォトンレーザー砲から、眩い光の束が轟音と共に放たれた。

ゴオウウンン!!!!!!

大地を揺るがす爆音。

一面の砂漠が一瞬白く染まった後、前方のスペースシップがこちらの狙い通り、機関部から煙をあげゆっくりと地表に降りていくのが

見える。

『……今後、何があってもローグス相手に船でケンカ売るのだけは止めような。』

宣言通り、機体そのものを誘爆させることなく、的確に敵船の機動力を奪ったランディール号の射撃を間近で見て、俺は相棒に話しかける。

『お願いですから、冗談でもそう言うこと言わないで下さいよ。』

顔をひきつらせる相棒。

『さあ、行きますよ！多少荒っぽくなりますから、舌を咬まないで下さいね！！』

運転席で気合いの声を上げたヘンリーが、フロードバイクのアクセルを回す。

『まずはあちらさんに乗り込むのが先決だ！頼りにしてるぞ相棒！』

俺は後部座席にベルトで体を固定した後、ナノトランサーからツインハンドガン・オブシディアンを取り出し、左右の手に構えた。

『ハアツツ！！！！』

低空飛行中のランディール号から、フロードバイクで空中に飛び出す。

ホバー機能の為、フロードーに取り付けられたフォトンリアクターが、ヘンリーの操作によって極限までその動きを高め、鼓膜を揺るがす張り裂ける様な駆動音を響かせる。

ゴウン！！！！

数秒の自由落下の後、俺達が乗ったフロードーバイクは砂塵を派手に巻き上げ、大きな衝撃と共に砂漠に無事その機体を着陸させた。

【タイラー達が出るよ！！】

着陸から数秒後、ソアラの声に視線を船へ向けると、飛行を続け敵船に接近した遥か前方のランディール号から、俺達同様フロードーバイクが数台発進したのが見て取れる。

『よし、行くぞヘンリー！』

ランディール号とは別の進路を取るため、大きく迂回しながら、フロードーバイクを全速で走らせる。

体に感じる強烈な風が、行く手を阻む壁のように感じられた。

【敵船から迎撃部隊出現！！……気をつけて！マシナリーがいる！】

戦況の変化を知らせるソアラの声に、視線を再び二隻の船の方向へ向けると、こちらにも近づきつつある戦場で、複数の機械の体が飛行、滑走しているのが見て取れた。

敵船から出撃したと思わしきマシナリーの群れは、襲撃してきたタイラー達のフローダーバイクの群れに向かってだけでなく、自分達の船を守るように輪状に展開されていく。

『サーチ完了。フラビットB1、及びバイシャ甲21型。各12機を確認。……この進路で行くと、船にたどり着く前に数機と射程内まで接近しますね。』

ズーム機能を搭載し、視力の点では俺の遙か上に行くヘンリーが敵戦力を告げてくる。

『はっ、あのフード野郎、やっぱり自分の手勢以外にも戦える兵隊持ってたやがったか。構うなヘンリー！このまま突っ切れ！！』

今から進路を変更したところで、船の周囲を囲まれてはいずれ接敵するのは目に見えている。

時間とも戦わなければならない作戦の関係上、俺は手に持つオブシディアンにフォトンを溜め込みながら、相棒に直進を宣言した。

『了解しました！敵の掃討は頼みましたよ！』

俺の意図を汲み取ったヘンリーが、さらにアクセルを回し、一直線に敵船へとバイクを加速させていく。

『邪魔するんじゃないやねえっ！！！！』

高速で接近してくるフローダーバイクに気づいたのか、展開されたマシナリーの内、フラビットB1二体がその羽虫のようなフォルムをこちらへ向け、胴体部分から伸びた銃身から弾丸を放ち迎撃してきた。

俺は事前に予測した弾道に向け、オブシディアンから溜め込んだフ
ォトン弾を左右同時に射出する。

ドゥン！ドゥン！！！！

両手から撃った高密度のフォトン弾は、狙いを変わらず、マシンリー
 が放った弾丸を飲み込み、そのまま敵の体を貫通する。

俺達が乗ったフローダーバイクが二体の間を駆け抜けた後、後方から撃ち抜かれた機体が爆発する音が鳴り響いた。

『次、来ます!!』

二体を撃破したのも束の間、進路上に今度は多脚式の戦車のようなマシンナリー、バイシャ甲21型が姿を現す。

『お呼びじゃねえんだよっ!!』

俺は即座に手持ちの武器をツインハンドガンから、法撃用のロッド・リユウホウジドウに喚装し、敵の機体目掛けて振り下ろす。

「サ・ゾンデ!!!」

俺の叫びと共に、錫杖型のロッドの先端から、取り込まれたフォト

ンが雷の嵐に姿を変え、行く手を阻む中型のマシナリーを飲み込んだ。

マシナリーを飲み込んだ雷は、重力を無視するかのように電撃を浴びせながら敵の体を上へと弾く。

『とどめだ!!』

そのままツインハンドガンに再度喚装を終えた俺は、左右の手に持つ銃のトリガーを連続して引き絞り、舞い上がった敵を蜂の巣にする。

フォトン弾に射抜かれたマシナリーは、地面に叩きつけられる前に空中で派手な音を立てて爆散した。

『敵船に接近します!!』

障害を排除し、高速移動を続ける俺達の眼前に、ついに目標地点である敵の船体が現れた。

『ヘンリー、装甲が薄い侵入可能なポイントを言え!!』

灰色の船体を前に、俺はオブシディアンのフォトンリアクターを全開までチャージする。

『右上方3メートル!あのパイプの下当たりを狙って下さい!動力源に影響なく、船の通路に繋がる筈です!!』

間髪入れずに答える相棒の言葉通り、俺は極限までチャージを完了した銃身から空気を震わす弾丸を放出した。

ガアアアンッ！！！！！！！

轟音と共に立ち上がる爆煙。

俺の全力のフォトンを入めた銃弾により、数秒後、灰色の船体には内部に繋がる不格好な空間が刻まれていた。

『……ここからが本番ですね。』

煙りが晴れて行くのを見つめながら、運転席の相棒が呟いた。

敵の本拠へと続く道をこじ開けた後、俺は借り受けたゴーグルを外し、フローダーバイクから身を降ろす。

船の反対側からは、タイラー達が行っているであろう、激しい戦闘音が聞こえてくる。

『……待ってろよシアリー』

自身の油断から敵に奪われた仲間を思い、俺は銃を持つ手に強く力を込めた。

第六話　〈信念〉（後書き）

バイクに乗った状態での高速戦闘シーンを書いてみたい！

ほんの思いつきから用意した戦闘場面でしたが、小説初心者が手を出すものではないかと痛感（笑）

文章で表現するのって何でこんな難しいんだろう。

…また修行してきます

（x | x ;）

モトウブ編もいよいよ大詰め。

筆者も意地でも完結させたいと思いますので、何卒もう少しお付き合ひ下さい。

読んで頂ける全ての方に感謝を込めつつ。

ではまた

、（^^）

第七話　く勝負く（前書き）

ちょっと間が空いてしまいました。

申し訳ない

m　┌　┐
m

アクセス数が予想より増えてきて本当にめっちゃ嬉しい限りです。

第七話、何卒お付き合い下さいませ。

第七話　（勝負）

「想いつてのは馬鹿にできねえもんだ。人間、自分の力以上のものを発揮する時は、大概何か大切なものへの想いが絡んでいる。」

頭によぎるのはあの人が叩き込んでくれた教え。

「だから、自分にとって大事なモノ、守りたいモノって奴を自覚しろ。振るう剣の先に誇れるモノを持つんだ。」

そう言っていたあの人は、言葉通りの生き方を貫いて俺に道を示した。

だから、遺された俺に出来ることはただ一つ。

あの背中を追って、自身を誇れるように見つけた「守りたいモノ」を守りきることに。

いつかのあの笑顔に少しでも近づけるよう、俺はこの手の剣を降り続ける。

『はあっ！！！』

道を塞ぐリーヴの手下が振るう斧を左手の鞘でいなし、右手の刀身で相手の胴を袈裟懸けに切り捨てる。

フォトンをもとった愛刀は、敵のシールドラインをものともせず、斬られた相手は顔を歪ませて倒れていった。

『マース、次の通路を左に！二つ目の部屋に反応があります！！』

俺と同じように、船内の道を遮るように現れた敵の一人を、愛用のナックル、ブレイン・スパイラルで殴り倒し、ヘンリーが叫ぶ。

『了解だ！急ぐぞヘンリー！』

お互いが相手取っていたそれぞれの敵を打破し、俺達はシアリーが捕らわれているであろう一室を目指す。

乗り込んだ敵船内には予想以上の敵が残っていた。タイラー達の襲撃にも対応していることを考えると、リーヴはこの船内に自分が持ちうる全ての配下を結集させているようだ。

刃を交わす敵の強さも、いつかの腕試しの時のシアリーの部下達とは比べものにならない。

俺とヘンリーは、お互いをかばい合いながら、障害となる敵勢を撃破しつつ、目的の部屋へ急いでいた。

『敵反応にかなりの数のマシナリーが見受けられます。タイラーさん達も外で激しく戦闘を行っているようです。なるべく早くシアリーさんを救出して私達も援護に向かいましょう。』

船内の通路を走りながら、相棒が話しかけてくる。

精鋭揃いのタイラー達も、数においてはマシナリーを利用した敵陣に劣る。

俺は相棒に頷きを返し、駆ける足に力を込めた。

『……そこまで…』

『……!!』

船内の通路を曲がった瞬間、襲ってきた冷たい殺気。

俺は即座に両手に持つ剣影を前に突き出し、シールドラインに全力でフォトンを流し込む。

ドガアアアンツ!!!!

数時間前に感じたのと同じ衝撃。

間一髪、防御が間に合い、飛来してきたフォトンの銃弾は両手で突き出した剣影によって霧散した。

『出やがったな……』

銃弾が飛んできた前方を見れば、ライフル、インフィニットコラんだムを構えた赤い外装のキャストが無表情なままこちらを見据え、佇んでいた。

立っているのはヘンリーがシアリーの反応を感じた部屋の前。どう

やらこいつが人質の門番ということらしい。

『そこをどけ。邪魔するってんならたたっ斬る。』

俺は冷たい瞳をした女キャストに最後通告を叩きつける。

ソアラが推測したように、もし女キャストが俺達同様の傭兵であるなら金で雇われた存在のはず。

既にタイラー達が襲撃してきているこの状況は、リーヴ達にとって予想外の事態だろう。

こちらから逃亡を促せば、雇われた者であれば敗色濃厚な戦闘に命をかけるより、契約を破棄して逃げ出すことも考えられる。

しかし、こちらの提案がまるで聞こえなかったかのように、女キャストは手に持つライフルに再度フォトンを込め始めた。

『マース！』

緊迫したヘンリーの声が飛ぶ。

何事かと見れば、後方から敵方のマシナリー、シノワビートが二体、こちらに向けて駆けてきていた。

『時間がない！ヘンリー後ろは頼む！あのキャストは俺がやる！』

二体相手とは言え、ヘンリーならば十分対応してくれるはず。

即座に戦闘方針を決め、俺は目前の女キャストとの距離を詰めるべ

く全力で駆け出した。

『わかりました！どうか気をつけて！』

戦闘が長引けば、その分新手がこの場に駆けつけてくる恐れがある。ヘンリーも両手にナックルを構え、二体のシノワビートを迎撃すべく走り出した。

『おおおおっ！！』

赤いキャストを見据えながら雄叫びを上げる。

今朝方の戦闘時も、この女キャストは射撃を主体に戦っていた。

恐らくは熟練のレンジャーだろう。

距離を空けたままの銃撃戦ではこちらの分が悪い。

初弾を受けることは覚悟の上で、俺は接近戦に持ち込むことを選択した。

『……チャージオフ、フルバースト……』

こちらの狙いに始めから気がついていたのだろう。女キャストは接近を阻むべく、再度ライフルから高密度の弾丸を射出して来た。

『…効かねえんだよっ！』

ライフルの最も恐ろしい点はその射程の長さにある。

本職のレンジャーであれば、こちらの反撃を許さない遠距離から、精密な射撃だけで勝負を決することが可能だ。

しかしここは狭い船内の通路。

銃弾が飛んでくる方向と、着弾のタイミングさえ分かっているならば、シールドラインや武器の防御機能を一時的に全開にすることで、先程のようにしのぐことが出来る。

ドガアアアンツ！

手に持つ剣影から、再度大きな衝撃が伝わってくる。

俺は歯を食いしばり、放たれた弾丸を無効化せんと、限界までフォトンを愛刀に流した。

『……喚装、再充填……』

ライフルでの射撃を無効化する俺の姿を見て、女キャストが武装を変更する。

強力な一撃より手数を優先し、こちらの防御を破るつもりなのだろう。

ライフルの代わりに左右のその手に握られたのは、青い銃身のツインハンドガンだった。

（ガルド・ミラ！？次から次へと大した装備だなちくしょう！）

出現した高威力を備える武装を見て、俺は驚きを感じる。

これまでにこの女キャストが構えた武器は、そのどれもが一流の傭兵でもなかなか手にすることのないハイレベルなものだった。

『……シヨット……』

こちらが距離を詰め終える前に、女キャストが感情のこもらない声と共に銃撃の嵐を見舞ってきた。

『なめんなあっ！！！』

全ての銃弾をかわすことは不可能と判断し、俺は自身のシールドラインの性能を信じて構わずに突っ込む。

ツインハンドガンからの銃弾にはライフルのチャージシヨット程の殺傷力は無いはずだ。

無効化は出来ず、いくらかの手傷を負おうとも、距離さえ詰めればこちらの土俵に引き込むことが出来る。

『！？…無謀……』

放つ銃弾の嵐を意に介さず、直進してくる俺の姿に女キャストがかすかに狼狽の色を見せる。

『くっ！……っらあああっ！！』

女キャストの銃弾は、シールドラインに阻まれながらも、正確に俺の手足を穿つ。

だが予想した通り、その威力は俺の疾駆を止めるまでには至らない。

『くらえっ!!』

手傷を負いながらもついに距離を詰め終えた俺は、左右に構えた剣影で銃撃後の女キャストに斬りかかった。

『……!!』

銃撃でこちらの足を止める自信を持っていたのか、女キャストは俺の斬撃に対処しきれず、ガルド・ミラを盾にして攻撃を辛うじて防ぐものの、態勢を大きく崩し、床に片膝をついた。

『はっ!!』

初撃を防がれても、こちらの動きは止まらない。

俺は無防備になった相手の頭上へ刀身を振り下ろさんとする。

『……かかった』

その直後、女キャストの足元から立ち上る炎の嵐。

体制を崩したタイミングで仕掛けたのであろう、バーストラップが起動した。

狭く薄暗い通路に、鮮やかな紅蓮の炎が立ち上る。

まるで今朝方の戦闘の焼き直しのような状況。

しかし…

『はっ！何度も同じ手にかかるかよっ！！！！』

前回の戦闘で相手の手口を認識していた俺は、接近してからのこの行動を予想しており、フェイントの攻撃を切り上げて即座に後方に跳ぶ。

『！？』

詰め終えた距離を自ら開けたこちらの行動が予想外だったのか、女キャストの表情に始めてはつきりと驚愕の色が浮かんた。

『お返しだっ！！！！』

相手の態勢が整わないうちに、俺は武器を一瞬でロッドに喚装し終えると、躊躇なく敵へ法撃を放った。

『サ・ゾンデ！！！！』

振り下ろしたロッドから放たれる電撃の嵐。

『！ガッ！？』

驚愕の表情を浮かべた女キャストは、為す術なく身を貫く雷に苦しげな声を上げた。

『っらあああっ！！！！』

勝負を決するのはこのタイミングしかない。

俺は電撃に身を踊らせる女キャストめがけ、容赦なく雷の法撃を二度三度と浴びせ続ける。

『ギッ！…ガッ！！』

電撃の牢獄にその身を捕らわれた女キャストは、赤い外装から断続的なショートを起こし、通路の床へと倒れ伏す。

『……終わりだ』

俺は床に倒れた女キャストを冷たく見下ろした後、その背中に喚装を終えた剣影の刃を振り下ろした……

『……とどめを刺さないんですか？』

女キャストを斬り伏せたのとほぼ同時に、後方で单身、二体のシノワビートを破壊したヘンリーが近づいてきて俺に呼びかけた。

相棒の高性能なセンサーには、倒れ伏す女キャストにまだ息があることが映っているのだろう。

『……単なる雇われモンなら、仕事に失敗した時点で十分ペナルティーは受けてんだろ。勝負は終わったんだ。これ以上邪魔にならないけりゃそれでいい。』

床に倒れ、ぴくりともしない女キャストを見やりながら相棒にそう

答える。

振り下ろした刃はフォトン出力をスタンモードに切り替えてあった。甘いのは十分承知の上だが、勝敗が決した相手の命を無理に奪う必要も感じられない。

それに、これだけの腕を持つ傭兵なら少なからず名が売れている筈だ。ソアラに言って調べさせればリーヴに加担した背後関係の筋もすぐに分かるだろう。

女キャストの实力は確かなもので、狭い船内でなく、制限のない遠距離での戦いであれば負けていたのはこちらだったかも知れない。

モトウブの今後を考えれば、今回のような争乱の火種になりうる要素は今の内に可能な限り根絶やしにした方がいい。

『処罰に関してはタイラー達に任せよう。さ、お姫様を迎えにいこうぜ。』

相棒にそう言って、目的の部屋へ踏み入ろうとしたその時、

『悪いがそれは許可できんな。』

しわがれた声が俺に制止を呼びかけてきた。

『!?!』

背後から聞こえてきたその声に反応し、俺とヘンリーが同時に振り返ると、右肩から血を流しているフードをまとったビーストの男が

通路に立ちすくんでいた。

『…リーヴ……』

数時間前、マイシップの前で依頼から降りるよう警告してきたそのローグスの反逆者は、あの時と同じように、嘲るような笑みを浮かべこちらを見つめている。

しかし、今朝方の不適な様子とは違い、タイラー達の襲撃を受けたのか、右肩の深い切り傷以外にも足には銃創が見受けられ、立っているのがやっとの満身創痍の状態に見えた。

『やられたよ。まさかこうも早くこちらの居場所を突き止め、襲撃してくるとはな。ドンの恐ろしさは理解していたつもりだが、まだまだ見立てが甘かったようだ。』

リーヴは自嘲するようにそう吐き捨てると、拳銃を構え、こちらに銃口を向けてきた。

『自分の無謀さ加減が理解できたなら、これ以上の見苦しい真似はよしだろうだ？ 悪いが、あんたの腕で俺達二人を相手にするのは酷ってもんだぞ？』

忠告が脅しではなく、絶対の事実であることを突きつけるように、俺は殺気を込めてリーヴを睨む。

銃口を向けられたところで、反逆者のリーダーから感じる威圧感とは、先程戦った女キャストとは比べものにならない程脆弱なものだ。

荒事に慣れたファミリーのボスということらしいが、この男自身の

戦闘力は俺達にとって問題になるようなものではないだろう。

俺は相手が銃を撃てば、その瞬間に銃弾をはじき、向こうへ斬り込めるように剣影を持つ手に力を込めた。

『……君達の存在もこちらの想定外だよ。まさかビッキーをもつてしても対処出来ないとはね。まったく大したものだ。……腹立たしい程に。』

リーヴはそう言って笑みをこぼすと、観念したのか構えた銃をゆっくりと下ろした。

『……今さらどう命乞いしたところで、あんたの運命は決まってるだろう。最後だろうから聞いといてやる。あんた、なんで反乱なんて馬鹿な真似したんだ？』

俺は目の前の男に胸の内の疑問を問いかけてみた。

タイラーの話によれば、リーヴという男は決して無能な輩ではなかったという。

タイラーの傘下に入った後も、内心はどうあれ、一つのファミリーの頭領としてローグスの取り決めに準じ、経済的な利益・組織への貢献を安定して行っていたという。

現時点でモトウブの全てを問題なく取り仕切るタイラーへの反逆など、野心に取り付かれた愚鈍な俗物か、気が触れた狂人でなければ考えもしないだろう。

だが、こうして実際にまみえた相手から受ける印象は、そのどちら

にも当てはまらない。

リーヴはこちらからの問いかけに驚いたように目を見開くと、堪えきれない様子で笑い声をあげた。

『くっくっ、：はっはっは！これは驚いた。傭兵と言えば報酬や金だけが目当ての無頼漢ばかりだと思っていたが、君のようなつまらんことに気を回す輩もいるのだな。どうやら今朝方、君達に言った役割については私の偏見というものだったようだ。これは謝らねばならんな。』

何が可笑しいのか、リーヴは機嫌良さげにそうつぶやくと、暗い瞳をこちらに向けて話し続けた。

『自身の戦いに意義を見出したいのかな傭兵君？私の目的を知って、君は何を得る？何も聞かずにこの首を取ったところで、君達に支払われる報酬の額に変わりはないだろう？』

愉快げに語るリーヴは、質問に質問を返す形でこちらに問いかける。

俺は金目当ての傭兵と侮辱を受けようと、なんら気にもとめずに己の信念を相手に語ってやる。

『てめえみたいなのにどう思われようと知ったこっちゃねえが、俺達は金だけで命がけの依頼を受ける訳じゃねえ。自分が決めたルールに沿っていること。これが依頼を受ける最低限の条件だ。今回、お前は俺が仲間と認めた連中に牙を剥いた。お前が何の理由もなく仲間を傷つけたゲスだってんなら、お望み通り今すぐその首かつ切ってやる。だが、そこにお前なりの理由があったってんなら、地獄に行く前に情けとして聞いというてやろうってだけの話だ。』

一瞬たりとも相手の目から視線を逸らさず語りかける俺に、リーヴが値踏みするような眼差しを向けてくる。

幾ばくかの沈黙の後、フードをまとった反逆者はその口を開いた。

『傭兵風情が随分と気取った口を聞く……………だが、そういった信念は嫌いではない。』

そう言ったリーヴは口元を再度歪ませた。

『しかし、自信過剰なのはいただけでないな。ワタシが地獄に行く？何を根拠に自分達の勝利を確信しているのかね？』

こちらを見下すような嘲りの微笑み。

リーヴは言い終えると同時に、手に持っていたハンドガンをこちらに向けて投げ捨ててきた。

『!! マース! 危ない!!』

手にしていた唯一の武器を捨てた相手の行動に疑問を抱いた瞬間、ヘンリーが叫びながら俺を通路に押し倒した。

『! ! ! ! !』

突如、通路を白い光の束が覆う。

一瞬前まで俺の頭があった位置を、高密度のフォトンレーザーが駆け抜けて行った。

（新手だと！？）

俺は即座に倒れた状態から身を持ち直し、片膝をつきながらレーザーの発せられた後方に視線を向けた。

『こちらの手札を見誤ってもらっては困るな。一体を倒した手並みは見事だが、君も無傷ではないようだ。その状態で彼女に勝てるか、自慢の実力を存分に振るいたまえ。』

耳障りなりーヴのしわがれた声が響く。

（冗談きついで……）

俺の視線の先には、先程打ち倒した女キャストと全く同じ顔をした、黒い外装を身にまとう冷たい瞳の刺客が、三体ほどレーザーカノンを肩に構えて立ちすくんでいた。

第七話　く勝負く（後書き）

決着まであと少し。

次話を白熱した形でお届けできるよう、執筆に挑みたいと思います。

どうかお付き合い下さい

、（^^）

第八話　く死闘く（前書き）

ぐはあっ！

戦闘シーンの描写に上達の気配が欠片もみえねえっ！！

自分の非才っぷりに血の涙を流しつつお届けします第八話。

駄文へのお付き合い、何とぞよろしくお願い致します。

m
┌
└
m

第八話　　（死闘）

「自分の身の程を知るのも実力の内ってやつだ。」

力が足りなくて足を引っ張ることしか出来なかった俺にそう言って笑いかけたあの人。

戦場で1日も早く肩を並べようと足掻いていた俺にとって、その言葉はとにかく悔しいものだった。

結局、その肩に並ぶことは出来なかったけれど

「何、お前はまだ伸びる。今は大人しく守られておけ。」

その言葉が、今も俺の支えになっている。

あの時守れなかったものを今度こそ、この手で守りきると決めた。

だから、何があろうと俺は諦める訳にはいかない。

例え、絶望的な状況であろうとも

「そのうち俺の背中を託せるようになってくれ。期待してるぞ。」

いつかのあの笑顔に、胸を張って答える為に……

『うおおおつつ！！！』

襲い来る光弾の嵐。

現れた三体のキャストは、レーザーカノンで連続して容赦ない銃撃を浴びせてきた。

俺は剣影を体の前にかざし、急所への銃撃を必死に防ぐ。

『マース！下がって！！』

先程の女キャストとの戦闘で手傷を負っていた俺を庇うように、シールドラインを展開させたヘンリーが前に出る。

『ぐっ！！』

物理的な防御力なら俺を上回るヘンリーの装甲でも、連中の光弾を無効化するには至らず、一撃一撃を受け止める度に相棒が苦悶の声を上げる。

『ちくしょう！このままじゃジリ貧だ！』

直線的な船内の通路は、回り込んで距離を詰めることを許さない。

先程のように、敵が一体であれば初弾を防ぎ突進する戦法も可能だったが、三体の刺客は互いの発射のタイミングをずらし、見事な連携を見せている。

一時的にシールドラインに全力のフォトンを流し込み一発を無効化

したところで、続く二撃目、三撃目が無防備なこちらの体を貫くだろう。

撃ち込まれる高出力のレーザーは、防御態勢を取らずに直撃すれば致命傷になりかねない威力を感じさせた。

『くっ!! 調子に乗ってんじゃねえ!!!!』

身を挺して壁になってくれているヘンリーの背後から、武装をツインハンドガンに喚装させて反撃を試みる。

ドウッ!ドウッ!!

しかし、船体に風穴を開けたオブシディアンの銃弾も、こちらの有効射程の外に陣取っている連中に届く前に威力が低下し、敵のシールドラインに虚しく弾かれる。

『ちっ!それならっ!!』

力押しで前方の三体を相手にすることが困難と判断した俺は、一連の騒動の元凶である後方のリーヴに銃口を向ける為に振り返った。

しかし、

『マース!!』

ヘンリーの警告の叫びと同時に身に迫る強い殺気。

俺は瞬時に剣影に装備を変え、殺気を感じた方向へ身を翻した。

ギィインツッ！！

通路内に激しく響き渡る金属同士の衝突音。

とっさに構えた剣影は、左右非対称のツインセイバーによる急襲から、かろうじてこの身を守っていた。

『なんなんだてめえらはっ！！』

力任せに剣影で押し返す。

驚いたことに、俺がリーヴを撃とうと振り返った一瞬で、三体のうちの一体が長い間合いを詰め、俺にツインセイバーで斬り込みをかけてきていた。

ヘンリーはいまだ銃撃を続ける残りの二体からのレーザー射撃で、防御姿勢から身動きが取れていない。

斬り込んできた襲撃者が手に持つツインセイバーはGRM社製のテイーガ・ド・ラガン。

黒い外装の刺客は、その顔立ちだけでなく、構える武器や斬撃の鋭さまで、先程打ち倒した女キャストと全く同じだった。

俺に押し返された相手は、無言のまま足下からフォトンを利用したジェット噴射を見せ、反対側で佇んでいるリーヴの隣へと一瞬で移動する。

『ふむ、高機動型と言っていたが、なるほど伊達ではないな。イシユクスが自慢していただけのことはある。』

リーヴは自分の隣に移動してきた黒いキャストを感心したように見つめた後、開いた距離から睨みつけている俺をあざ笑いながらつぶやいた。

『アルファ、ベータ、ガンマ、お前たちはその二人を処分しろ。終わったら倒れているオリジナルを回収してイシユクスの下へ帰れ。』

三体の刺客にそう命じると、リーヴは俺達が当初目指していた一室へと消えていった。

『シアリーー!!!』

リーヴの狙いを察した俺は、救出すべき女ローグスの名を叫び駆け出そうとする。

しかし、その行動も再びリーヴがいた位置から斬り込みを行ってきた刺客の一体によって押し止められた。

『くっ！邪魔するんじゃないやねえっ!!』

妨害者を撃退すべく、俺は左手で逆手に持った剣影の鞘を横なぎに振るう。

しかし、黒いキャストは表情一つ変えることなく、手に持つツインセイバーでこちらの攻撃を受け止めた。

『ぐ、…はっ……』

堅固な守りを見せる目前の敵に苛立ちを覚えていると、後方から相棒が上げる苦痛のうめきが聞こえてくる。

（ヘンリー！！）

通路内にいまだ響き渡る連続したレーザーカノンの射撃音。

防御に徹しているとは言え、銃撃を受け続けているヘンリーの装甲も限界が近いに違いない。

（やべえ、このままじゃ全滅する！！）

絶望的な予感が脳裏をよぎる。

敵と斬り合いながら、事態を打開するすべを必死に模索していると、前方の部屋のドアが再び開き、リーヴが金髪の女性を肩に担いで姿を現した。

『つつ！！待ちやがれっ！！！！！！』

予想を違わず、リーヴは人質であるシアリーを確保し、この場から去ろうとしている。

意識がないのか、シアリーは担がれた状態からぴくりともしない。

守ると誓った女が、目の前で敵の手に捕らわれている。

自分の無力さへの怒りで、目の前が真っ赤に染まる。

『わざわざ来て頂いたのだ。ドンには目の前で大事な部下が死んでいく様を見て頂くとしよう。……傭兵諸君、君達はここで舞台から消えてもらおう。こちらの忠告を聞かなかった報いと知りたまえ。』

必死に道を切り開こうとしている俺を見下すように言い捨てた後、リーヴはシアリーを肩に担いだまま、通路の奥へと歩み去っていった。

『くっ！おおおおっつ！……！！！！』

行かせてはならない。

追うのを諦めれば、待つ未来は分かり切っている。

《だからワタシも思ったの。いつか、彼のような存在になりたいって。》

柔らかに微笑みながら、自分と同じ理想を語ってくれた女の横顔。

《頼むぞ、力を貸してもらおう。》

家族を守りたいと、俺に信頼を寄せてくれた偉大なローグスの眼差し。

『……そこを、どきやがれええつつつ……！！！！』

体を突き動かすのは、貫き通すと決めた自らの使命感と、寄せられた信頼へ応える為の義務感。

俺は剣影をナノトランサーに収納し、何も持たない右手を前方に強く突き出す。

無防備になった俺に対し、当然のように黒いキャストが斬りかかってくる。

『…がっ！！！！』

脇腹を挟る焼けるような激痛。

気を失いそうになる痛みを無理やり押さえ込み、一瞬で集中させた精神を解き放つ。

『……カンナツツ！！！！！！』

俺の叫びと共に、突き出した右手を起点として、空間に立体的な召還陣が形成された。

『くらいやがれええつつ！！！！！！』

絶叫に応えるかのように、召還陣から飛び出した一匹の幻獣が、一瞬で俺達のいる通路を駆け巡り、轟雷の嵐で包み込んだ。

「ミラージュブラスト」

近年、カーシュ族という独自の文化を築く一部族からもたらされた、

幻獣を召還・使役する戦闘技術。

自分自身への一定の肉体的ダメージと引き換えに絶大な威力を発揮するヒューマン、ニューマン両種族の奥の手とも言える技法だ。

ガガガガッ！！！！！

薄暗かった船内の通路は、雷の雨による爆音と光で溢れる。

俺を切り刻まんとしていた黒いキャストが、立ったまま無数の電撃に身を貫かれている。

『ヘンリー！！！！』

信頼する相棒に声だけで合図を送り、俺は眼前の黒いキャストを、喚装した剣影で縦横に切り裂く。

『！！ガッ！！』

終始無言だったキャストは、最後に断末魔のようなうめきを残し、剣影を振り切った俺の前で地に沈む。

『オオオオオツツ！！！！』

同時に後方から鳴り響くヘンリーの雄叫び。

俺は即座に身を反転させ、電撃に自由を奪われている残る二体を破壊すべく、既にナックルを構えて突進を始めている相棒の後を追っ

て駆け出した……

『くそっ……何だったんだこいつらは。』

幻獣カンナによる雷の嵐が止んだ通路で、俺はヘンリーと共に破壊した黒い刺客を見下ろしてつぶやいた。

全滅寸前まで追い込まれたこちらに、手加減などする余裕は無い。

三体の黒い刺客は、最初の赤い女キャストとは違い、物言わぬ骸となって床に倒れ伏している。

『……複数体が完全に同一の顔にするなんて……キャストとしては考えにくいですね。』

苦痛に顔を歪ませ、立っているのがやっとのヘンリーがつぶやく。

女達の身体的特徴は、ヘンリーと同じ種族である機会生命体「キャスト」であることを示している。

赤や黒の外装は色の違いこそあれ、確か「ルカラル」と名の付く、一般のキャストも使用しているパーツだったと記憶している。

合理的な思考を好み、感情の起伏が他種族より乏しいとされる為誤解されやすいが、彼らキャストはそれぞれ自我を持った一人の「人間」だ。

その生産の過程は、生みの親であるGRM社の極秘事項であり、一

切明らかにされていないが、自分自身の個性を重要視する生物としての特徴は、ヒューマンなど他の種族と全く変わらない。

事実、グラールに存在する殆どのキャストは、容姿など外見的要素に様々な違いを持つ。

自分が自分であるという確固たる自意識を確立するには、完全に一の外見を有する複数の他者など邪魔でしかないからだ。

だが、倒れている四体のキャストは一体だけ外装の色に違いを持つものの、背丈・体型・髪型や頭髪の色、顔の作りにいたるまで完璧に同一の存在にしか見えない。

『……詮索は後回しだっ!!!』

湧き出る疑問は尽きることがなかったが、今はそんなことに頭を悩ませている場合ではない。

俺は、傷つきふらつく自分の体を叱咤し、通路の先に消えていった反逆者を追うべく駆け出そうとした。

『マース、……シアリーさんの反応は……ここを直進した船内の格納庫に向かっていきます……外で戦闘を行っていたタイラーさん達も、何人か船内に入り込んだようです……できるだけ、合流して……くっ……後を追って下さい。』

背中から聞こえてくる言葉に振り返ると、体の各所から放電を繰り返し、力無く座り込む相棒の姿があった。

『ヘンリー!!』

長時間、レーザーカノンの光弾を受け続けたヘンリーは、二体の敵を撃破したことで力を使い果たしたのか、限界を迎え、身動きを取れる様子にない。

だが、慌てて駆け寄ろうとする俺を震える手を突き出すことで制すると、苦痛に耐えながら言葉を続けてきた。

『私は……問題……ありません。少し時間を頂ければ……自己修復機能で……動けるようになります……ます。……今は……シアリーさん……を……』

絶えずショートを起こし続ける青い外装。

長年連れ立ってきた相棒は、瀕死の自らの状態を省みず、俺に先へ進めと促して来る。

その傷は俺の盾代わりになった為に負ったものだった。

常に傍らに立ち、いまだ未熟な俺を支え続ける絶対の相棒。

『……………必ずシアリーを助け出してくる。……だから、絶対くたばるんじゃないぞ。』

この世で最も頼りとしている男からの「後を託す」という願いが込められた眼差しに、互いの生還を誓いとして答える。

俺はもう振り返らず、刀を握る手に力を込めて、ただ全力で通路の奥を目指し駆け出した。

ガアアアアアンツ！！！！！

……………爆発音？

走り続ける船内を揺るがす、大きな衝撃と騒音。

通路を塞ぐように配置されていたマシナリー、シノワビートを斬り伏せた俺の耳に、目指す先の格納庫から戦闘の気配が流れ込んできた。

『ソアラ！聞こえるか！？タイラー達の状況は怎么样了？』

高性能センサーを搭載した相棒が戦線を離脱した今、状況を把握するすべを俺は持たない。

船内に入ってから、構造物に突入した影響か、つながらなくなってしまうていたソアラとの通信に一縷の望みをかけ、呼び掛けを行う。

『……………ザツ……………マー……………聞こ……………ザツ……………タイラー……………戦闘に……………ザツ……………』

（くそっ！ダメか！）

聞こえてくるソアラの言葉は頻繁にノイズが混じり、断片化されたセリフはこちらに状況を理解させるまでに至らない。

事前にタイラーにもらったこの船の構造資料では、リーヴ達が向かった格納庫はフライヤーを搭載する為、船内で一番の広さを擁しているはずだ。

そこで戦闘が行われているなら、突入する前に敵味方の位置関係などの情報入手しておきたかった。

ガアアアアアンツツツ！！！！

逡巡している俺の耳に、再びこだまする何かの爆発音。

（ちっ！悩んでも仕方ねえっ！！）

通路すら揺るがす振動や派手な爆発音は、間違いなく船内に突入したタイラー達と、反逆者リーヴが争っている証だろう。

すでに戦闘が始まっている以上、躊躇している場合ではない。

『ハアッ！！』

俺は通路の終わりにある巨大な扉を剣影で切り裂き、自分が通るスペースを作り出した後、転がるように格納庫内に飛び込んだ。

『…っ!?!』

回転しながらナノトランサーからオブシディアンを取り出し、受け身を取って立ち上がった俺の視界に入ってきたのは……

『後方に回り込めっ!! 正面に固まるなっ!!!!』

巨大な戦闘用マシンリー、マガス・マツガーナと必死に戦っているタイラー達ローグスの姿と

『止めてえええっ!!!! 止まってよおおっ!!!!』

遠目にも分かる、マガスマツガーナの搭乗席で、悲痛な叫びをあげ続けている金髪の女ローグスの泣き顔だった……

第八話　く死闘く（後書き）

黒ビッキーマスとの戦闘における予測される疑問点について。

Q、高機動型ビッキーってなんじゃらほい？

A、PSPシリーズで敵として登場する際のヴィヴィアンさんをイメージして下さい。

あの突進スピードは筆者のトラウマです（笑）

Q、なぜマスはさっさとミラージュブラストを放たなかったの？

A、ブラストゲージがたまっていなかったんす（笑）

前回と同じような終わり方しやがって！とお怒りの方がいらしたら地に頭こすりつけてお詫び致します（汗）

モトウブ編もあと幕間一話十本編一話で終結予定です。

月内には第一章完結しないとなあ

（x|x;）

読んで頂いた方に全力の感謝を。

ではまた

、
(^ ^)

幕間3　　（崇拜）（前書き）

第一章、ラストスパート！

幕間の三人称、未だに違和感が拭えません（笑）

何はともあれ、勢いにのせてお届けします。

見苦しい点は何卒ご容赦を（汗）

幕間3 〈崇拜〉

『スリーマンセルで陣形を取れ！いいな、連携して各個撃破を狙っていけ！！』

灼熱の砂漠に、威厳のある声が響き渡る。

ランディール号の砲撃を受け、砂の海に着陸した灰色のスペースシップから出現した多数のマシナリー。

それを見たタイラーは部下達に即座に指示を出し、自身も黄色いフオトンの刃をもつセイバー、ブラック・ハーツを片手に、自ら運転するフロードバイクを敵陣へと走らせて行った。

『Gi Gi！』

高速接近して来るフロードーを感知し、敵方のマシナリーの一体、バイシャ甲21型がボディに搭載された火炎放射器から紅蓮の砲撃を放ってくる。

『当たり前せん！』

タイラーはフロードーを巧みに操り、向かって来る火炎弾を右に旋回することでかわすと、舵を取り直しそのまま攻撃してきた敵機へ改めて直進していく。

『ハッ！』

突進するフローダーバイクから、気合いの声と共に飛び降りるタイラー。

主を失ったフローダーは、速度を落とさずに直進していき、砲撃後の無防備なマシンリーにそのまま激突した。

ドオオオンッ！！！！

鳴り響く爆発音。

車体の直撃を受けた戦車型のマシンリーは、為す術なく後方へ跳ね飛ばされ、砂漠を転がった後、周囲の同型機を巻き込んでその身を爆散させた。

『数が多い！お互いの背を補い合え！死角からの砲撃に当たるな！』

単身砂漠に降り立った首領の指示を受け、それぞれフローダーバイクから降りたローグス達が敵マシンリー目掛け展開していく。

数多のローグスの中でもその実力を認められた精鋭達は、着実に各々が見定めた標的にフォトンの刃や銃弾を浴びせ、次々に破壊していった。

（これだけのマシンリーを用意しているとはな……）

自分に向かって突進してくる新手の機体をブラック・ハーツで斬り伏せながら、タイラーは自らに反逆の意を示したビーストの顔を思い浮かべる。

リーヴ・クラウン

陰鬱な表情で、一時は自分をドンと呼び、忠誠を誓ってきた男。

SEED事変の混乱のただ中であつたローグスをまとめる為、タイラーが行動を始めた当時、自ら率先して配下に加わってきたその男に、タイラーは部下として仲間としての最大限の信頼を与えたつもりだった。

タイラーにとって、配下とは代えの効く部品などではない。

一人一人がかけがえのない仲間であり、己の身に代えても守ると誓った家族だった。

無法者として他の惑星に知られるローグスではあつたが、組織としての結束は、同盟軍やガーディアンズに決して劣らない。

ヒトが住む環境としてはあまりにも過酷なモトウブにおいて、人々が秩序を得て暮らしていくには、各自の利益追求だけでなくそれぞれが信頼し協力していく体制が不可欠。

タイラーはその信念のもと、荒くれ者の多いモトウブの勢力を改めてまとめることに成功したはずだった。

時には自らの武力で。時にはモトウブ全体の為であるという信念、魂を込めた対話によって。

通商連合や四大ファミリーという大きな存在が消え、混沌としていたモトウブは、タイラーという新たな指導者と、新生ローグスという巨大な影響力を持つ集団を得たことで崩壊の危機を脱したのだった。

た。

リーヴという男は、自らも一つのファミリーをまとめる身であったが、配下に下った際、全体をまとめ得るリーダーの重要性をタイラーに説いていた。

モトウブという数多の人間が暮らすこの星に、絶対の秩序をもたらす存在になることをタイラーに求め、その思惑はタイラー自身の願いと強く一致していたはずだった。

（いまだに分からんな……何故こんな真似を……）

リーヴに反乱の動きがあるという報告を受けた時、タイラーは正直耳を疑った。

新生ローグスがはっきりとした形を整え、一つの惑星として体制が定まったこのタイミングで、モトウブ全体の秩序を望んだ筈のあの男が、自分を裏切る理由が理解出来なかった。

それ故、反乱の情報が確かなものであることを知った際、タイラーはリーヴ自身の口からワケを聞くべく、自ら彼の本拠地であるサテライトベルト内の小惑星に赴いたのだ。

しかしその結果、対談の拒否はおろか、こちらの行動を嘲笑うかのようにダグオラ・シティの住民を傷つけ、同朋であるローグスの仲間を殺し、シアリーという自身が信頼を置く部下を人質に取るという最悪の凶行で意志を返された。

擁護すべき市民、さらには家族として扱っている仲間達を害された今となっては、リーヴは支配者たるタイラーにとって、排除せねば

ならない明確な敵に変わっていた。

（容赦はできん。）

かつては同じ願いを持った同朋を斬り捨てる悲壮な決意を固め、タイラーはブラック・ハーツを強く握り締めた。

――
【タイラー、聞こえる？】

しばらくして、砂漠に展開された敵マシナリーがあらかた破壊されたタイミングで、ソアラからの通信がタイラーの耳に入ってきた。

『聞こえている。こちらは大体片付いた。マース達はどうか？連絡はあったか？』

部下達に戦闘での大きな被害がないことを確認しながら、タイラーが通信機に語りかける。

【それがマズいんだよ、二人が船内に入ったとこまでは確認してるんだけど、それ以降電波が届かないみたいで、呼びかけても反応がないの！】

返ってきたソアラの声には、強い焦りの色が見えた。

『何？』

予想外の事態にタイラーも眉をひそめる。

急襲を決めた段階で、別行動となるマース達とは情報の連携が不可欠と判断した為、通信機を用意したのだ。

ローグスの首領である権限を使用して詳細なデータを入手していたリーヴの船には、通信阻害の機能は存在しなかった。

それが通じないとなれば考えられる理由は二つ。

『こちらが相手をした敵はマシナリーが殆どだ。船内にリーヴの部下が多数残っているかもしれん。二人がすでに倒された可能性は？』

考えられる理由のうち、最悪な方のケースを予想してみる。

【アイツらの実力はアタシが良く分かってる。相手が武闘派のローグスだろうと、そんな簡単にやられたりは絶対しないよ！】

仮定に対する返答は、強く断言する明確な否定。

タイラー自身、一流の情報屋として活躍するソアラの分析には深い信頼を置いていた。

ダグオラ・シティでの人攫い騒動で、連中を雇うと決めたのも、シアリーが推挙したソアラの情報屋としての腕を買った為だ。

事実、マース達はたった二人でSランク以上の難易度の依頼を何度もこなしている腕利きだった。

ガーディアンズすら手こずるような凶悪な原生生物に勝利を収めてきた戦闘のプロが、この短時間でおめおめと倒されたとは考えにくい。

であれば、残る可能性は一つ。

『リーヴが新たに船体に電波を遮断する改造を施したのだろうか。』

苦々しい面持ちでタイラーがつぶやく。

本来、ローグスの配下が所持しているスペースシップであれば、武装の増設や改造を行う際、作業を引き受けるクバラ・シティの人間からタイラーに報告が入る。

ローグスをまとめる者として、配下の戦力を把握する為整えた手筈だったが、今回クバラ・シティからの連絡は一切なかった。

となれば、考えられるのはモトウブ以外の星の造船業者が請け負った可能性だが、正直こちらも考えにくいケースだった。

パルムにある健全な表社会の企業などであれば、武闘派として悪名高いリーヴのファミリーの船の改造など、金を積まれても断るだろう。

犯罪組織の一面を持つローグスと関係を持つことは、そのまま強力な治安維持組織である同盟軍に睨まれる事態に繋がりがねないからだ。

ここで、タイラーの脳裏に新たな疑問が生じた。

船の改造の件もそうだが、たった今、タイラー達が撃破した無数のマシナリーを、リーヴが一体どこから用意したのかという点だ。

配下であった時代、リーヴのファミリーが有する戦力は確認していたが、マシナリーなどは殆ど所持していなかった筈だ。

マシナリー製造の大手であるGRM社は、社のトップがタイラーの顔馴染みでもある。

仮にローグスの一員であるリーヴがこれだけの数の戦闘機械を新たに購入したなら、巧妙に情報を隠そうとしたところで、タイラーの耳に入らない訳がない。

（背後になんらかの協力者がいる……か…）

今の今まで、リーヴの反乱は単独での愚行に見えたが、状況から導き出されるのは大掛かりな組織的犯行だった。

ことによると、それがリーヴの変心の理由にも関係してくるのかもしれない。

『ソアラ、今から私も船内に突入する。万が一、数刻経っても我々が帰還しなければ、ノ・ボル達と共にランデール号でサテライトベルトへ向かってくれ。その場合、あちらに私の留守を任せている腹心がいるから、その後はノ・ボル達に任せ、君はこの件を忘れてくれ。』

突然のタイラーの言葉に、ソアラが大声で制止を試みる。

【ちょっと！何言ってるのさ！アナタは陽動に徹するって話だったでしょ？これ以上自分で危険な場所に飛び込むような真似しないでよ！！アナタに何かあっても、代わりが出来る人間はいないんだよ

！？』

モトウブの支配者が命の危険を冒そうとしているのを見て、ソアラは必死に引き止めようとした。

『どのような存在にも代わりなどいない。……それは傭兵であろうと、組織のトップであろうとなんら変わりはない絶対の事実だ。』

しかし、タイラーは全く意に介さず、灰色の船へと歩みを進める。

静かでありながら、反論を許さないタイラーの気配に気圧されたのか、ソアラもそれ以上言葉を告げることが出来なかった。

『リーヴ自身の口から聞かねばならないことが出来た。心配するな。これでもこの程度の修羅場は何度も越えてきた身だ。必ず帰ってくるさ。』

通信機の向こうから、心配の様子を見せるビーストの少女に、タイラーは口調を変えて優しく語りかけた。

【……もう！どいつもこいつも、待ってる側の気持ちにもなってよ！いい？アタシもこの船に残ってるアナタの部下達も、何があったってアナタ達の帰りを待ち続けるからね！？失敗した時の手筈を考えるくらいなら、意地でもマース達と一緒に無事に帰ってきて！】

泣き出しそうな少女の声に苦笑を浮かべた後、ローグスの英雄は了承の返答を通信機に告げ、数人の部下を連れて船内へと入って行った。

『……格納庫……か…』

敵船に乗り込んだ後、タイラーは次々と襲い来るリーヴの配下であるビースト達を、自身の部下と協力して倒しながら歩みを進め、格納庫と思われる広い空間に出ていた。

船体の表面と同じく灰色の塗装が施された空間には、小型のフライヤーの他に、シートで覆われた巨大な物体が存在している。

『……?…?』

形状から明らかに小型艇などとは一線を画すその物体に注意を奪われ、タイラーが近づいていったその時……

『我が船へようこそ、偉大なるドンよ。まさかアナタ自身におこし頂けるとは夢にも思いませんでしたよ。』

直接その思惑を聞いたさんとしていた反逆者のしわがれた特徴ある声が、タイラーの耳に入ってきた。

『リーヴ……』

声がしたのは、今まさに近づかんとしていたシートに覆われた物体の最上部。

全長10m近くにも及ぶ高さから、フードをまとった中年のビーストが、笑みを浮かべながらこちらを見下ろしている。

『気が触れたのかとも思っていたが、どうやらそうでもないようだな。』

そんな皮肉気なタイラーからの問いかけにも、リーヴは変わらぬ笑みで応えるだけだった。

『事ここに至って、お前に語るべき言葉は少ない。見苦しい真似をせず、今すぐ降伏しろリーヴ。貴様の企てた愚かな反乱もここまでだ。』

そう言い捨てたタイラーは、手に持つブラック・ハーツの切っ先をリーヴに向け言葉を続けた。

『私の家族に手をかけた以上、貴様の運命は決まっている。だが、大人しく降るなら、貴様と行動を共にした他の部下については処遇を考えよう。』

ローグスをまとめる長として、自身に反旗を翻し、同朋を殺める指揮を取った目の前の男はもはや殺す以外に選択肢はない。

しかし、こうして目前に姿を現した以上、その口から降伏を告げるなら、配下への処罰については以後、反逆など考えぬよう、ローグスと名乗ること許さず、肉体的・精神的な恐怖を与え、追放などで済ませることも可能だった。

リーダーとしてのあり方、組織の首領のあるべき姿において、自己と一定の同じ価値観を有していたリーヴであれば、配下への配慮はある筈。

そう考えたタイラーは、かつての同朋に最後の慈悲を見せ、愚鈍な反逆者としてではなく、一人のファミリーの頭領としての降伏を呼びかけた。

しかし……

『……くっ……くはっ……っははっ……アーツハツハツハ！！！！』

ローグスの首領からの呼びかけに、反逆者は格納庫内に大きく響き渡る嘲笑で答えた。

静かな格納庫内に、リーヴの笑い声が反響する。

自分達が頭領として崇めるタイラーの呼びかけに対し、これ以上ない無礼な態度を見せるリーヴを見て、タイラーの配下達が色めき立った。

『裏切り者が！何がおかしいっ！！』

『狂人め！貴様の下らん企みで死んでいった俺たちの仲間に詫びろ！！』

次々にあがる怒声は、いずれもそれだけで相手を殺さんとする強い憎しみに満ちていた。

リーヴはひとしきり笑い声を上げた後、自分に罵声を浴びせる連中を冷たい目で見つめ、突然怒鳴り声を上げた。

『黙れ馬鹿共が！！！！何も見ようともしない盲目の愚者の集まりが、

我々の話の邪魔をするな!!!!!!!!!!」

狂ったように笑っていたリーヴの一瞬での豹変ぶりに度肝を抜かれたのか、タイラーの部下達が口をつぐむ。

『……………』

リーヴは静けさが戻るのを待って、改めて口の端を楽しげに歪めた後、かつて忠誠を誓った男に話しかけた。

『ドンよ、大変失礼致しました。しかし、貴方ともあろう御方が、反逆者を前にそのような態度を取ってはいけません。そんなことでは、こちらは悲しさを突き抜けて、笑うしかないではありませんか。』

リーヴはそう言葉を発すると、何を思ったか、その場で恭しく胸に右手をあて、かしづく様に片膝をついて頭を下げた。

『!?!?』

突然のリーヴの行動に、タイラーが訝しげに目を細める。

リーヴの姿勢は、主に忠誠を誓う使用人のような格好にしか見えなかった。

『見下ろす様な位置でまことに心苦しいのですが、このリーヴ、今でもアナタをこのモトウブの絶対の支配者として深く尊敬しております。故に、そのような私の期待を裏切る言動はどうかおやめになって下さい。』

反逆者の突然の語りかけに、言葉を向けられたタイラー自身、その意図が掴めず、相手の正気を疑うように問い返した。

『貴様、今更何を言い出す？ 正気に見えたのは私の見間違いか？ その下らぬ芝居はこの私を愚弄してのものか？』

頭上から理解出来ない言動を繰り返す反逆者に、タイラーが僅かに苛立ちを見せる。

そんなタイラーの様子を見て、ひざまずいていたリーヴが嬉しそうな声を上げた。

『そう、貴方は断罪者だ。この世で唯一、私を裁くことが出来る存在なのだ。怒りを覚えられたなら、どうぞ遠慮なくこの身を討って下さい。これからのローグスの為に、その手で正しき秩序をお示し下さい。』

そう言ったリーヴは、態度を変える様子も見せず、ひざまずいた姿勢から動こうとしない。

先程まで張り裂けんばかりの怒りをリーヴにぶつけていたタイラーの部下達も、毒気を抜かれたように口を開けてリーヴの姿を見上げていた。

『……………』

リーヴの言動や行動を冷たい瞳で見据えていたタイラーは、冷酷な響きを含んだ声で語りかける。

『狂人の戯言に付き合ってはおれん。リーヴよ、死にたいのならす

ぐにでも殺してやる。だが、願いを叶えてやる前に、貴様がさらった私の同朋を返してもらおう。シアリーはどこだ?』

格納庫内に響く威厳あるタイラーの声。

ほんの数瞬、静寂が訪れた後、リーヴが悲しげにつぶやいた。

『それだ。その貴方の姿勢こそが私が今回のような事態を引き起こした原因なのだ!』

言葉の途中から、興奮したように声を荒げたリーヴが、ひざまずくのをやめて立ち上がり、怒りが込められた瞳でタイラーを見下ろす。

『ドンよ! 貴方はご自分がいかに優れた存在か、ご自分で気がついていない! このモトウブを! 我々ローグスを束ねる資格を有するのは他の誰でもない、タイラー、アナタだけなのだ!』

訴えかけるように叫ぶリーヴが、頭を覆うフードを外し、目を見開いて続ける。

『だというのに! 何故だ! 何故このような状況で、あんな小娘の命を気遣う!? 反逆者は私だ! 私を殺し、組織に仇なす謀反人を見事討ち果たせば、それだけで貴方の責務は果たされるのだ!』

必死に訴えを続けるリーヴ。

興奮した面持ちでそこまで言い終えると、次は声のトーンを落とし、静かな瞳でタイラーに問いかけてきた。

『貴方はモトウブ通商連合を復活させるつもりだと聞きました。間

違いありませんか？』

一転して冷静さを見せるリーヴの問いに、タイラーは表情を変えることなく答えを返した。

『その通りだ。モトウブの商業的な活性化には、SEED事変で失われたあの組織を蘇らせることは必要不可欠。ローグスが蘇ったのと同様、近い将来通商連合もあるべき姿を取り戻す。』

強い決意が込められた返答。偽りない真実を感じさせるタイラーの言葉を聞き、再びリーヴが語調を荒げた。

『馬鹿なことを！モトウブのまとまりに必要なのは貴方という絶対のシンボルだけだ！自己の利益だけに捕らわれる商人共に、ルールを決める権利を与える必要はない！ドンよ、考え直して下さい。貴方とローグスさえ存在すれば、下らぬ他の集まりなど無くとも、モトウブは今後も栄え続けていけるのです！』

悲壮感さえ漂う、懇願とも言うべきリーヴの言葉。

タイラーはそんなリーヴの訴えに一瞬だけ悲しげな目をした後、ゆっくりと瞳を閉じて静かな声で語り出した。

『……愚か者め。個人をそのような旗印にした所で、得られるモノは実体のない幻想だけだ。ただ一人に権力を集中させる今の状況が、モトウブにとって健全である筈がない。仮に私がいなくなれば、それだけで崩壊するような組織など脆弱と呼ぶ他になかろう。』

そう言ったタイラーは、手に持つブラック・ハーツの切っ先を再度リーヴに突き出し、冷たく言い放った。

『狂信的な崇拜など私は求めていない。私が欲するのは家族と認めた仲間との揺るぎない繋がりだけだ。もう一度言うぞリーヴ。私の家族を今すぐ返せ。』

開かれた瞳に宿る揺るぎない意志。

リーヴは自分に向けられた眼差しと、崇拜する人間から放たれた言葉の内容に、茫然とした表情を浮かべた。

『……やはり、貴方には目を覚ましてもらう必要があるようだ。』

数瞬の沈黙の後、リーヴはうつむきながら暗い声で語り出した。

『信頼？情？結構なことです。集団の結束には、そういった青臭い感情も必要でしょう。だが、組織の頂点である貴方がそんなつまらないしがらみに振り回されてはいけない。貴方はこの痛みを知ることとで、初めて完璧な指導者へと生まれ変わるのです。』

うつむいたままのリーヴの呟きに呼応するように、シーツの下の大な物体が振動を始めた。

『!?!?』

格納庫全体を震わせる異常な気配に、タイラーとその部下が、武器を手に身構える。

『私が入質として彼女を選んだのは、貴方が最も信頼し、彼女も貴方に絶対の信頼を寄せていることを知っていたからだ。モトゥブの首都の治安維持という大任など、この小娘に務まる筈がないという

のに。』

シーツの下の物体に向け、いつの間に握っていたのか、リーヴが手元に持つ発信機らしき物体に向けた。

『せっかく御自身の身でお越し頂いたのだ。どうぞその手で下らぬしがらみを破り、生き残る為には情など不要という事実を、残酷で崇高な痛みを学んで下さい。』

リーヴはそう言って、タイラーに笑いかけると、立っていた物体の上部から身を踊らせ、格納庫の上部に設置された踊場へ跳躍、移動した。

『行け、マガス・マッガーナ！ローグスの新しき門出に祝砲を上げろ！』

リーヴの叫びと共に、振動を続けていた物体が、身を覆うシーツを吹き飛ばし、格納庫にその紅の姿を現した。

『！？リーヴ！！貴様っ！！！！』

驚愕に目を見開くタイラー。

動揺する部下達に囲まれる彼の瞳は、動き出した巨大戦闘兵器の頭部に儲けられた搭乗席で、こちらに向け、必死の形相を見せる大切な家族の姿を写していた。

幕間3　く崇拜く（後書き）

ぶっちゃけ、これまでで一番の難産でした。

リーヴが反乱という凶行に及んだ理由、説得力あったでしょうか？
（汗）

いずれにせよ、第一章完結まで後一話！

今回完全に空気となった主人公をどう活躍させるべきか！（笑）

ご意見、ご要望、心からお待ちしております

、（^^）

第九話 〽終局〽（前書き）

第一章、ラストバトル！

何はともあれ、お読み頂けたら本当に嬉しいです。

何卒、宜しくお願い致します

m () m

第九話 〳終局〵

傭兵として、前を歩くあの人が俺に口を酸っぱくして言い続けた一つの教え。

「諦めの悪さは欠点なんかじゃねえ。これ以上ない長所だ。」

一度やると決めたことは、その教えを実践するかのように、決して諦めることなく、最後までやり抜いていた。

依頼の達成はもちろん、日常の些細なことまで。

そんなあの人に「もう少し融通利かねえと、肩こるだろ？」とからかい半分に訊ねたことがある。

笑ったあの人が俺に返した言葉。

「自分で決めた誇りや意地だ。融通利かせて軽く扱っちゃったら、てめえがつまらない奴に成り下がる。」

……なあ、お願いだ。

そう言ってたアンタみたいになりたいんだ。

守ると決めた女がいる。

彼女を救い出す力を、アンタの信念を貫く強さを、ほんの少しでいいから俺にも分けてくれ……

『うわあああっ!!』

ドドドドドド!!

船そのものを大きく震わせる振動。

巨大な人型機動兵器は、搭載したミサイルポッドから爆弾の雨を降らし、ローグスの精鋭達を次々と無力化していく。

『ちいっ!』

目前で倒れ込み、身動きが取れない一人のローグスをかばい、剣影をかざして前に立つ。

展開したシールドラインに爆発の負荷がかかり、脇腹に負った傷から流れ出る血を感じた。

『立て! 立ち止まったら的になるだけだ!』

俺に叱咤されたローグスは、こちらに礼を言って必死に体勢を立て直し、後方に下がって行く。

『マース!』

戦場に飛び込んできた俺の姿に気づき、タイラーが呼びかけてきた。

『すまない！こっちは作戦通りに行かなかった。』

タイラーに駆け寄った俺は、当初の計画を実行しきれなかった自分の不手際を詫びる。

『……戦えるのか？』

満身創痍の俺の姿を見て、眉をひそめたタイラーがこちらを案じてきた。

『体は動く！今はシアリーを救い出すのが先決だ！』

流れる血も、手足の痛みも、機動兵器の搭乗席に見える彼女の姿を目にしたことで気にならなくなった。

（シアリー！！）

左腕部分の砲身から、ローグス達に向けてマシンガンの様にフォトン弾を放ち続ける巨大兵器。

その頭部の搭乗席で、叩き割らんとばかりに、必死に透明なコックピットの壁を両手で打ち続けている金髪の女ローグス。

ローグス達が一人、また一人と銃弾で傷つく度に、叫ぶような彼女の悲鳴が響き渡った。

（どうやってあのデカブツを止める！？シアリーをあそこから出すにはどうすればいい！？）

銃弾の雨は、容赦なくこちらにも降りかかって来る。

俺は必死に飛び回ってそれを避けながら、シアリーの救出方法を模索していた。

リーヴの手によるものだろう。

コックピットに閉じ込められたシアリーがいる以上、単純にあの巨大兵器を破壊する訳にはいかない。

機体が爆発を起こせば、搭乗席の彼女も当然それに巻き込まれ、命を落とす。

かと言って、人の身長よりはるか高くにあるあの搭乗席にたどり着こうにも、激しく銃撃が続いている機体の抵抗をかくぐって近づくことすら難しい。

『ふははは！行け！打ち払え！ドンよ、貴方の真の目覚めの時だ！甘さという弱き心はこの場で捨て去りなさい！私やあの機体を破壊して、完全なる支配者として覚醒するのです！！』

頭を悩ます俺の耳に入った、不快なしわがれ声の方向に目をやると、格納庫内の上部の方で、笑いながら叫びを上げるリーヴと目が合った。

奴は俺の姿を確認すると、驚愕の表情を見せて呼びかけて来る。

『貴様！まさかアルファ達を倒してきたのか！？』

信じられないものを見たばかりに、大きく目を見開くビースト。

俺は殺意を抑えきれず、吐き捨てるように怒りを叩きつける。

『ゲス野郎が！女を盾にとって偉そうにふんぞり返ってんじゃねえっ！！！』

俺は何のためらいもなくオブシディアンを取り出し、両手の銃で見下ろすビーストに向けてフォトン弾を発射した。

しかし、

ガッ！！ガアンッ！！！！

放たれた銃弾は、主を守るようにマガス・マッガーナが突き出した腕により防がれる。

『くそつたれっ！！』

主を害そうとした俺に狙いを絞ったのか、マガス・マッガーナは左腕に取り付けられた銃身をこちらに向け、嵐の様な銃撃を見舞って来た。

傷ついた今の体では、シールドラインを展開しても受けきることは出来ない。

俺は身を投げ出すように真横に飛び、間一髪、迫るフォトン弾を回避した。

『マース！！！！』

受け身を取り、体勢を立て直して機体の方向に目を向けると、搭乗席のシアリーが、悲痛な顔をしながら大声で俺の名を呼んでいる。

『すぐに助ける!! 待ってろ!!!』

同朋達が傷ついていく様子に涙を流す彼女に、強く誓うように大声で語りかける。

『傭兵風情が! 醜いあがきでこの場を汚すな!!』

俺という予想外の乱入者への苛立ちを隠さず、ビーストの反逆者が忌々しげにこちらを見下ろしていた。

俺は憎むべきその男に怒りの視線を叩きつけると、シアリーを救う算段を立てるため、一旦機動兵器の銃撃の間合いの外まで飛び下がった。

入れ代わりに、機動兵器の注意をそらすべく、タイラー配下のローグス達がマガス・マッガーナに向けて駆けだしていく。

『マース、まだ動けるか?』

血を流しながら、肩で息をする俺を気遣うように、走り寄ってきたタイラーが声をかけてくる。

『心配いらない。それより何か手はないか? このままじゃ全員なぶり殺しにされるだけだ。』

ローグス達に銃撃を浴びせ続けるマガス・マッガーナを見据えたま

ま、俺はタイラーに訊ねた。

『……………』

タイラーはしばらく思索した後、俺達から見て左側の格納庫の壁を指差し、静かな声で語り始める。

『フライヤーの整備用に儲けられた作業場にくあ階段が見えるか？あそこを登れば、リーヴがいる上方の踊場へたどり着ける。マガス・マッガーナが起動した際、奴の手に発信機らしきものが見えた。それを使えば無傷でアレを停止させられるかもしれん。』

タイラーはそう言つて、ブラック・ハーツを手にとると、俺を庇うように前に立ち言葉を続けた。

『防戦に徹すれば我々だけでしばらくもつ。その間に、なんとか奴の手から発信機を奪ってくれ。』

言い終えると同時に駆け出す銀髪のローグスの英雄。

『任せろ！』

俺はタイラーと殆ど同時に、指示された階段に向かって全力で走り出した。

ドオオオンッ！！！！

背中から聞こえてくる爆撃音と、体を感じられる熱風。

注意を引きつける為、囹の役割に徹しているタイラー達のためにも、一秒でも早く目指す場所へたどり着くべく、両脚を動かす。

(……くそつたれ、目が……)

黒いキャストに切り裂かれた脇腹や、銃撃を浴びた体の各所から血が流れ続け、走りつつける俺の視界が歪む。

《自分で決めた誇りや意地だ》

悲鳴を上げる自身の体を叱咤すべく、いつかのあの人の言葉を強く思い浮かべる。

(諦めてたまるかよっ!!!!)

四肢に全力で気合いを込め直し、俺は飛ぶように階段を駆け上がって行った。

『……忌々しい、貴様、なぜここまで私の邪魔をする!』

階段を登りきり、息を乱しながら眼前に姿を現した俺を見て、しわがれた声の反逆者は憎しみのこもった瞳を向けてくる。

ナノトランサーから剣影を取り出した俺は、声も発しないまま、目の前のビーストに斬りかかった。

『っ！単なる傭兵ごときがっ！なめるなっ！』

リーヴはそう叫ぶと、自身も片手用のセイバーを取り出し、こちらの斬撃に剣をあわせてきた。

ギイイインツッ！！！！

女キャスト達との連戦、無数のビーストやマシナリーとの戦闘によって体力の限界を迎えていた俺の腕には、思うような力が入らない。

『……ぐっ！』

苦悶の色が隠しきれない俺の顔を見て、リーヴが口元を歪ませる。

『無理はいかな。さすがに限界だろう……まさか彼女達を倒してくるとは、君には本当に驚かされたが、それもここまでだ……今すぐ楽にしてやる！！』

もはやこちらに戦う力がないと見たか、リーヴは交わした刃に力を込め、そのまま俺を斬り捨てようと勢いづいてきた。

刹那。

『舐めてんのはてめえだっっ！！！！！！！！』

全身から溜め込んだ怒りを解き放ち、敵の刃を鞘で抑え、俺は空いた右腕の刀身でリーヴの両腕を一気に切り落とした。

『がっ！！ぐああああつつつ！！！！！！！！！！』

失われた両腕の、肘の先から血を噴き上げながら、ローグスの反逆者が絶叫を上げる。

俺は悲鳴を上げて倒れ込むリーヴを無視し、切り離された奴の腕から、タイラーが言っていた発信機を奪うべくしゃがみ込んだ。

『ぐっ、ぐうう、……………む、無駄だ……………それを使って停止させたところで、…………アレはその瞬間に爆発する…………』

発信機を見つけ、一瞬安堵した俺に、苦痛に耐えながらも嘲るような笑みを浮かべたリーヴの言葉が響く。

悔しまぎれのハッターと断じたかったが、その言葉に込められた奴の愉しげな響きが真実味を帯びており、俺の動きは止められていた。

『てめえ、どこまで腐ってやがる！！』

目の前の男に血が沸騰するような怒りを覚える。
もはや殺意以外の感情を向けることが出来なかった。

そんな俺を愉快げに見つめた後、リーヴが語り出した。

『…ふっ……………ははっ……………ぐっ……………貴様のような部外者に……………どう思われようと構うものか……………あの女は……………ここで死なねば……………ならんだ……………ローグスの……………組織としての真実の完成の為に……………』

両腕を失いながらも、リーヴの瞳には強い決意がまだ見えた。

この男の望みは、今、シアリーの死にしか向いていない。

『……ふはっ……ははは！ぐっ……そら、貴様の手で……あの女を楽に……してやればいい……ドン自身の手で殺してもらうのが一番だったが……無関係な傭兵に奪われるというのも……あの方が情の不要さを悟る為には……相応しいかもしれん……』

切断された腕から血が失われていくことで、陰鬱な男の顔色は死人のそれに近くなっていた。

死神の囁きとも思える男の声に、俺は改めて胸に刻んだ誓いで答える。

『俺が守ると決めたんだ。てめえが何をしようが、俺はその全てを打ち砕く！！』

踊場から見える格納庫の下方では、いまだに巨大機動兵器と死闘を繰り広げるタイラー達ローグスの姿が見える。

『来やがれデカブツ！！！てめえの相手はこっちだ！！！！』

叫ぶと同時にオブシディアンを取り出した俺は、挑発するようにマガス・マッガーナに向けて発砲する。

タイラー達に砲身を向けていたその機動兵器が、こちらに気がついたようにホバリングしながら移動してくる。

『おおおおおっ！！！！！！』

俺はオブシディアンから剣影に装備を変えると、雄叫びを上げて踊場から全力の跳躍を行った。

『貴様！何をっ！？』

後方から響くリーヴの動揺の叫び。

こちらを狙って飛来してくるマガス・マッガーナからの銃撃を、氣力を振り絞って展開したシールドラインで防御し、シアリーのいる搭乗席に向け宙を駆ける。

『つつらああああつつつ！！！！！！！』

視線の先に見えるのは、泣きはらした顔を驚愕させ、こちらを見つめている守るべき女。

『下がれええつつ！！！！！！！！』

絶叫と共に、渾身の力を込めた斬撃を、彼女を捕らえ続ける搭乗席の強化ガラスへと叩きつける。

ズガアアアアンツッ！！！！！！！！

フォトンをもとった刀身は、俺の意志に応えるように、透明の牢獄を切り裂き、木っ端微塵に打ち砕いた。

『フッ！！！！！！！！』

刀身をぶつけた反動で、空中に投げ出されようとする体を抑えるべく、即座に左手の鞘を紅の機体の首もとに突き立てる。

『シアリー！！来い！！！！』

役目を果たし終えた刀身を投げ捨て、鞘で機体にぶら下がったまま、空いた右手を搭乗席の方向へ強く差し伸べると、奥から涙を流した女ローグスが姿を現し、この胸に飛び込んできた……………

『…………馬鹿な…………馬鹿な…………こんな筈が…………こんな結末が認められるものか』

階下では、シアリーを救出し終えたタイラー配下のローグス達が、マガス・マッガーナに一転して果敢な反撃を行っている。

紅の巨大機動兵器は、いまだ抵抗を続けるものの、人質という枷がなくなったローグスの精鋭達によって、徐々に破壊されていった。

『……………』

リーヴが人柱と定め、死ぬはずだった女ローグスは、自身を救出した赤い髪の傭兵と共に格納庫の隅へ避難し、いまだ健在な姿を見せている。

『……馬鹿なっ!!』

目の前に広がる光景を信じる事が出来ずに、リーヴは震える声で何度も呟いていた。

『……この状況を見ても、お前は「情」が不要なモノだと言うのか?』

突然自分に向けられた声に、リーヴが力を入らない体で視線を向ける。

『……ドン………』

視線の先には、自分を冷たく見下ろす若きローグスの英雄の姿があった。

タイラーは、両腕を失い、血だまりに横たわるリーヴを見ても、顔色を変えず淡々と語りかけてきた。

『「情」が甘さであり、つまらないしがらみだとお前は言ったな。だが、シアリーを救い、我々がお前に勝利できたのは、あの傭兵がみせた仲間に対する「情」の強さ故だ。』

そこまで言ったタイラーは一瞬だけ瞳を悲しみの色に染めた。

『私は全ての仲間に、そういった強さを持って欲しいと望み、信頼をもって応えているつもりだ。……かつて、お前にそうしたように。』

死人の顔となりつつあるリーヴが、その言葉に顔をゆがめる。

解っていた。

配下となったあの時から、自分が目の前の男に心酔した本当の理由。

自分も含め、ここまで周りを惹きつけるのは、単純な力などではない。信念を貫き通し、己の手で全てを守ろうとするその誇りと優しさ、彼の強さを裏付けているのだ。

しかし……

『ドンよ………それでも、……例えそうであったとしても、それだけでは救えないモノが厳然と存在するのです。……甘さは一部の愚者にとっては貴方に付け入る隙に見えることもあります。指導者である貴方が、部下一人の為にその身の危険を省みない姿勢では、いずれ狂った野獣達の餌食になるのが目に見えている……』

リーヴは暗くなっていく視界を、必死に押し止めながら、自分が敬愛した一人のローグスに語り続けた。

『……あの傭兵がここにいる以上、船内に……幾人かの……女キャス
トの死体が残っているでしょう。……それをしかるべき機関でお調
べ下さい……貴方を狙う存在は……まだ他に残っております……』

リーヴの言葉を聞いたタイラーが、僅かに眉をひそめた。

『それが今回のお前の協力者か？』

タイラーの問いかけに、リーヴが自嘲的な笑みを浮かべる。

『お気づきでしたか……連中にとっては私は駒に過ぎないでしょう……最も、私も自分の目的の為に彼らを利用しただけですが……』

そう呟いたリーヴは、自分の体の感覚がなくなっていくことを感じていた。流れ出る血のせいで、寒さを覚えていた感覚すら、今ではもう分からない。

『……愚かなる反逆者リーヴよ。いかなる理由があろうと、私はモトゥブの民を傷つけ、私の家族を手に掛けたお前を許すことはない。』

死にゆくビーストを見つめながら、タイラーが語りかける。

『だが、己の命をかけて、我らローグス全体の未来を憂いた一人の同朋がいたことを、私は決して忘れないだろう。』

静かな瞳でつぶやかれたその声を聞いて、リーヴの瞳から一筋の涙が零れる。

『感謝致します………』

その言葉を最後に、しわがれた声のビーストの反逆者は、二度と目覚めることのない、深い眠りへと落ちていった。

冷たくなったリーヴを見下ろしながら、タイラーはただゆっくりと自分の瞳を閉じ、遺された言葉の意味を一人噛みしめていた……

『じゃ、アタシはそろそろ行くね。次はパルムだから、約束の時間には遅れないよーにね？依頼人側とはアタシも初めての付き合いだから、第一印象で悪い感じ与えないよーに』

そう言って笑顔を浮かべたソアラが、自分のフライヤーに乗り込んで行く。

船体に施された相変わrazのショッキングピンクのハートマークと、『愛の情報屋』という宣伝文句に苦笑がこぼれた。

街の郊外に停泊中のマイシップの前で、飛び立っていく緑の瞳の情報屋を見送る。

リーヴの船での激闘からはや一週間。

俺は相棒と共にタイラーが手配したダグオラ・シティの医療施設で体を癒やした後、退院には早すぎると引き止めるローグスの医者 of 静止を振り切り、今、モトウブから旅立とうとしていた。

ソアラが何やら割のよい依頼が振られてきたと、俺達に仕事の話を持ち掛けてきた為だ。

何でも海底から未開のレリクスが発見されたとかいう話らしい。

レリクスと言えば旧文明が遺した失われた遺産だ。

ロストテクノロジーで作られた強力な武器や、革新的な技術発見があることも考えられる。

ソアラからめったに無い大きな儲けのチャンスと聞いた俺は、苦笑する相棒を説き伏せて話を受けることを決めた。

医者は無謀だと怒っていたが、こちらの回復力を舐めてもらっては困る。一週間、十分な睡眠と適切な治療。さらには栄養ある食事の摂取で、俺もヘンリーも戦闘に支障のないレベルまで回復していた。見舞いに来たガーディアンズのレオジーニョが、こちらのタフネスぶりに呆れたように笑っていたのを思い出す。

『うっし、ヘンリー、俺達も行くとするか。パルムの座標設定頼むわ。』

ソアラが去ったのを見届けて、俺は隣の相棒の肩を叩き、マイシツプに乗り込もうとした。

『……本当にいいんですか？何も挨拶しないで去っては、彼女傷つくと思いますよ？』

ヘンリーがこちらを咎めるような視線で言葉を返してくる。

『どアホ。妙な氣遣いすんなっての。報酬は貰ったし、なんだかんだで依頼は完全達成。心残りなんざ何もねえだろが。仕事をこなした傭兵は、ただ去るのみ、だ。』

普段無粋なくせして、妙なところで気を回してくる相棒。

俺は肩をすくませ、次の目的地へ急かすようにマイシップ「オルシナス号」を指差した。

『アレのローンだってまだ残ってんだ。馬車馬のごとくギリギリ働かねえと、すぐに干上がっちゃう。』

我ながら情けなくなる自分達の経済状況。

本当に自分達がSランクまで請け負う腕利きの傭兵なのかと自信がなくなってきたてしまう。

『ああ、その足しにしようと、私も実は一件、個別に依頼を受けてるんですよ。』

初耳すぎる相棒の発言に、慌てて振り返る。

『おまつ、仕事の話請けるときは、お互いに必ず相談する決まりだろーが。なに勝手な真似しちゃっててくれるの？』

長年守られてきた仕事のルールをあっさり破ったと告げられ、呆れて相棒を問いつめる。

本当に珍しい。いつもと立ち位置が逆だ。

『安心して下さい。何も危険なことの無い、本当にささやかな依頼でしたから。こうして後数分ほど、あなたと話をして引き留めておくだけで良いそうです。』

狼狽している俺をイタズラっぽい笑みで楽しげに見つめてくる相棒。

『??.?』

意味不明な発言に、相棒に治ったはずの傷の具合を聞こうとした時、青い外装の向こうから、砂煙を上げてこちらに走ってくる一台のフロードーバイクが目に入った。

『……てめ、はめやがったな。』

恨めしい声で笑顔を浮かべている相棒に文句を言う俺。

遠目からでも見て取れる。

バイクに乗っているのは、金の長髪をなびかせた、美しい女ローグスだった。

『アナタがこんなにつれない人だったとは驚きだわ。』

フローダーバイクを目の前に停め、こちらに歩いてきたシアリーが、開口一番そう呟いて、不機嫌極まりない顔を向けてくる。

ヘンリーは彼女が来たと同時に、「ミッションコンプリート」と笑って呟きをこぼし、そそくさとマイシップの中へ消えていった。

……後で外装にマジックで、でかかど「裏切り者」と書き込んでやる。

相棒への制裁の方法を思案していると、シアリーが表情を変えずに問いかけて来た。

『確かにほんの数日の付き合いではあっても、私はアナタをかけたえのない大切な仲間だって思ってたんだけど。これは私の独り善がりだったのかしら？』

美人が怒ると迫力があるというのは紛れもない真実だ。

俺は頬を指で掻きながら、視線を逸らして言い訳を試みる。

『いや、ほら、君もローグスの仕事があんだろ？俺達の見送りなんかで、忙しいそっちの手をわずらわせるのも、わりいかなあと思ったりなんかりして……』

しどろもどろになりながら、必死に事態を打開する方法を考える俺。ぶっちゃけ、女性を相手取って口論するなんて、ハナから勝ち目の無い戦いだ。

どんな理由があろうと、自分の行動のせいで怒らせた女を、口で丸め込むすべは、これまでの傭兵稼業で学んだことの中に含まれていない。

あたふたと冷や汗をかく俺を、冷ややかに見つめたまま、シアリーが話しかけてくる。

『命の恩人に不義理を働くような真似したら、私がタイラーに叱られちゃうわ。病院を勝手に退院して、その足でモトウブからいなくなろうとしてるってヘンリーから連絡もらって、必死に慌てて飛んできたのよ?』

気を利かせた相棒に対し、与える制裁はマジックを油性のモノにしようとして一人固く決意した。

『あー、なんだ、ほら、君も病み上がりだろう。あまり無理させたくないかったんだよ。』

往生際悪く、バツが悪そうに呟く俺をしばらく無言で見つめたあと、突然シアリーがくすくすと笑い出した。

『……ふふふっ、ごめんなさい。ちょっと意地悪しただけよ。悲しかったのは本当だけど、ヘンリーから理由も聞いているから、怒ってなんかいないわ。』

一転して、柔らかな笑みを浮かべる美人の女ローグス。

俺は肩から一気に力が抜け、うつむいて相棒に文句を呟いた。

『あのバカ、喋っちまったのか……黙っとけって言ったのに。』

一週間前、リーヴの船で、マガス・マツガーナから捕らわれの彼女を救い出した後、俺は体力の限界を越え、その場で意識を失った。

目覚めた時はタイラー達に運び込まれた医療施設のベッドの上だった訳だが、そこで、救出されたシアリーも自分同様意識を失い、入院したことを聞かされた。

彼女の場合、外傷は無かったが、捕らわれの身となり仲間達に負担を掛けたこと、また、自分の部下達が皆殺しにされたことによる精神的ダメージが大きく、しばらくは口も聞けない状態だったという。

タイラーやソアラの看護によって、ようやく復調の兆しを見せたとは聞いていたが、そんな彼女の前に、忌まわしい事件に直接大きく関わった俺やヘンリーが姿を現せば、否応なく負った心の傷を抉ることになるかねない。

そう判断した俺は、タイラーにだけ次の仕事が入った事情を話し、報酬を受け取り、こうして、逃げるように旅立とうとしていた。

まあそんなこっぴどかしい俺の思惑も、相棒の裏切りによって台無しとなった訳だが。

『……どうして？』

うなだれている俺に、シアリーが静かに問いかけてくる。

『どうしてアナタは私の為にここまでしてくれたの？……タイラーから聞いたわ。リーヴの船に乗り込む前に、彼から手を引くように』

言われても、食ってかかって承服しなかったって……」

ランデイル号でのタイラーとのやり取りを思い出す。

………参ったな。こんなこと言うのは柄じゃないんだが。

真剣な瞳で見つめてくるシアリーに対し、ごまかしが無駄と判断した俺は、あの時タイラーに告げたセリフをもう一度繰り返した。

『……君が俺と同じだったからさ。……追うべき背中があって、なりたいと思った理想の姿を持った君が、今の自分と重なったんだよ。』

まぶたを閉じて、憧れたあの人の背中を思い浮かべる。

真剣な面持ちで俺の言葉を聞くシアリーに、自分が抱えている理想を告げる為、俺は話を続けた。

『……五年程前まで、俺とヘンリーは二人だけでなく、あと他に三人、五人組みでパーティーを組んで傭兵稼業をしていたんだ。……その内の一人が、俺に戦い方を教えてくれた師匠な訳なんだが、その人は孤児だった俺と、別のもう一人の仲間を養子にしてくれて、文字通り父親として色んなことを教えてくれた。』

閉じたまぶたの裏に、当時の情景が蘇る。

『……その人は今はどうしてるの?』

大切な過去に想いを馳せている俺に、シアリーが話しかけてきた。

『…………死んじまった。…………ああ、気にすんなよ？ 傭兵なんてヤクザな仕事を続けてれば、天寿を全うできる人間の方が珍しいさ。』

俺の返答に慌てて謝ろうとするシアリーに、苦笑しながら手を振る。

『結局、親父が死んだことでパーティーは解散。今は俺とヘンリー以外の他の二人も、それぞれ自分の生き方を貫いている。ただ、俺は今でも、親父のようになりたくって、あの人と同じ傭兵稼業を続けてるのさ。』

我ながら、女々しい自分に呆れてしまう。

『あの人が居なくなった今、どれだけ追いかけた所で、肩を並べることもなんて出来やしない。そんなことは百も承知しているが、俺にとって「ヒーロー」そのものだったあの背中では、今でも俺が目指したい目標なんだよ。』

いや、全くガキっぽいことこの上ない。

恥ずかしさに逃げ出したくなるが、自分が父親に憧れたように、ローグスの英雄の姿を理想としている同じ志を持った女性に、俺は激励を送りたかった。

『だから、君も今のまま、目指したい道を進んで欲しいのさ。俺はもうあの人に認めてもらうことはないけれど、君の理想は今も君のそばで道標になってくれている。いつかあのクールな旦那に、お前には叶わないって言わせるぐらい、イカした女になってくれよ。』

額に十字傷を持った、精悍な顔つきのローグスの首領の顔を思い浮かべる。

あの男の背中を追いかけるなら、彼女も必ず今以上に、仲間から慕われる大きな存在になれることだろう。

『……あー、こっばずかしい。こんなセリフ、ヘンリーに聞かれたら一生からかわれちまう。頼むから他の人間には内緒にしといてくれな?』

間違いなく真っ赤になっているだろう自分の顔を見られないよう、シアリーに背を向ける。

やれやれ、いい年した大の大人だつてのに、情けないったらない。

伝えるべき言葉を全て伝え終えると、俺は次の仕事に向かうため、船へと歩きだそうとした。

その時……

『?!?!?』

突然、背中から抱き締められたことに狼狽する俺。

無言で俺の話に耳を傾けていたシアリーが、いきなり駆け出して体を寄せてきていた。

『?!!? どうした?』

自分を抱きしめてくる手の力の強さに驚いた俺は、顔が見えないシアリーに問いかけた。

『……アナタやっぱりバカでしょ？認められることがないなんて、そんな訳ないじゃない。』

震えている声から、彼女が涙をこらえていることがうかがえた。

狼狽を続ける俺を落ち着かせるかのように、シアリーは再度、俺を強く抱きしめて言葉を続けた。

『あの時……リーヴに紅いマシナリーの中に閉じ込められて、タイラー達ローグスの家族達と戦わされた時、私は死にたい程無力な自分を責めていたわ。どんなに偉そうなこと言った所で、結局私は皆の足を引っ張ることしか出来ないって。』

静かな口調で語り続けるシアリー。

『でも、飛び込んでくるアナタの姿を見て、私は思ったの。タイラーと同じように、ここにも命がけで信念を持って戦っているヒトがいるって……勝手に諦めて、自分に絶望してる場合じゃないって……弱い自分を嫌う前に、少しでも戦う心をもたなきゃいけないんだって……』

モトウブの荒野に、柔らかな風が吹く。

『例え誰に認められなくても、世界中の誰が否定しても、アナタが

目指したヒトの代わりに私が言ってあげる……』

《……私の目に映ったアナタは、紛れもなくアナタが言う「ヒーロ
ー」だったよ》

囁きと同時に俺の体を優しく包み込んでくる温もり。

追いつけるあの背中に、少しは近づけたのだろうか。

モトウブの大地に立ちすくむ俺は、自然と涙が溢れそうな強い喜び
に包まれていた。

第九話 〵終局〵（後書き）

第一章、モトウブ編、やっつと完結！！！！

いかがでしたでしょうか？

いやいや、しんどいしんどい。

何がしんどいかって、ラストの主人公とヒロインのやり取りです（笑）

あんなラブ臭漂う掛け合いにする気はサラサラ無かった筈なのに、気がつけばとんでもないことになってました。

こっばずかしくて逃げたくなったのは主人公ではなく筆者だったというオチ（笑）

約2日に一話という順調なペースを刻めたのは、100%駄文にお付き合い下さった、読んでくれる皆様方のおかげです。

特に、感想をくれたRED PEPPERさん、烏山さんのお二人には感謝してもしきれません。

とりあえず本作は第二章に入っていく訳なんです、ここで読んで頂ける皆様にご相談が……

実は、筆者が用意した本作のプロット、この先二通りほどあるんで

す。

一つは第一章で主役を張ったマース達が、引き続きメインを張っていくA案。

もう一つは、各章ごとに別の主役が登場する、ドラクエ?のようなオムニバス形式のB案。

どちらも辿るストーリーに大きな違いはないんですが、物語的に読む側の興味をそそのめるのはどちらだろうと悩みまくった結果、いっそ直接本作を読んでくれている方の意見を聞いちゃえと思った次第でして(汗)

無論、B案であっても、マースやヘンリー達は再度登場してきますが、この場合、文章の視点がマースではなく、別キャラのものになります。

A案なら逆にB案で主役予定のキャラが脇役として出てくる感じがすね。

PSUや、PSPシリーズを愛する一ファンとして、原作を楽しんでいる方と少しでも交流できたら嬉しい限りです。

ご意見、ご要望などございました、感想などで筆者に伝えてくれると涙を流して喜びます。

気が向かれましたら、何卒ひとつ宜しくお願い致します。

長文、駄文にお付き合い頂き、心から感謝を。

ではまた

、
(^ ^)

登場人物紹介？

登場人物紹介？

（オリジナルキャラクター）

ビツキー

種族…キヤスト

性別…女性

稼働期間…????

職種…レンジャー

主な使用武器

ライフル

愛用装備

インフィニットコランダム

ティーガ・ド・ラガン

ガルド・ミラ

外見・特徴

外装のメインカラーは赤。使用パーツはルカラルアーム、ルカラルトルソ、ルカラルレッグ。

顔立ちは少女の域を脱さず、髪型はやや暗めの金髪をおさげの形で

二つに分け、背中に流している。

幼さを残す外見とは裏腹に、非常に高い戦闘能力を有しており、リーヴ側の大きな戦力としてマース達と刃を交えた。戦闘終了後、機能停止していたところをタイラー達に確保される。外装の色違いの同型のキャストが確認されているが、タイラーが関連を調査する為、現在クバラ・シティにて拘束中。

筆者から一言

ロボ娘。ロマンがあります（笑）

実は彼女はヘンリーに続く、筆者の3rdプレイヤーキャラだったります。第一章の敵陣営を構成する際、ビースト連中やマシナリーだけではつまらないと、敵側に放り込んでみました。中身のモチーフはエヴァの綾波レイ。キャラ性格としては手垢つきまくりもいいたのですが、妙な性格づけして作品の雰囲気壊すのもアホらしかったのです。設定上、彼女は今後の舞台にも引き続き登場予定です。うまく魅力が引き出せるよう頑張りたいです。

リーヴ・クラウン

種族…ビースト

性別…男性

年齢…38歳

職種…ブレイバー

主な使用武器

セイバー

ハンドガン

愛用装備

セバ・ボンガ

ブドウキ・マガナ

外見・特徴

白髪・細い目、しわの多い顔立ちから、実年齢以上に高齢に見られることが多い。

他人に表情を伺われることを好まず、フードのついたローブを愛用する。

ローグスとしてサテライトベルト内の一つの小惑星を取り仕切る武闘派ファミリーの頭領だったが、突如反旗を翻す。反乱鎮圧時の戦いで死亡。

筆者から一言

プレイヤーキャラではありません。おっさんビーストを育てるのは筆者には無理（笑）

小説を書く際、敵の親玉として無い頭をこねくり回して作成したキャラクターです。

性格はオリジナルですが、外見のモチーフは大作映画、STAR

WARSの悪の皇帝、ダース・シディアスをイメージしています。

実は本作を読んだ友人から、「彼がわざわざ武力反乱を起こした理由がピンとこない」という切ないお言葉をもらってしまった為、反則的ではありますが、この場で簡単におさらい致します。

（本作の完全なネタバレですので、万が一この登場人物紹介から読み始めた方がいらしたら、先に本編をお読み頂ければありがたいです。）

まず、彼の反乱はぶっちゃけて言えば「狂言」です。リーヴはタイラーにローグス内の誰よりも心酔していました。しかし末端の部下にまで温情をかけるタイラーの在り方に、歯がゆさも感じていました。組織のトップなら、代わりが利かない自身の重要性を自覚し、必要であれば部下を見捨てる冷酷さも必要と思っていた為です。

そんなタイラーに対する危惧が、彼が主導して行っているという「モトウブ通商連合」復活の噂を聞いたことで限界に達します。（※タイラーが通商連合の復活を望んでいるのは公式設定です。）リーヴにしてみれば、圧倒的なカリスマであるタイラー以外に、モトウブの利権を握るような団体は不要なものでしかありません。

リーヴはこの機会に、タイラーに甘さを捨て、冷酷さを兼ねた、いわゆる「独裁者」になってもらう為、反乱の芝居を計画した訳です。

彼からの信頼をあえて裏切ること、さらに裏切った自分がダグオラ・シテイの住民やローグスの仲間を傷つけることで、タイラーの甘さが引き起こす悲劇というものを実感させようと思いました。

反乱の声明を出した際、作中でリーヴは数人のローグスの幹部に反乱への参加を呼びかけていますが、これもフェイクです。呼びかけた幹部達は、リーヴから見て今後タイラーを裏切りかねない、反逆者予備軍でした。仮に彼らが自分の誘いに乗ってきた場合、首謀者である自分が情報を操作し、反乱側の自滅を装って彼らを一扫する気でした。結果として、その反逆者予備軍でさえタイラーに敬服しており、リーヴの誘いを蹴ったので、不要な策となりましたが。

シアリーを人質として攫ったのも、通るはずのない無茶な要求を出し、彼女の命を見捨てるという選択をタイラーに経験させるのが本来の目的でした。しかしマース達の急襲により、計画はご破算。彼も目的を達せないまま命を散らす結果となった訳です。

めっちゃ長くなりましたが、以上が第一章、モトウブ編の下地ともいべきリーヴの心情です。

筆者が初めて考えた悪の親玉的存在ですが、彼は彼なりの信念を貫いた訳なので、キャラクター的にはお気に入りだったりします。

ご苦労様と言ってあげたいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1458y/>

～傭兵達の挽歌～ PSPo2i外伝

2011年11月29日12時51分発行